ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第51号

瓦谷遺跡の埴輪棺----------石井　清司・有井　広幸-----1

古墳出現前後の注口土器について----------藤原　敏晃----20

由良川中・下流域の第Ⅲ様式土器について・前編----------田代　弘----34

－平成5年度発掘調査略報－----------43

13. 女布北遺跡　　16. 八木城跡第3次・堂山2号窯跡

14. ジンド古墳　　17. 北尻遺跡

15. 山根古墳　　18. 山城国府跡第30次

研修だより　中国研修に参加して　－文化財保護研究者訪中団報告－---安藤　信策・辻本　和美　増田　孝彦・竹原　一彦----50

府内遺跡紹介　61. 宝菩提院廃寺----------54

長岡京跡調査だより・48----------57

センターの動向----------60

受贈図書一覧----------62

1994年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　瓦谷遺跡の埴輪棺

瓦谷古墳群・瓦谷遺跡　埴輪棺24出土盾形埴輪

瓦谷遺跡の埴輪棺

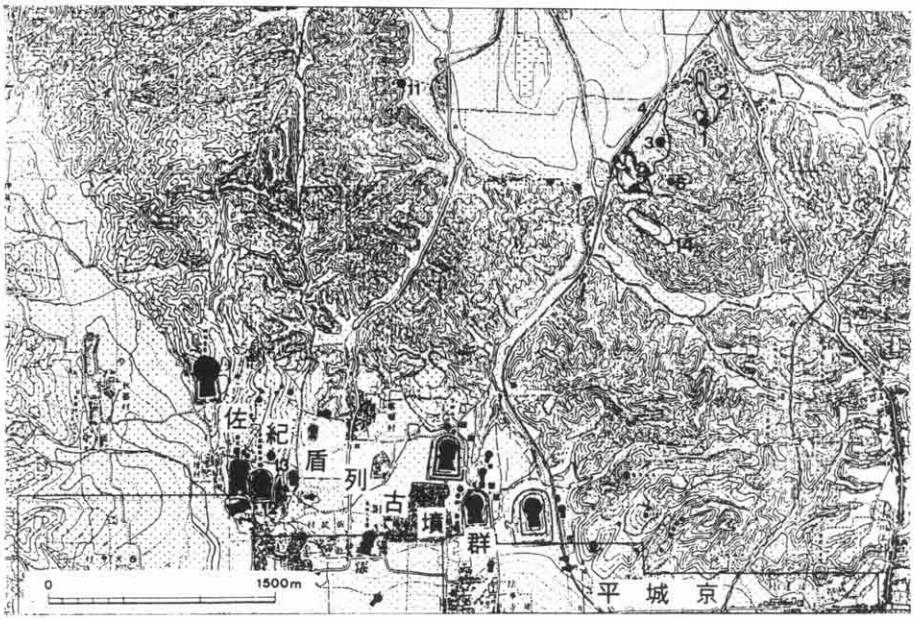
石井清司・有井広幸

1．はじめに

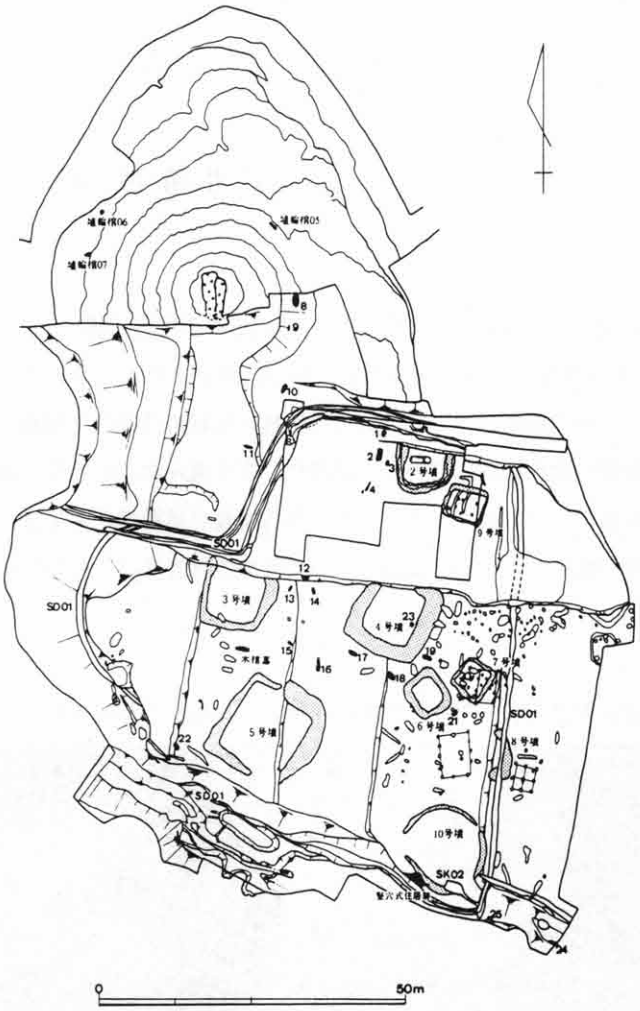
平成３年度に発掘調査を実施した瓦谷遺跡では、全長約48mの前方後円墳１基(瓦谷１号墳)と方墳８基、円墳１基を検出した。また各古墳の墳丘内及びその周辺からはこれまでに25基の埴輪棺を検出し、その概要については「瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の発掘調査」(注1)として略述した。その後埴輪棺の検出状態について一部図化作業が進んだため、今回は埴輪棺についてその検出状況を簡単に資料紹介する。なお、各古墳及び埴輪棺から出土した遺物(特に埴輪)は、現在整理作業中でありその詳細については後の報告書にゆだねたい。

2．調査の経過

瓦谷遺跡での埴輪棺の検出例は昭和61年度(1986年)に遡る。1986年、丘陵上部の20bt地



第１図　瓦谷遺跡(瓦谷古墳群)とその周辺の遺跡(『京都府遺跡調査概報』第51冊より転載)
1.西山塚古墳　3.瓦谷古墳群　5.上人ヶ平遺跡
12.佐紀陵山古墳　13.マエ塚古墳



第２図　瓦谷古墳群遺構略図

点で方墳１基とその方墳の西で、埴輪棺４基を検出し「古墳の周囲に群在する類型」であり、「多くが成人を埋葬するだけの規模を有せず単棺のものは、明らかに小児埋葬に供せられたもの」と指摘(注2)された。

1990年、20bt地点の北20mに位置する瓦谷古墳(注3)(後述する瓦谷１号墳)の発掘が行なわれ、後円部の墳丘裾部で３基の埴輪棺を検出した。３基の埴輪棺は、1986年と同様、円筒埴輪を使用したもの(埴輪棺05)のほか、墳丘部に立てていたものと思われる蓋形埴輪で円筒基台から笠部にかけての破片を巧みに打ち割って使用したもの(埴輪棺06)、特殊な壺形埴輪を用いたもの(埴輪棺07)がある。

1992年度は、瓦谷１号墳の前方部と20btトレンチを含めた丘陵端部全域(6,900m²)の発掘調査を実施し、先述したように、方墳８基・円墳１基のほか、新たに18基の埴輪棺を検出した。

３．埴輪棺

瓦谷古墳群が立地する丘陵端部では、総数25基の埴輪棺を検出した。

25基の埴輪棺は、大きくはＡ・Ｂ・Ｃの３つのグループにわけることができる。

Ａグループは、瓦谷古墳群のなかでも中心的な古墳である１号墳の墳丘内及びその周辺に近接してあるもので、瓦谷１号墳の墳丘に樹立していた埴輪を抜き取り、棺に使用した可能性が高い埴輪棺である。Ａグループには墳丘内にあるＡ-1グループと、墳丘の外側にあるＡ-2グループがある。Ａ-1グループには埴輪棺05・08・09・11が、Ａ-2グループには埴輪棺06・07・10がある。

Ｂグループは、瓦谷１号墳の盟主墳に対して従属した関係にある方墳(一辺5.2～13.9m)の墳丘内及びその周辺にある埴輪棺である。Ｂグループも墳丘内にあるＢ-1グループ(埴輪棺20・23)と墳丘をめぐる周溝の外側にあるＢ-2グループがある。Ｂ-2グループには埴輪棺01・02・03・04(２号墳周辺)、埴輪棺12・13・14(３号墳周辺)、埴輪棺17・18・19(４号墳周辺)、埴輪棺15・16・22(５号墳周辺)、埴輪棺21(６号墳周辺)がある。

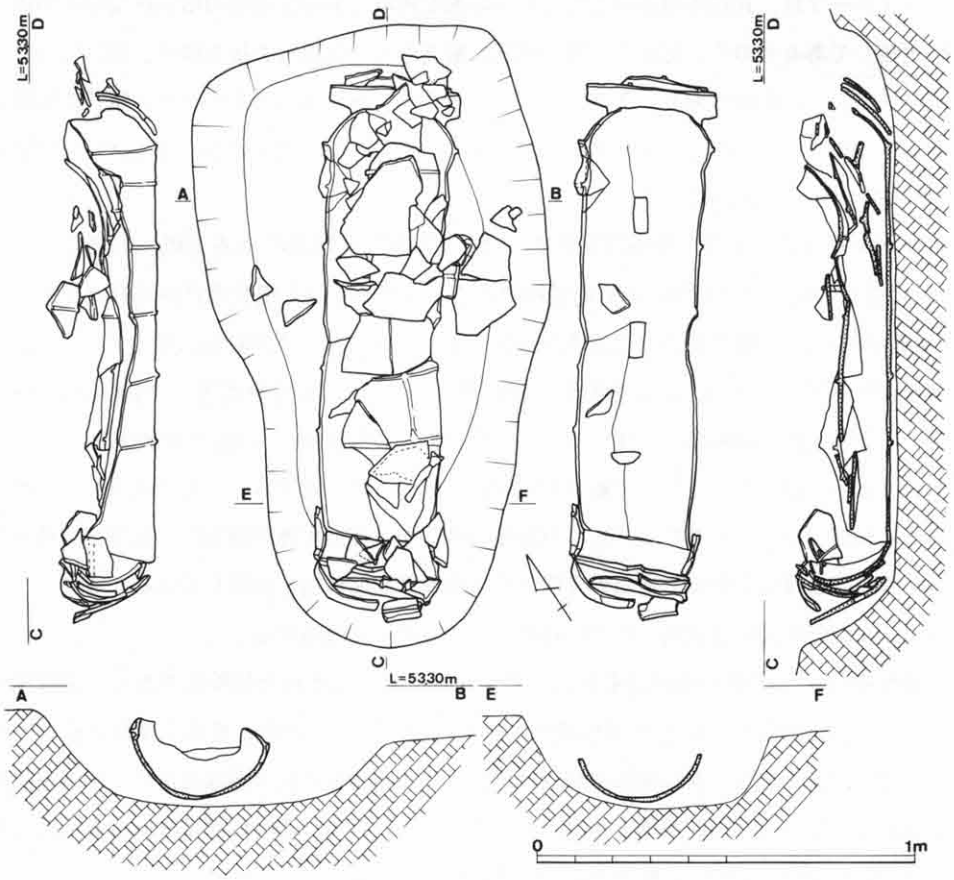
Ｃグループは、古墳からやや離れた位置にあり古墳に従属することなく独立した位置にある埴輪棺である。Ｃグループには埴輪棺24のほか、1993年度の調査でも瓦谷古墳群の立地する丘陵とは谷を挟んで南側の丘陵にも１基単独で埴輪棺を検出している。

以下、1992年度に発掘調査した埴輪棺について簡単に説明する。

埴輪棺08　１号墳の後円部東側斜面で墳丘裾近くに築かれた埴輪棺である。埴輪棺08は、墳頂部に築かれた中心埋葬施設の主軸にほぼ平行しており、墓壙の規模は長さ2.35m・幅0.93mを測り、他の埴輪棺に比べて大きい。棺本体の北半部は攪乱のため遺存状態が悪いが、ヒレ付き円筒埴輪を組合わせたものと思われる。北小口部はヒレ付き円筒埴輪を半截して使用している。棺内からは臼玉２点が出土した。

埴輪棺09　１号墳の後円部東側斜面で墳丘裾近くに築かれた埴輪棺である。埴輪棺09は１号墳の主軸とほぼ同じ方位を示す。墓壙は長さ1.13m・幅0.5m、検出面からの深さ0.14mを測る一段墓壙である。棺本体は円筒埴輪１個体を使用した単棺で、北小口部には棺本体と同一個体の埴輪片を立てて使用している。埴輪棺09は、墳丘斜面にあることから１号墳の構築以後に築かれたものと思われる。棺内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺10　埴輪棺10は、１号墳の西くびれ部から南西方向へ約５mの位置に築かれている。墓壙は長軸1.65m・短軸0.55～0.93m、検出面からの深さ0.25mを測る。棺本体は１個体のヒレ付き朝顔形埴輪を使用した単棺で全長1.15m・最大幅0.32mを測る。棺に使用したヒレ付き朝顔形埴輪は、口頸部およびヒレ部分を打ち欠いたのち、底部を南側に向け、方形の透し孔を墓壙の主軸にのるように据えられている。棺の両小口部分は、棺本体と同一個体の円筒部破片とともにヒレ部を利用している。棺内には枕等の施設がなく、遺体の頭部位置は明らかでないが、朝顔形埴輪の上部を北側に向けていることから棺の北側が頭位であったと考えられる。棺内からは副葬品は出土していない。なお、棺に利用され

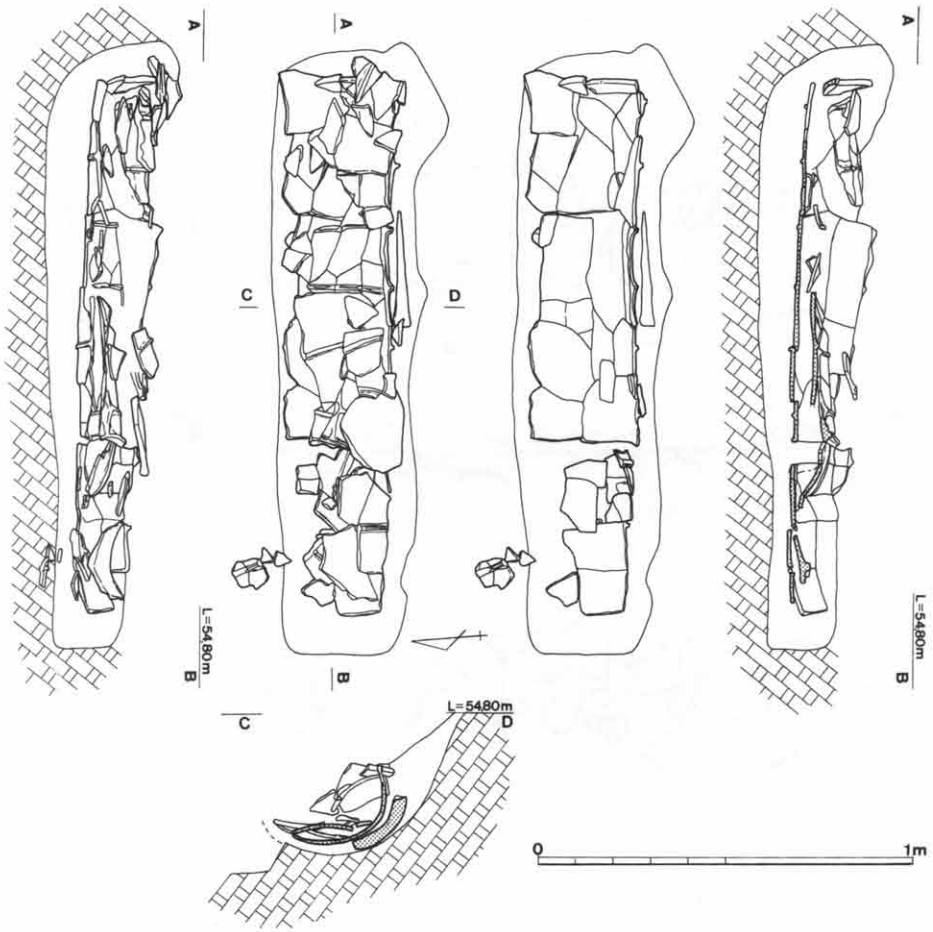


第３図　埴輪棺10

た埴輪と同一破片が丘陵の南側斜面(埴輪棺10から南へ約70mの位置)で出土している。

埴輪棺11　埴輪棺11は、１号墳の前方部東側で１号墳の主軸に直交する形で築かれた埴輪棺である。墓壙は長さ1.68m・幅0.55m、検出面からの深さ0.15mを測る一段墓壙である。棺本体は円筒埴輪２個体と直弧文を描いた盾形埴輪を利用した複棺である。円筒埴輪は基底部から口縁部まであるもの１個体と、口縁部を含む上半部を残して下半部を打ち欠いて棺本体の長さを調整した円筒埴輪からなり、棺の西端には盾面を下に向けた盾形埴輪片を枕に使用するかのようにやや傾斜をもたせて設置している。棺本体の埴輪は、遺構検出面から棺底まで浅く、その大半が大きく削り取られている。

埴輪棺11の棺の下には、一辺約10～20cm程度の大きさに破砕した円筒埴輪片を敷きつめている。瓦谷１号墳の東くびれ部付近で比較的まとまって出土した埴輪片のなかに埴輪棺11に使用された円筒埴輪と同一個体のものがあり、１号墳の墳丘に樹立していた埴輪を抜き取って埴輪棺として転用した可能性がある。



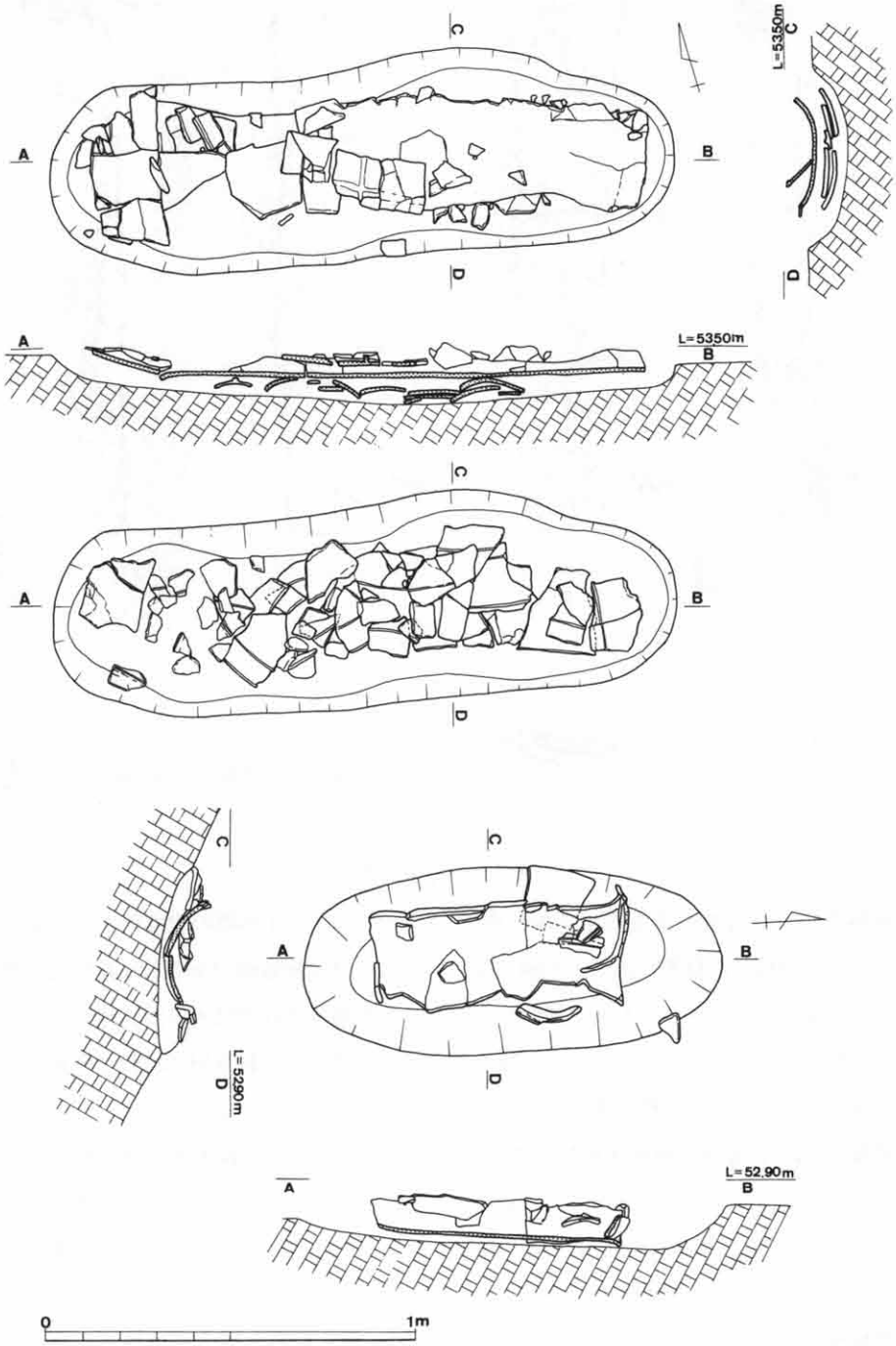
第４図　埴輪棺12

埴輪棺12　１号墳の前方部東隅から南東方向へ約15m、３号墳の北東隅から北東方向へ約５mの隣接した位置にあり、主軸を東西方向にむけた埴輪棺である。埴輪棺12は墓壙の大半が後世に削平されており、偶然にも埴輪のみが削平されずに残った状態であった。

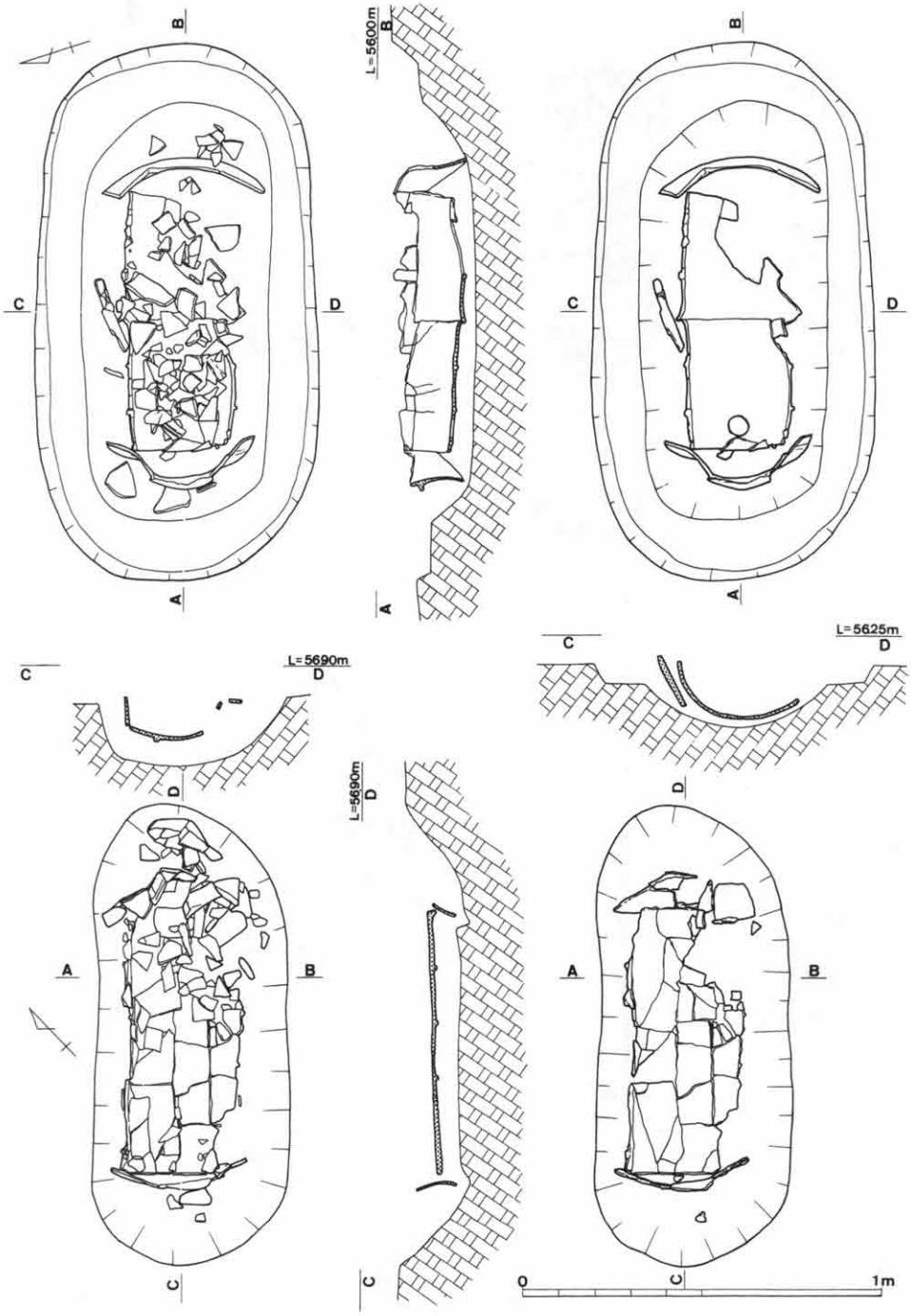
遺存する墓壙は、長さ1.6m・幅0.4mを測る。棺本体はヒレ付き円筒埴輪２個体をつないだ複棺で、小口部には棺本体と同一個体の埴輪片を使用している。

埴輪棺13　３号墳の東約４mにある埴輪棺である。棺の大半が大きく削られており棺底の埴輪片が遺存する程度であった。墓壙は現存長1.06m・最大幅0.44m、検出面からの深さ0.1mを測る。棺本体は円筒埴輪一個体を使用した単棺のものと思われるが遺存状態が悪く不明。棺内からは副葬品は出土していない。

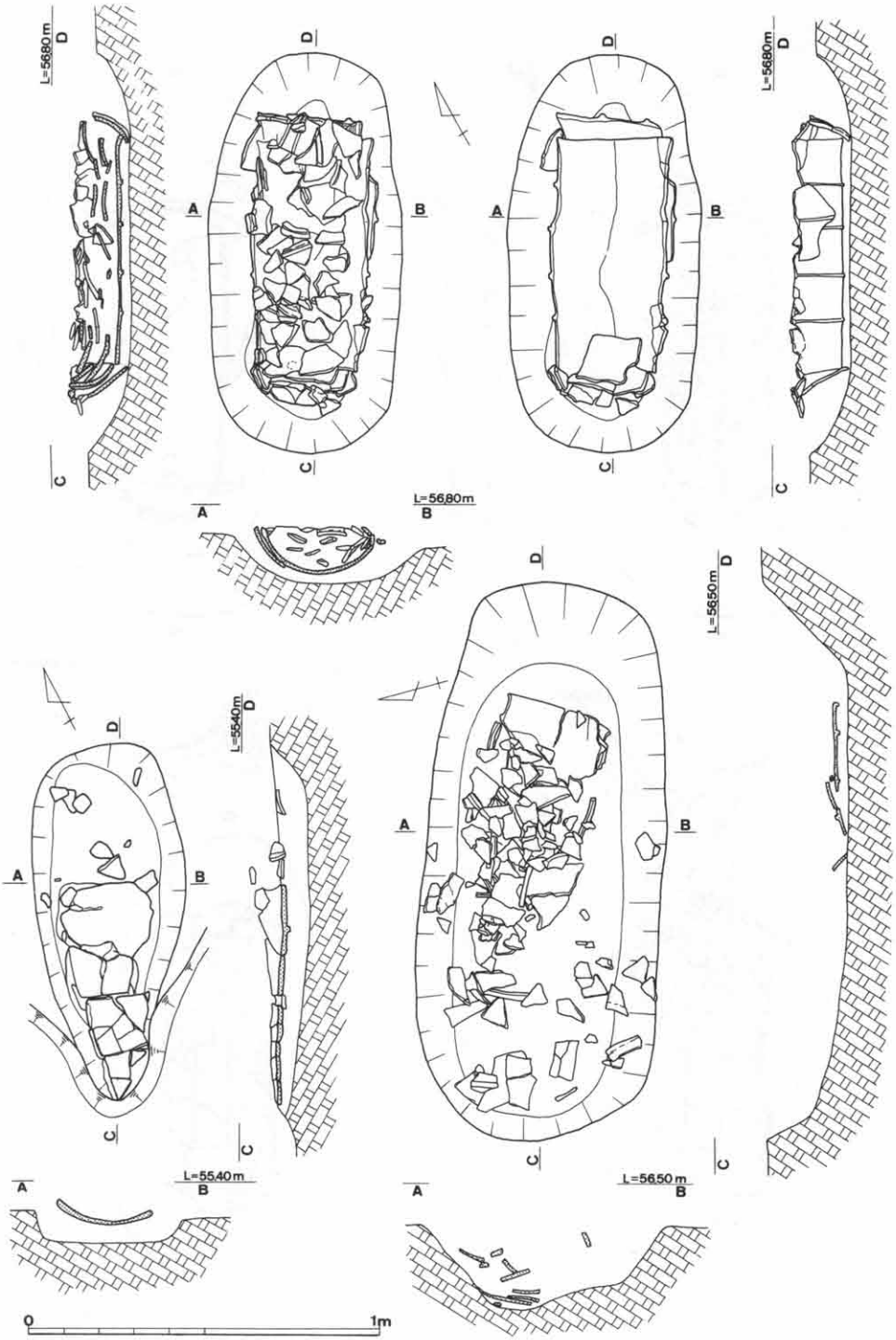
埴輪棺14　３号墳と４号墳のほぼ中間に位置する埴輪棺で、棺及び墓壙の南半部は後世に削り取られており墓壙長は不明。墓壙最大幅は0.56mを測る。棺本体は復元口径約



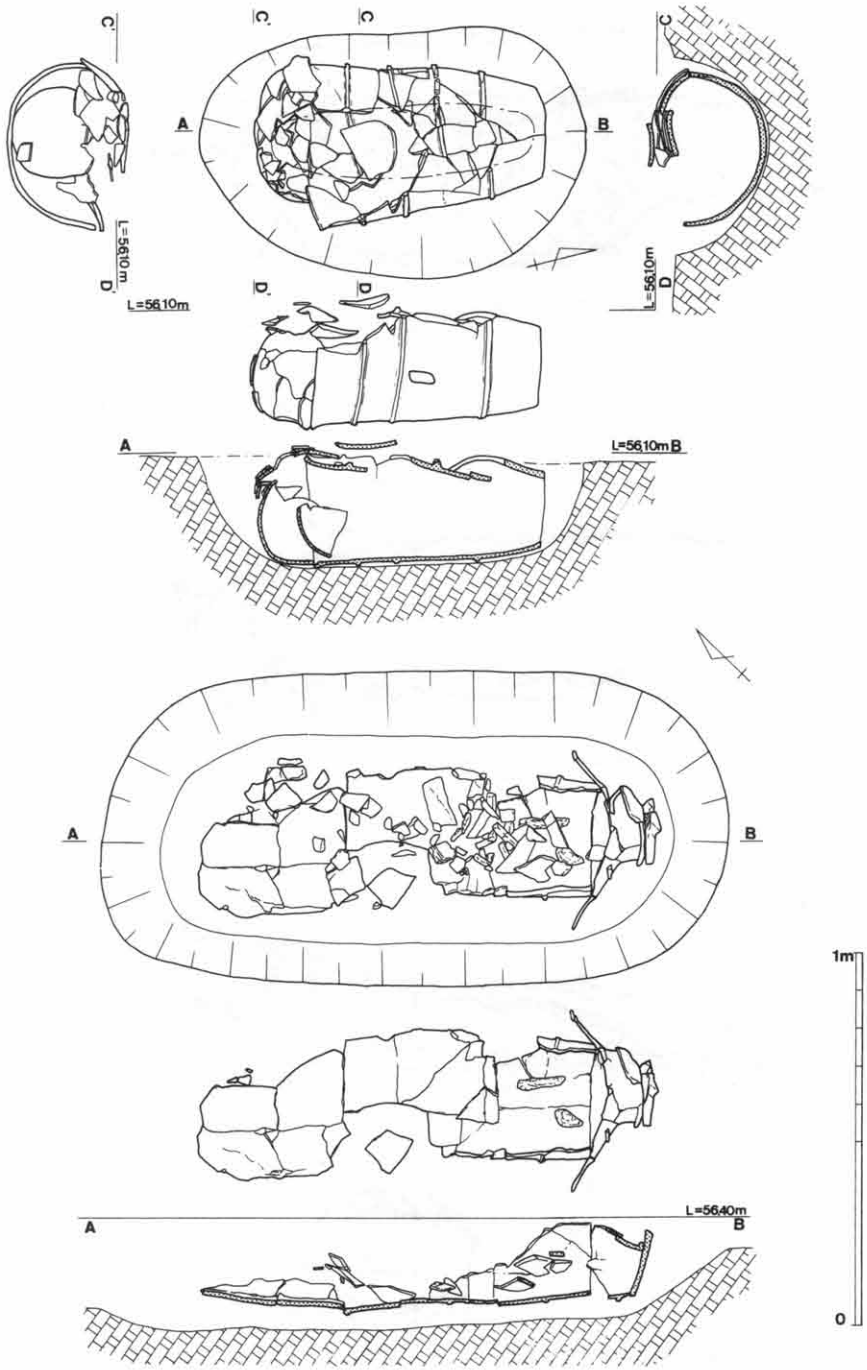
第５図　埴輪棺11(上)・９(下)



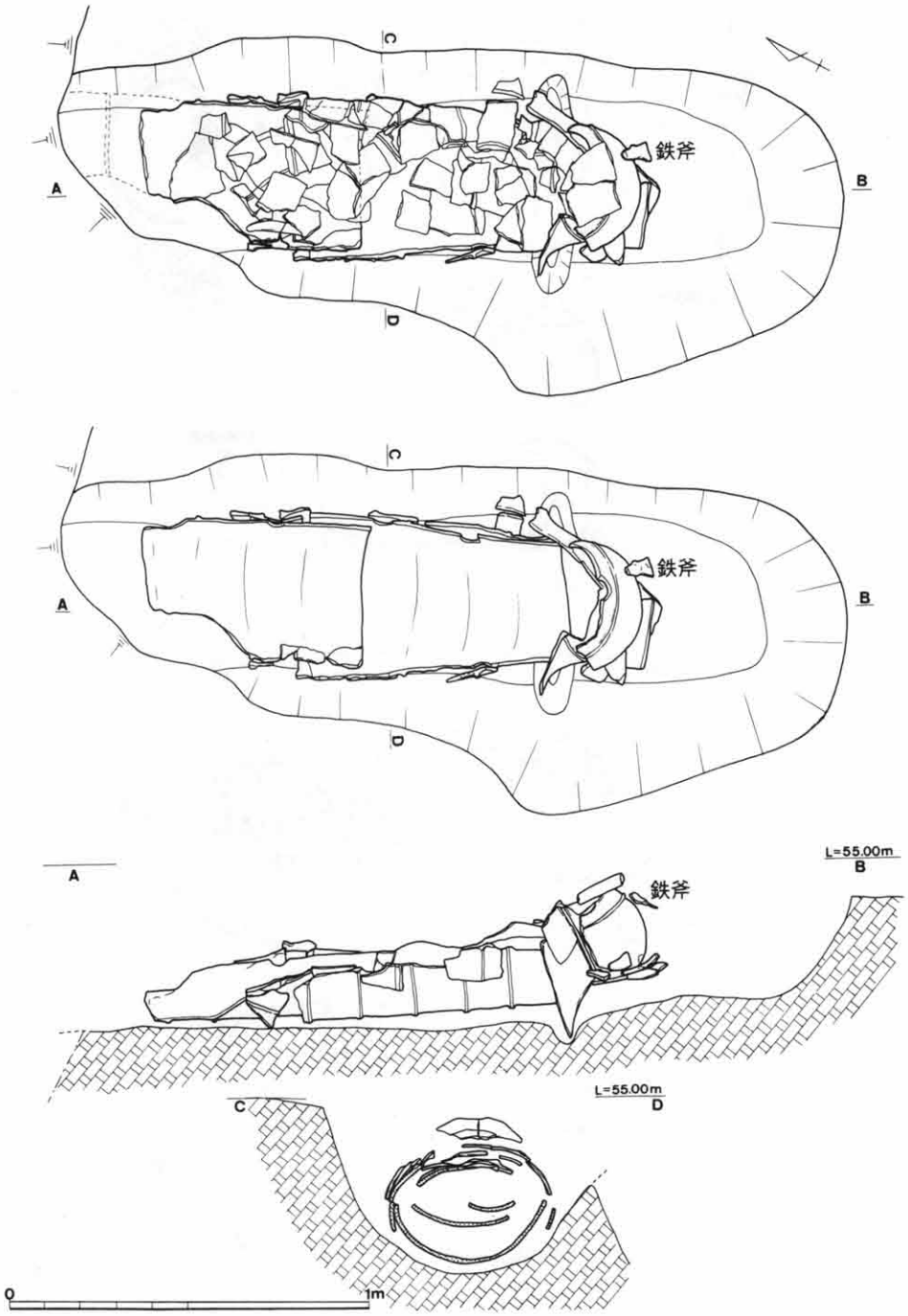
第6図　埴輪棺17(上)・21(下)



第７図　埴輪棺20(上)・13(左)・19(右)



第８図　埴輪棺23(上)・18(下)



第９図　埴輪棺22

28cmに対して残存高105cm(7段以上)の、細長い円筒埴輪1個体を使用した単棺である。北小口部は棺本体に使用した円筒埴輪の一部を正位の状態に据えている。棺内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺15　3号墳と5号墳の中間に位置する埴輪棺で、上面が大きく削られており遺存状態は悪い。埴輪棺15の墓壙は長さ1.30m・幅0.42m、検出面からの深さ0.25mを測る。棺本体は小形の円筒埴輪2個体を組み合わせた複棺で、棺の長さ0.9mを測る。棺小口部は円筒埴輪片を立てて使用している。棺内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺16　埴輪棺16は、台地中央部で4号墳と5号墳の中間にあり、墓壙の長さ2.88m・最大幅0.8mを測る。棺本体は、底部から口縁部まである円筒埴輪1個体と、棺の長さを調整するために口縁部から50cmの長さを残して打ち欠いた円筒埴輪からなる複棺である。棺設置に際しては透し孔を墓壙の中軸に据えた状態に置き、棺側面にあたる透し孔は埴輪片で塞いでいる。棺の全長は1.40mで、棺の北側には壺形埴輪(?)の破片を利用した枕がある。両小口部は朝顔形埴輪の口頸部を据え頸部の隙間には埴輪片で塞いでいる。棺本体の上面には埴輪片が折り重なった状態で出土している。棺内からは副葬品は出土していない。

棺に使用した円筒埴輪は円形透し孔をもち、瓦谷古墳群でみつかった埴輪棺のなかでは新しい特徴をもつ。

埴輪棺17　4号墳の南約2mで4号墳の周溝(南辺)にほぼ平行して築かれている。墓壙の長さ1.50m・最大幅0.79m、検出面からの深さ0.23mを測り、棺を設置する部分がやや深く掘り込まれた二段墓壙である。棺本体の長さ0.7mで、円筒埴輪2個体を使用した複棺である。棺本体に使用した埴輪は、口縁部を合わせた合口状を呈し、両口縁部の接合部北辺には蓋形埴輪の笠部分の破片を据えている。棺小口部分は朝顔形埴輪の口頸部を使用している。棺本体の合わせ部分に使用した蓋形埴輪は隣接する4号墳の周溝内から出土した蓋形埴輪と接合しており、4号墳に樹立していた蓋形埴輪の一部を利用していたことが明らかである。埴輪棺17の棺内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺18　埴輪棺18は、4号墳の周溝の南側で4号墳と6号墳の中間部分に位置している。墓壙は長軸1.7m・短軸0.84mの楕円形で、検出面から墓壙底までは約0.18mを測り、棺の遺存状態は悪い。

棺は、盾形埴輪1個体を盾面部分と円筒部分に半截したのち、棺の東側に半截した円筒部を置き、西側には半截した盾面部分を盾面を下にして置いており、遺存する棺本体の長さは1.05mを測る。棺の東小口部は、朝顔形埴輪の口頸部片を使用している。また、口頸部片の外側で頸部を塞ぐかのように、盾面を内側(朝顔形埴輪の口頸部側)に向けた状態で

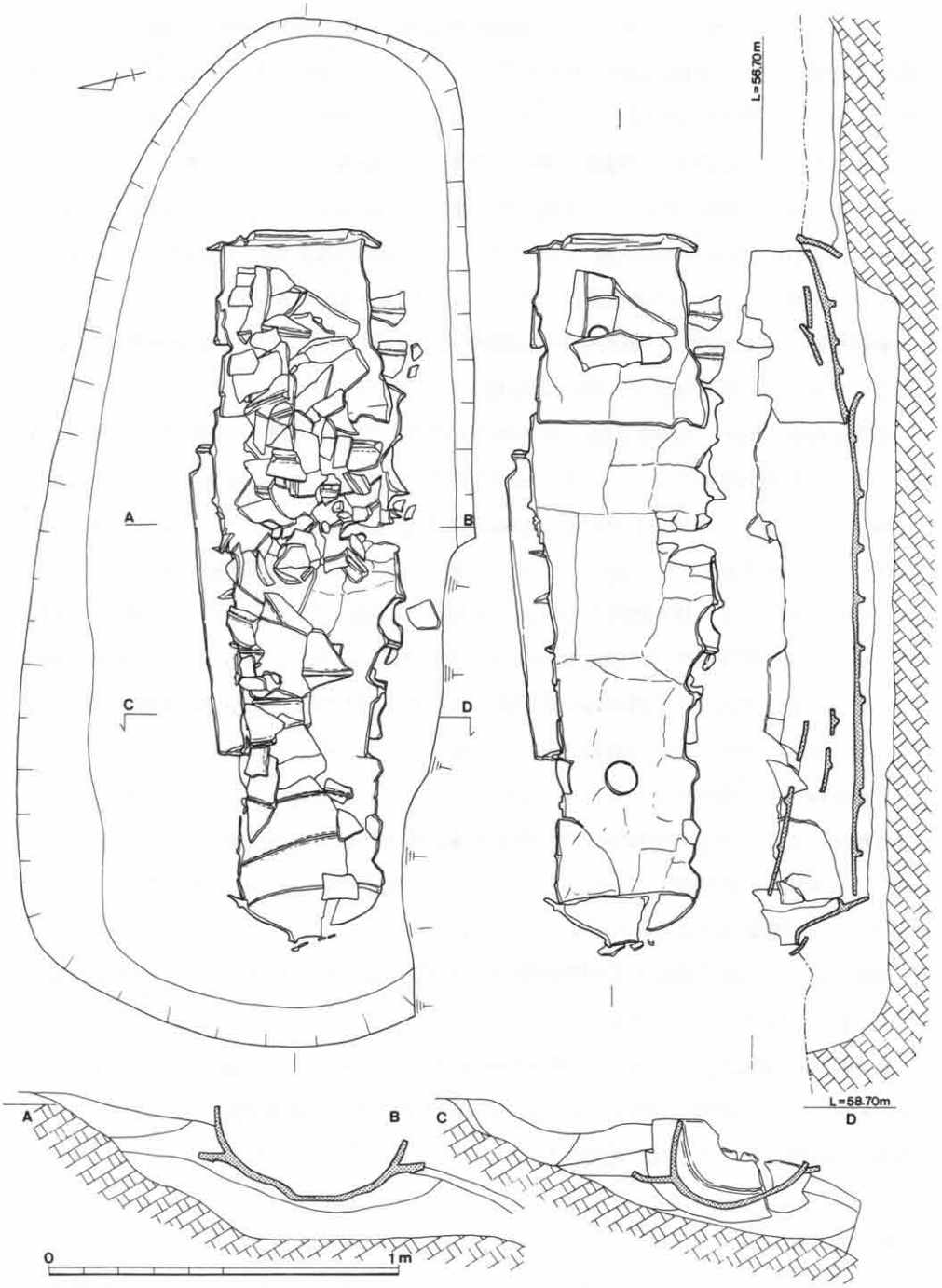
盾形埴輪片が据えられている。西小口部は遺存していない。棺本体部分の内側で東端(尾根上部側)に接して河原石２個が据えられており、枕に使用したものと思われる。棺内からは副葬品はなかった。盾形埴輪は線鋸歯文と菱形文を組み合わせたもので、基台の円筒部には方形透し孔がある。

埴輪棺19　４号墳の南周溝に近接している埴輪棺である。墓壙は長さ1.59m・幅0.68m、検出面からの深さ0.25mを測る。他の埴輪棺に比べて墓壙の検出面から棺底までは深いが、棺に使用した埴輪はわずかに東側半分に置かれていた程度で、墓壙の西半部は棺に使用されたような埴輪は遺存せず、上面に埴輪片が散布する程度であった。埴輪棺19は当初より被葬者の上面(東半部)にわずかに埴輪片を置いた程度で、全体では埴輪を棺として使用していなかったものと思われる。墓壙内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺20　７号墳の墳丘内中央で検出した埴輪棺である。墓壙は長さ1.14m・幅0.55m、検出面からの深さ0.18mを測る一段墓壙である。棺本体は円筒埴輪一個体を使用した単棺で、棺の全長0.65m・幅0.34mを測り、北側に口縁部を向けた状態で置かれており、円形の透し孔を塞ぐように埴輪片がある。小口部分は円筒埴輪片を破砕し、北小口部は一重に、南小口部は三重以上に重ねている。棺の上面には破砕した状態で埴輪片が散布していた。埴輪棺20は７号墳の周溝とほぼ同じ主軸方位を示し、墳丘中央部に配置されていることから７号墳の中心埋葬施設と思われる。棺内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺21　埴輪棺21は、６号墳の東約３mに隣接してあり６号墳の周溝辺とほぼ主軸を同じくする埴輪棺である。墓壙は長楕円形を呈し、長さ1.23m・幅0.53m、検出面からの深さ約0.2mを測る一段墓壙である。棺本体はヒレ部分を打ち欠いたヒレ付円筒埴輪一個体を使用し、両小口部分には朝顔形埴輪の口頸部片を使用している。棺本体のヒレ付円筒埴輪は口縁部を南西に据えたもので、棺全長は0.74mを測る。両小口部に朝顔形埴輪の口頸部片を据えるため、墓壙底を一部深く掘りくぼめている。棺内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺22　埴輪棺22は、５号墳の南面コーナーから南西方向に約５mの位置にある。この埴輪棺10の出土地点は調査前には田畑の畦畔部分にあたり、西側の低い部分は削平されていた。また重機による表土除去に際して一部上面を削平したため、埴輪棺の全体の様相は明らかでない。遺存する墓壙は長軸2.15m・短軸0.95mの楕円形土壙で、棺本体は円筒埴輪３個体を使用した複棺である。棺使用に際して、円筒埴輪の口縁部に別個体の円筒埴輪の基底部を挿入する「入れ子」状にしたもので、棺本体の遺存長1.18mを測る。東小口部は打ち欠いた朝顔形埴輪の口頸部で塞いだ後、さらに朝顔形埴輪の肩部で頸部を塞いでいる。東小口部の埴輪片の上面から鉄斧１点が出土した。



第10図　埴輪棺24

埴輪棺23　埴輪棺23は、４号墳の周溝の内側で周溝の東辺に隣接した位置にある。この埴輪棺は４号墳の築造に伴う可能性が高いが、４号墳の築造以前に据えられた可能性も考えられる。埴輪棺は墳丘内における埴輪棺の位置から中心埋葬のものとは考えがたい。墓壙は長軸1.05m・短軸0.63mの楕円形を呈し、墓壙底は検出面から0.35mを測る。棺本体は１個体の円筒埴輪を使用した単棺で、棺本体の円筒埴輪の口縁部分(南側)には、口頸部を打ち欠いた土師器壺と口縁部を含む１個体分の土師器壺で小口部を塞いである。棺本体の円筒埴輪の底部側(北側)には埴輪片等で塞いだ痕跡はない。棺本体は全長約0.90mで、調査時には棺内(円筒埴輪の内側)は空洞であった。遺体の埋置方向を示す枕などがなくその方向は不明。棺本体の円筒埴輪はタガが４段で方形の透し孔がある。

埴輪棺24　埴輪棺24は、調査地の北東端で丘陵部から谷部に向かう傾斜変換点にあり、瓦谷１号墳の中心埋葬施設からは約120m離れた位置にある。

墓壙は長軸2.93m・短軸1.23m、検出面からの深さ0.40mを測り、西側が広い倒卵形を呈する。棺本体は盾面を下にした盾形埴輪１個体に、長さ約50cmに打ち欠いた円筒埴輪を組み合わせた複棺で、両小口部は蓋形埴輪の笠部を使用している。棺本体は全長18.4m、遺存する棺の最大幅0.50mを測る。棺底の東側には打ち欠いた円筒埴輪が主軸に直交する形で据えられており、枕に使用したものと思われる(丘陵上位に頭位を置いた東枕)。棺本体と小口部の設置は西小口部の蓋形埴輪の笠部を設置したのち、棺本体の盾形埴輪を設置し、その後長さを調整した円筒埴輪を設置したものと思われる。東小口の蓋形埴輪の笠部は、棺の長さを調整した円筒埴輪に先行して据えられたものと思われる。これは両小口部の蓋形埴輪とも、棺本体よりも深く据えられていることから窺い知ることができる。上面の埴輪片のなかには円筒埴輪のほか、家形埴輪が棺本体の中央部に細片となって置かれていた。棺本体の設置に際して、盾面を上下からはさむようににぶい黄色粘土を敷いている。棺内からは副葬品は出土していない。

埴輪棺24の棺本体に使用した円筒埴輪は、口縁部の形状や円形透し孔の存在から埴輪棺16に近接した時期のものである。

埴輪棺25　埴輪棺24と同様、丘陵西側斜面で検出したもので埴輪棺24とは西方向に約８m離れている。墓壙は長径1.0m・短径0.8mの楕円形で、蓋形埴輪は破片で出土した。埴輪棺25は棺ではなく土坑の可能性もある。

４．小　結

瓦谷遺跡(瓦谷古墳群)は、丘陵上部の約8,400㎡を対象に３か年にわたって発掘調査を実施し、前方後円墳１基・方墳８基・円墳１基・埴輪棺25基、その他土壙墓を検出した。

瓦谷古墳が立地する丘陵上部は、奈良時代には建物跡が、中世には城館が、そして明治以降には新田開発により大きく改変された。その結果、古墳の中心埋葬施設の大半が削り取られており、埴輪棺もその多くが削り取られていた可能性が高い。このため、各古墳の周辺にはさらに多くの埴輪棺が配列されていた可能性が考えられるが、ここでは検出された埴輪棺25基と古墳の関連やその時期等について、若干の検討をおこなう。

古墳と埴輪棺の位置　埴輪棺は、その位置関係により、前述のようにA・B・Cの3グループに大別できる。すなわち、Aグループは盟主墳である瓦谷1号墳にもっとも近い位置に配列されていたもので、瓦谷1号墳の墳丘内にあるA-1グループ(埴輪棺05・08・09・11)と、墳丘外にあるA-2グループ(埴輪棺06・07・10)がある。

A-1グループは、墳丘主軸にほぼ並行(あるいは直交)するように配列されており、埴輪棺のなかでは1号墳と特に密接な関係にある被葬者の墓の可能性が高い。A-2グループは、墳丘外の周辺部に前方後円墳とほぼ並行する位置関係にあり、瓦谷1号墳との関連が指摘できる。

Bグループは、瓦谷1号墳の周辺に配された小規模な方墳(あるいは円墳)との関連が指摘できるグループである。Bグループは付表1のとおり、墳丘内にあるB-1グループ(埴輪棺20・23)と、墳丘外に配されたB-2グループがあり、B-2グループのなかにも古墳の主軸(主に周溝の主軸)に平行(あるいは直交)するB-2aグループと古墳の主軸にとらわれないB-2bグループがある。このうち、方墳の墳丘内にある埴輪棺(埴輪棺20・23)は古墳の築造以前に埴輪棺が設けられていた可能性も考えられる。

B-2グループは、その配された位置関係からB-2bグループに比べてB-2aグループのものが、より小規模方墳との関連が密であるか、あるいは小規模方墳の造営により近接した時期にB-2aグループが造営された可能性が考えられる。

瓦谷1号墳や小規模方墳(あるいは円墳)からやや離れた位置にあるCグループ(埴輪棺24)は、後述するように埴輪棺08を除いて他の埴輪棺よりも規模が大きくよりていねいなつくりの埴輪棺である。なお、Cグループには後述するように埴輪棺16・22も含まれる可能性がある。

埴輪棺はA・B・Cグループに大別できるが、それに関連した古墳に

付表1　古墳と埴輪棺の位置関係

古墳名	埴輪棺の位置	埴輪棺
1号墳	墳丘内	埴輪棺05・08・09・11
	墳丘外周辺	埴輪棺06・07・10
2号墳	墳丘外周辺	埴輪棺01・02・03・04
3号墳	墳丘外周辺	埴輪棺12・13・14
4号墳	墳丘内	埴輪棺23
	墳丘外周辺	埴輪棺17・18・19
5号墳	墳丘外周辺	埴輪棺15・16・22
8(or 6)号墳	墳丘外周辺	埴輪棺21
7号墳	墳丘内	埴輪棺20
10号墳	墳丘外周辺	埴輪棺25
その他		埴輪棺24

ついては埴輪の有無等に相違がみられる。すなわち、周溝内に埴輪片を含むものが２号墳・４号墳・５号墳・８号墳のみで、他の３号墳・６号墳・７号墳・９号墳・10号墳の周溝内からは埴輪片が出土しておらず、土師器片を少量含むのみであった。この古墳に伴う埴輪の有無が造営時期の差異をあらわすものなのか、あるいは被葬者の性格をあらわすものなのかは、周溝内の遺物、特に土師器の整理作業をまって検討する必要がある。

埴輪棺の規模　瓦谷古墳群でみつかった埴輪棺は、単棺構造のもの７基(埴輪棺01・04・09・13・14・20・21・23)、複棺構造のもの10基(埴輪棺02・03・08・11・12・15・16・17・18・24)がある。

埴輪棺の規模、特に単棺構造のものは当初から埴輪棺として作られた特製埴輪でないかぎり古墳に樹立している埴輪を転用しており、棺本体の規模は古墳に樹立していた埴輪によって規制される。

瓦谷古墳群で検出した埴輪棺の棺の長さは、単棺構造のものは棺本体の底部から口縁部まで、複棺構造のものは組み合わせた埴輪の両端をもって計測した。この場合、埴輪棺18のように頭位に石枕を置いたと考えられるもの、埴輪棺16や埴輪棺24のように埴輪片を枕に使用したものや被葬者が伸展葬でなかった可能性も考えられるため、厳密には被葬者の身長は明示した棺の長さより小さくなるものと思われる。また死者を別の場所で埋葬した後、骨を新たに埋葬することも考えられるが、瓦谷古墳群では改葬例を証明する有力な根拠がみあたらないため、ここでは改葬はなかったものと考える。(注4)

瓦谷古墳群での埴輪棺の規模(棺の長さ)は、蓋形埴輪を転用した埴輪棺06で60cm、円筒埴輪を転用した埴輪棺21(単棺構造)の74cmがもっとも短く、もっとも長いものは円筒埴輪と盾形埴輪を組み合わせた埴輪棺24で長さ1.84mを測る。棺の長さではおおよそ１mを境に１m未満のもので単棺構造のものが多く、１m以上では複棺構造のものが多いが１m以上でも単棺構造のもの(埴輪棺10の1.75m・埴輪棺14の1.05m)がある。

棺の長さが被葬者の身長を反映しているものと考えれば、瓦谷古墳群では、1.5m以上のものが２基(体)で、１m以上1.5m未満のものが10基(体)、１m未満のものが９基(体)となり、身長1.5m未満の被葬者が大半である。そして、後述するように瓦谷古墳群のなかでも新しい埴輪を棺に転用した埴輪棺のものが複棺で棺の規模が大きい傾向にある。

埴輪棺の時期　埴輪棺では副葬品の出土例が乏しく、棺に使用された埴輪をもって時期を検討する場合が多い。この場合、瓦谷古墳群のなかでの埴輪棺06・埴輪棺11のように、古墳に樹立されていた埴輪を抜き取って転用した場合には、埴輪棺に使用された埴輪をもってその時期を決定するには若干の問題を残す場合がある。(注5) ただ副葬品を伴わない瓦谷古墳群での埴輪棺では、後述するように古墳時代前期末～中期初頭の時期の埴輪のみであり、

付表2　棺に使用された円筒(朝顔形を含む)埴輪の特徴

タイプ名	特徴	埴輪棺
Aタイプ	・ヒレ付き ・二次調整にタテハケを使用 ・主に方形透し孔 ・最下段のタガの間隔が長い	埴輪棺02・05・08・10・11・12・21
Bタイプ	・ヒレをもたない ・二次調整にタテハケを使用 ・方形透し孔のほか、半円形などバラエティに富む ・最下段のタガの間隔が長い	埴輪棺01・04・05・09・13・14・17・18・23
Cタイプ	・二次調整にヨコハケを使用 ・円形透し孔 ・タガの間隔は最下段まで等間隔	埴輪棺16・22・24

各古墳の造営後時期をおくことなく埴輪棺を作ったものと考えたい。

埴輪棺に使用された埴輪は現在、接合及び実測作業を行なっており、今後さらに検討を加える必要があるが、大きくは3タイプに分けることができる。

埴輪Aタイプは、外面の2次調整に縦ハケを用い、透し孔は長方形・半円形・三角形などバラエティに富むもので、普通円筒形埴輪・朝顔形円筒埴輪ともヒレ部をつけたものである。Aタイプの埴輪を棺に使用したものとしては、埴輪棺05・08・10・11・12・21があり、埴輪棺21を除き、瓦谷1号墳の墳丘内及びその周辺から出土している。

埴輪Bタイプは、埴輪Aタイプよりも小ぶりでヒレ部をつけないタイプ。透し孔は長方形・半円形のものが大半で、タガ間の距離は上段部分が短く最下段が長い傾向にある。Bタイプの埴輪を棺に使用する場合には、2号墳に近接した埴輪棺02・03の複棺構造を除き、埴輪を一個体使用した単棺構造のものが多い(埴輪棺14・19・23)。Bタイプの埴輪を棺に使用したものは2号墳・3号墳・4号墳の周辺に分布する傾向がある。

埴輪Cタイプは、外面の2次調整に横ハケを用い、透し孔は円形のものである。埴輪Cタイプを棺に利用したものは埴輪棺16・22・24で、いずれもが2個体以上の埴輪を利用して棺にした複棺構造である。棺の長さは1.0m以上で盟主墳である瓦谷1号墳からは離れた位置に分布している。

このように、埴輪Aタイプを使用した埴輪棺は1号墳に近接、埴輪Bタイプは1号墳を取り巻く周辺の小規模方墳に近接、埴輪Cタイプは1号墳からはより離れた位置で出土している。そして、棺に使用された埴輪をみるかぎり、埴輪A・Bタイプは古墳時代前期末、埴輪Cタイプは中期初頭の特徴をそなえている。このことは埴輪棺造営の時期差をあらわすものなのか、主となる古墳との関連によるものなのかはさらに検討を要する。

検出した埴輪棺の性格　瓦谷古墳群で検出した埴輪棺は、前方後円墳(瓦谷１号墳)を頂点とし、それに従属した小規模方(あるいは円)墳、さらにその下部構成である埴輪棺・土壙墓からなり、古墳時代前期末～中期初頭での墓制から見たピラミッド形の階層分化を如実にあらわした遺跡である。

瓦谷古墳群の周辺の木津町市坂地区では、瓦谷古墳群に後続する時期の上人ヶ平古墳群が南西約300mにある。上人ヶ平古墳群は中期中葉～後期初頭にかけて順次古墳が11基築造される。また瓦谷古墳群の北約200mには西山塚古墳があり、瓦谷１号墳→上人ヶ平５号墳→西山塚古墳へと盟主墳が移動する。このなかで、瓦谷古墳群と同様、上人ヶ平古墳群でも盟主墳を取り囲むように小規模方墳が分布しているが、上人ヶ平古墳群では埴輪棺は作られていない。市坂地区の古墳群でみるかぎり、古墳時代前期末～中期初頭のある限られた時期にのみ埴輪棺が作られている。

京都府内での埴輪棺の検出例をみると、丹後地域(加悦町)、乙訓地域(長岡京市・向日市)、南山城地域(宇治市・城陽市・精華町)などで広く分布するが、埴輪棺の検出密度が高い加悦町作山古墳群が瓦谷古墳群で検出した埴輪棺とほぼ同時期に築造されている。

瓦谷古墳群はその位置関係より大和北部、佐紀盾列古墳群との関係が密である。これは瓦谷古墳群が佐紀盾列古墳群と直線距離にして2.5～3.3kmと近接していること、瓦谷１号墳や埴輪棺に使用された埴輪、特に形象埴輪(盾・蓋)が佐紀陵山古墳出土のものに近似していることなどから考えられる。佐紀盾列古墳群の中ではマエ塚古墳の周辺から埴輪棺が点在しており、佐紀盾列古墳群の影響下に瓦谷古墳群があったものと考えられる。

以上のように、瓦谷古墳群で検出した埴輪棺は、身長1.5m未満の被葬者を埋葬した棺が大半で、１号墳に従属するもの・小規模方墳に従属するもの・その他に分けることができ、その築造時期は、古墳時代前期末～中期初頭と考えられる。そして棺に使用した埴輪の差異が時期差をあらわすものだとすれば、古墳の築造とともに150cm未満の成人に満たない被葬者が中心埋葬の被葬者に従属する形で埋葬され、古墳を築造しなくなる中期初頭には、150cm前後の成人を埴輪棺に埋葬していたことになる。埴輪棺が中期初頭の短期間に造営されたものと考えれば、150cm未満の被葬者は樹立していた埴輪を転用、身長150cm前後の被葬者は新しい埴輪を使い、棺として利用していたことが考えられる。いずれの場合にしろ市坂地区では古墳時代中期中葉(上人ヶ平５号墳の造営)には埴輪棺は作られなくなる。埴輪棺の被葬者については瓦谷古墳群出土の埴輪類が古墳の規模と比較してりっぱなものが多く、上人ヶ平古墳群をも含めた市坂地区の狭い範囲で埴輪及び埴輪棺を理解するよりも佐紀盾列古墳群との関連で理解する必要がある。

はじめに述べたように、瓦谷古墳群から出土した遺物は現在整理中であり、今後の整理

作業の結果、さらに再考を要することを十分考えられる。ここでは報告書作成の準備を兼ねて今考えられることを羅列した。本文作成にあたっては、笠井敏光・橋本清一・鐘方正樹・伊賀高弘・森島康雄の各氏より有益な助言を得た。

（いしい・せいじ＝当センター調査第２課調査第３係主任調査員）
（ありい・ひろゆき＝当センター調査第２課調査第３係調査員）

注１　有井広幸「瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第49号　(財)京都府埋蔵文化材調査研究センター）　1993

注２　伊賀高弘「瓦谷遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第26冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注３　伊賀高弘「瓦谷遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第46冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991

注４　橋本博文氏は、愛知県岩場古墳２号棺などの検出例から、「円筒棺・埴輪棺は箱形石棺や壺棺・甕棺等と同様に改葬が多く行われた。」と考えておられる(橋本博文「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢』　早稲田大学出版部　1980)。

注５　笠井敏光氏によると「一つの棺が時期の異なる埴輪をもって構成されている」ものや「構成されている埴輪と副葬品と思われる土器との間に同じく１世紀以上の時間」のへだたりがあるものが指摘されている(笠井敏光「埴輪の再利用」『季刊考古学』第20号)。

古墳出現前後の注口土器について

藤原敏晃

1．はじめに

京都府北部の峰山町にある京都府立峰山高等学校は、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡である古殿遺跡が所在することで知られる。筆者はかつてこの遺跡の発掘調査を担当し、その際注口土器を発掘し、資料紹介したことがある。[注1] その後、報告の機会もなく、この遺物の意義について触れることができなかった。そこで、改めてこの遺物について考え、まとめたのがこの小文である。

こうした注口土器は、弥生時代後期から古墳時代に移り変わる時期に山陰地方を中心に出現する。また、管見による限り、各地の遺跡から多数出土しているものではなく、時期的にも短期間に限定される、稀な遺物である。ところで、注口土器と聞いて、すぐに思い出すのは縄文時代のものである。縄文時代後期から変化に富んだ器形を持つ小型の土器が作られるようになり、その代表が注口土器である。もちろん、この遺跡から出土した注口土器が、縄文時代のものから直接つながるのではなく、縄文時代のものと同レベルで考えるべきではない。しかし、縄文時代のものと同様の特徴的な機能が推測される形態をもつ。

小文では弥生時代の終りから古墳時代初めの注口土器の分布や編年案を通して、実態を明らかにし、この特異な(一般的ではない)遺物が地域性を表出していると捉え、この土器が弥生時代から古墳時代へ移行する微妙な時期に出現した背景を考えたい。また、注口が取り付く弥生土器はこれ以外にもいくつか見られるが、中でも中期後葉から後期前葉に中国山地を中心に分布する「注口付きの脚付き鉢(壺)形土器」との関連について触れたい。

2．注口土器の分類と編年

注口土器の個体数はごくわずかなため、その分類は単なる個性の別ということにもなりかねない。しかし、注口土器は同時期の山陰地域を中心に広がる壺・甕形土器に類似したもので、編年的には壺・甕形土器のものを援用して考えることができると思われる。ここでは、山陰地方(島根・鳥取)の代表的な弥生時代から古墳時代初頭の壺・甕形土器編年案[注2]を参照しながら分類・編年を試みてみたい。

①注口土器の分類

Ⅰ類　口縁端面に凹線文・擬凹線文が施され、最大腹径は体部上半部。平底。体部外面上半部タテハケ、下半部タテ方向のヘラミガキ。内面は頸部以下ヘラミガキである。ここに分類される注口土器は今のところ不明である。

Ⅱ類　口縁部が短く直立し、端面には擬凹線文が施される。最大腹径が器高の1/2かその上にくる。体部は菱形か算盤玉を上下にのばしたような印象を持つ。平底。外面はハケメ、ヘラミガキ、ナデ等で、刺突文等の模様がつく。内面はヘラケズリである。注口部は円筒形を呈し、体部には断面円形の半円状の把手が付く(第１図１)。

Ⅲ類　口縁部は直立か外傾し、口縁部の屈曲する部分が下垂する。口縁端面にはクシなどによる平行沈線文がみられる。体部は、上から押さえつけられたようにやや扁平化した球形になり、上に伸びた断面方形のＵ字形の把手が付く。底部は平底に丸底も加わる。注口部は円筒形である。体部外面はヘラミガキ。内面はヘラケズリ(第１図２)。

Ⅳ類　口縁部は長くなり、やや強く外反する。口縁端面のクシ等によるナデ調整は消されるようになる。口縁端部はツマミ上げられ、屈曲部は引き出される。体部は球形となる。肩部には細かく揺れる波状文等のクシガキの装飾が施される。把手が体部に付かなくなり、また、先細りの注口部が出現する(第１図３～６)。

Ⅴ類　口縁部は長く外反する。端面には沈線文は施されず、ヨコナデのみに統一される。口縁端部はツマミ上げられたままであり、屈曲部の稜は強く引き出されている。体部は倒卵形である。体部外面はヨコハケ、内面はヘラケズリ。肩部の波状文はゆるやかなものに変わる。先細りの注口部はより長くなる(第１図８～10・13)。

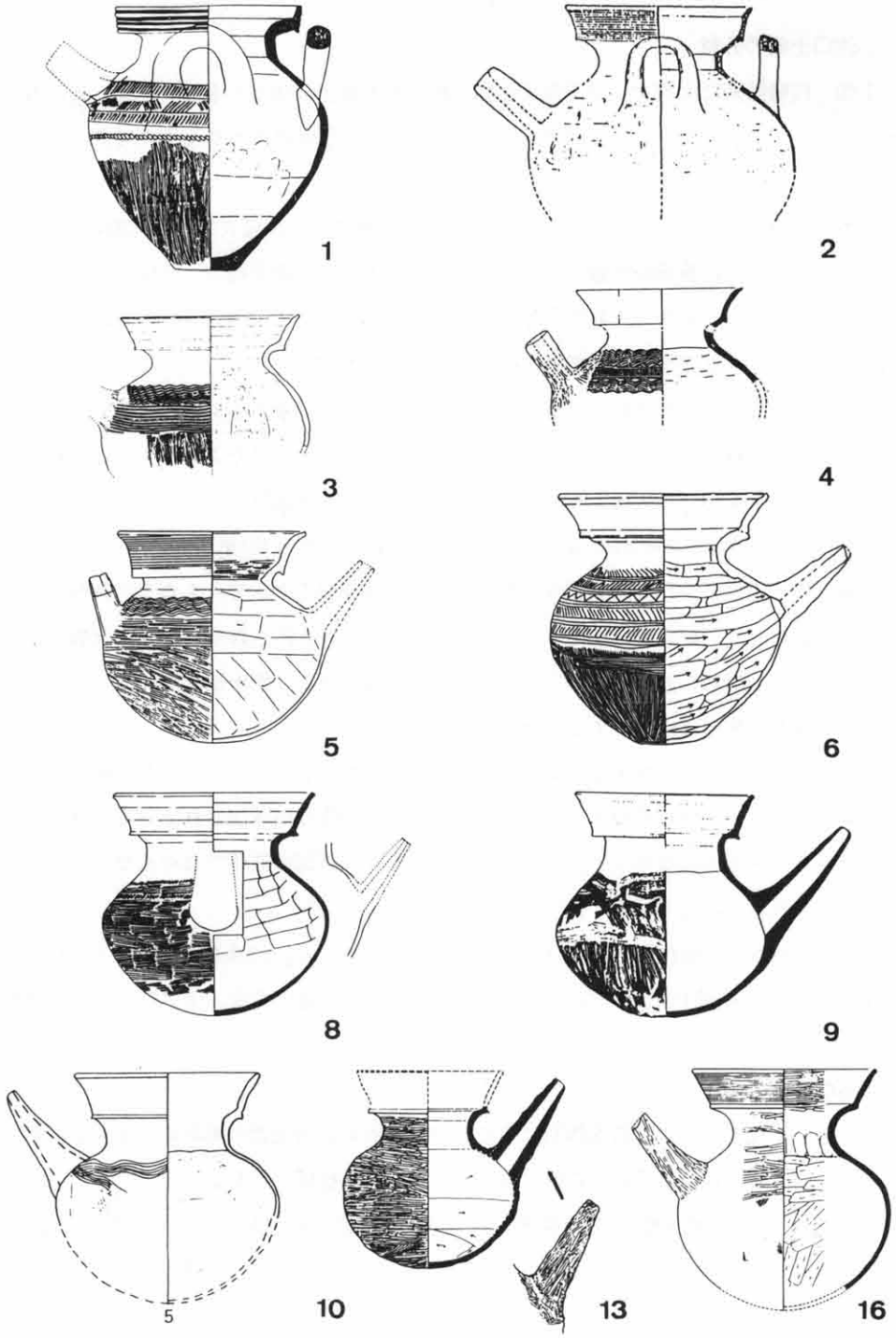
Ⅵ類　口縁部は直線的に斜めに立ち上がるものがでてくる。口縁端部はカットしたように平坦になるが肥厚する。体部は球形である。注口部は短縮化する。体部外面ハケメ調整(第１図16)。

②注口土器の編年

注口土器は先述したように個体数は少ないが同時期の壺形土器の編年案を参照して考えることができる。以下、注口土器の分類をもとに編年を整理してみる。

Ⅰ期(弥生時代後期前葉)　この段階のものは管見の限り出土していない。後述するが、注口土器の祖形と考えられる注口付き脚台付鉢形土器の終末がこの段階であることから、この時期については考えなくてもよいかもしれないが、併行して出現する可能性を残す。

Ⅱ期(弥生時代後期中葉)　Ⅱ類が相当する。波来浜遺跡出土のものをⅠ期とする考えもあるが、口縁部が内傾から直立する変化を重視し、従来どおりこの時期に区分した。注口部は欠損しており不明であるが、円筒形のものが付いていたものと推測される。



第１図　注口土器実測図(1は、報告書図のS=2/3で、他は1/6。)

(各図はそれぞれの報告書または注２資料によるが、紙面の都合で引用文献を割愛した。)

1.波来浜遺跡　2.的場遺跡　3.長曽土壙墓　4.中山Ｂ地区墳墓群　5.上種第５遺跡
6.秋根遺跡　8.宮ノ下遺跡　9.擲塚遺跡　10.遠藤谷峯遺跡　13.古殿遺跡　16.鎌田若宮遺跡

Ⅲ期(弥生時代後期後葉)　Ⅲ類の的場遺跡出土のもの１点のみである。この時期から体部が菱形から球状に変化し始める。底部は欠損していて不明であるが、丸底に近づくものと考えられる。把手の断面形が円形から方形に変わる。注口は円筒形である。

Ⅳ期(庄内古段階併行期)　いわゆる、庄内併行期に入り、ひとつの画期である。把手や円筒形の注口部がこれ以後消滅し、注口部が先細りとなることが大きな変化である。Ⅳ類の土器が中心であるが、バラエテイに富む。口縁端面の沈線文がナデ消されたものとそうでないもの、また、体部に把手がないものと持つものが混在する。注口部も円筒形のものと先細りのものがある。秋根遺跡出土のものは、平底であり、体部も一見古い様相を持つように思われるが、口縁部を見ると後出的で、注口部も先細りであり、同層から出土した鼓形器台を考えるとこの時期に比定される。

Ⅴ期(庄内新段階併行期)　Ⅴ類の土器が対応。把手がとれ、注口部は先細りのものになる。注口部はより長く伸び、その先端部はより細まる。取り付く角度もより鋭角的になる。さらに、体部は最大腹径が広がり、球形から倒卵形になる。頸部もより長く伸びた印象になる。宮ノ下遺跡出土のものは口縁端部を見るとやや後出的である。漆町遺跡出土の注口部は、こうした注口土器のものであるとすると、円筒形であり、独自の特色を示す。

Ⅵ期(布留古段階併行期)　Ⅵ期になると、長く伸びていた注口部はやや短くなり、先細りの度合いもゆるくなる傾向にある。体部も球形に戻る。そして、この時期を最後に注口土器は出現しなくなる。

付表１　各地出土の注口土器(両括弧の番号は第１図のそれと一致する)

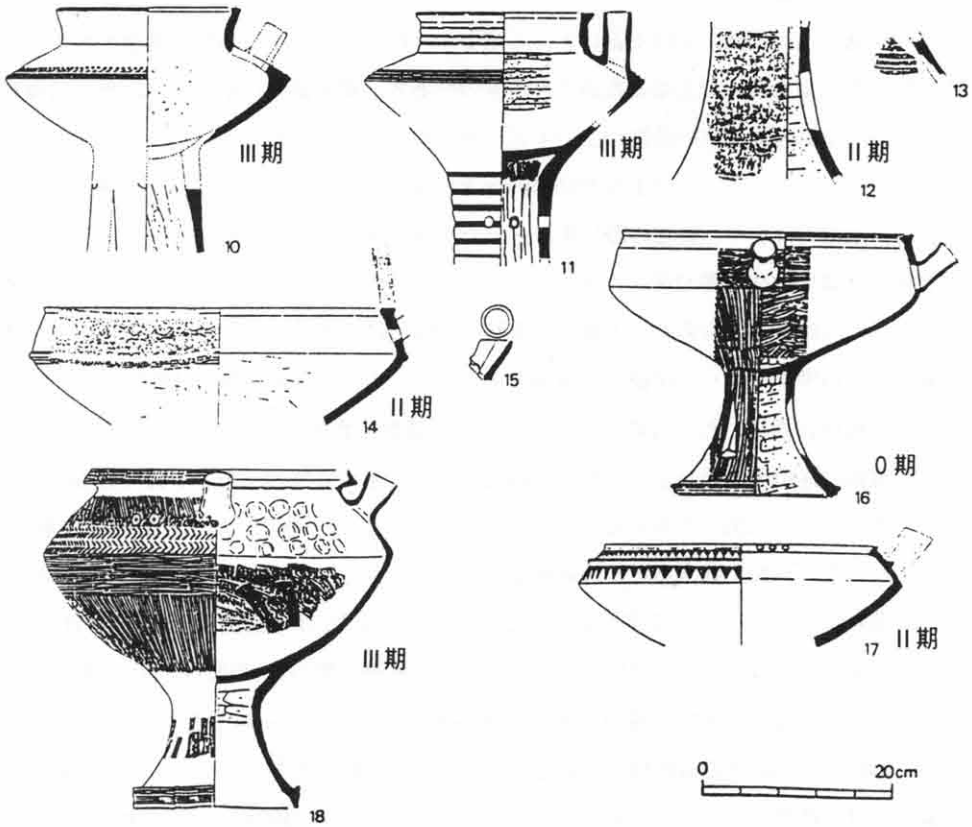
波来浜	(１)全高19.9cm、口径13.9cm、底部径4.4cm、把手高８cmを測る。外形は、肩部がやや張り、平底であり、口縁部は複合口縁で、端部は上下に拡張する。外面はハケ整形の後腹部以下をヘラ磨き、内面はヘラ削りした後磨いている。口縁部にはクシによる擬凹線文を施す。肩部に斜線文、腹部にはヘラ先による刺突文をめぐらしている。把手は断面円形の「U」字形のものを横に取り付けている。注口は欠損し不明である。また、器表の腹部以下にはススが付着していた。
的場	(２)下半部を欠くため法量が判明したのは口径のみで16.5cmを測る。把手高は5.5cmである。口縁部は内面に垂直面を形成しながらゆるやかに外反する「５」の字形の複合口縁をなす。体部下半は欠損しているが、胴部最大腹径が中位にあり以下ゆるいカーブで湾曲して球形に近い形状をなし、底部は下腹部とのアクセントが少ない平底におわるものと推察される。把手は断面形が方形の粘土ひもを「U」字形におりまげたものである。注口は肉厚で円筒状を呈する。器表は口縁部外面にクシ描き平行線文をいれる。内面はタテハケの後ヘラ削り。
長曽	(３)口径16.5cmを測り、口縁部がやや外反する。胴部最大腹径は胴部中央部より上にある。肩部には波状文と平行沈線文がめぐる。焼成は不良で、注口下半部に黒斑がある。底部と注口部を欠く。図面でみると、外面下半部はタテハケ、内面は、上半部がヨコ方向のケズリ、下半部がタテ方向のケズリである。
中山B	(４)遺物は、図面から判断すると、口径16.0cm、口縁部はやや強く外反する。また、口縁屈曲部はつまみ出すように下垂する。肩部には平行沈線をはさんで上下に波状文がめぐっている。下半部は欠損している。注口は円筒状のもので比較的短い。内面はヨコ方向のケズリか。

上種第5	(5)口径14.5cm、最大胴径18.5cm、器口17.5cmを測る。把手高は4cmである。口縁部はやや強く外反する二重口縁で、端部は外側に面をなし、角張る。屈曲部は、強いヨコナデにより鋭い稜をなして包まれたように下垂する。体部は最大腹径が中位やや上にある扁球形で、底部は完全な丸底を呈する。肩部には上向きに注口が、その反対には断面矩形の環状の把手が付く。口縁部外面にはクシガキの沈線、肩部外面は波状文がめぐる。体部外面上半部はヨコ方向の、下半部はナナメ方向のヘラミガキで、下半部にはハケメが残る。口縁部内面はヘラミガキの後ヨコナデ。体部内面は左上方にヘラケズリの後上半を左方向にヘラケズリをする。把手、注口部とも後でつけられたものである。把手外面はヘラミガキされる。
秋根	(6)口縁から胴上半までは厚く、下半から底部は薄い。口縁部は複合口縁で外反する。端部は少し上方につまみ、口縁屈曲部は厚いので鈍く見えるが下垂する。底部には平底風に稜を残すが、安定を欠く。口縁の内外面はヨコナデ。胴部の外面はタテハケの後に注口部を張り付ける。胴部上半はタマキ貝の腹縁で鋸歯文や斜線文を施す。胴内面はヨコ方向にヘラケズリ。
宮ノ下	(8)口径16.5cm、高さ18.6cm。口縁部は複合口縁で外反気味に斜め上方に立ち上がる。口縁屈曲部は斜め方向につまみ出されたように飛び出る。端部は外側につまんだように少し面を持つ。やや伸びた頸部から横長の楕円形状の体部が付く。胴部中位に最大腹径がある。肩部に注口を取り付けたあとがある。口縁部から頸部にかけて内外面ヨコナデ。頸部内面以下ヨコ方向のヘラケズリ。底部付近はユビオサエのままである。外面は肩部に貝殻腹縁で刻み目を施し、それ以下はハケメ調整である。外面にはススが付着している。
擲塚	(9)口径15.2cm、器高18.6cm。直線的に長く伸びた頸部から口縁部が外反気味に斜めに立ち上がる。口縁屈曲部の稜は、ヨコナデにより鋭く下方に引き出される。体部は扁球形で、最大腹径は中位にある。底部は平底に近い丸底である。注口部は体部中位から斜め上方に伸びる。内面はヨコ方向のヘラケズリ。底部にはユビオサエの凹凸が残る。体部外面はタテヨコのハケメ調整。肩部には波状文を重ねて施す。
遠藤谷	(10)口径15.0cm、器高は下半部を欠くため不明。口縁屈曲部が鋭い稜をなす複合口縁である。口縁部は外反気味に斜めに立ち上がる。頸部は長く伸び、扁球形の体部が続く。内面はヨコ方向のヘラケズリ、外面はハケ調整である。肩部にクシガキによる波状文がめぐる。注口部はあとから粘土で貼り付けられていた。
古殿	(13)口縁部を欠くが、残存高12.0cm、最大腹径15.3cmを測る。長さ8cmの先細りの注口が付く。外面はヨコ方向のハケ調整をした後ヨコ方向のヘラミガキ(注口部はタテ方向のヘラミガキ)である。内面は体部下半がヨコ方向のヘラケズリである。体部外面下半部には丹と煤が付着する。
鎌田若宮	(16)口径は16.0cm、器高21.0cmを測る。外湾しながら伸びる頸部にやや外反しながら立ち上がる口縁部が付く複合口縁を呈する。口縁屈曲部の稜は鋭さを欠く。端部はわずかに肥厚させ丸くおさめる。体部は肩の張った球形である。底部は欠損している。内面は、口縁部がヘラミガキ、体部上半がヨコ方向のヘラケズリ、下部は縦方向のヘラケズリ。頸部にはユビオサエが残る。外面は、体部がハケ後ヘラミガキ。口縁部及び体部外面に丹塗りされる。

3．注口土器の祖形と用途

①注口土器の祖形

注口土器の最古のものは、江の川下流域である江津市波来遺跡出土のものである。江の川上流域には、弥生時代中期後半から後期前葉にかけて出現した注口付き脚台付鉢(壺)形土器が知られる[注3]。この土器は、長大で太い脚柱部の上に、著しく胴部が張る鉢(壺)形土器をのせ、その鉢(壺)の肩部に注口をもつものである。妹尾氏の指摘によると[注4]、後期前葉の



第２図　注口付きの脚台付鉢形土器(注３文献による、一部改変)
10.横田遺跡　11.西江遺跡　12･13.野田畝遺跡　14･15.山根屋遺跡
16.百間川今谷遺跡　17.紫雲出山遺跡　18.南庄遺跡

ものは、形態的に壺形土器に変わっていく。鉢形土器から壺形土器への変化は大きな断絶が認められるという。さらに壺形土器の祖形が江の川上流域や高梁川上流域では認められないことから、伯耆地域の影響を受けたものと考えられている。

この後期前葉の注口付き脚台付鉢(壺)形土器が、波来浜遺跡の注口土器と直接つながるものかどうか断定はできないが、体部の形状が算盤玉状を呈する等類似がみられる。波来浜遺跡出土のものは注口部を欠くが、注口土器において古い段階の特徴といえる円筒状の注口部は、注口付き鉢(壺)形土器と同じであろう。地理的にも江の川流域であり、注口付き脚台付鉢(壺)形土器に祖形としてのつながりを考えることは自然なことと言えよう。

②注口土器の用途

注口土器(注口部のみの出土も含む)が出土した地点・遺構を見てみる。墓ないしその関連が７遺跡(波来浜、的場、長曽土壙、中山Ｂ地区、観音免土壙、矢谷ＭＤ１号、鎌田・若宮)である。集落跡内の出土は９遺跡(上種第５・秋根・遠藤峯・擲塚・宮ノ下・福市・

古殿・漆町・奈喜良)である。

Ⅰ・Ⅱ期の古い段階の注口土器はすべて墓上から出土した。これらは、墓壙を埋めた後の供献土器・墓上祭祀の土器と指摘されるものである。葬送儀礼に用いられ、そこに廃棄されたものであろう。後の段階の注口土器も墓壙内から出土したものはなく、すべて墓壙上面からであることは、この土器が死後の世界でも用いるようにと墓壙内に副葬したような日常の土器ではなく(注5)、儀礼の際に用いられた土器であることを傍証するものであろう。

Ⅲ期からは竪穴住居跡や溝・土壙などからも出土する。注口土器が出土した竪穴住居跡のうち、いちばん古いものが、上種第５遺跡27号住居跡である。これは、同遺跡の他の住居跡に比べ規模が大きく(注6)、平面形も多角形を呈する。もう１棟の同様の住居跡と併せ、優位性・特殊性が指摘されるものである。出土した遺物も祭祀的な色彩が濃いものである。宮ノ下遺跡の注口土器が出土した竪穴住居跡は、同時期の２棟のうちの１棟であるが、これも、少なくとも東側に台形の張り出しをもつ特殊なものである。出土した遺物も多く、その中には手づくね土器もある。遠藤峯遺跡からは、５号・８号・９号住居跡から４点の注口土器が出土している。２点が出土した５号は、１辺が5.5m前後の隅丸方形の住居跡である。規模はさほど大きくないが、ピット列が住居跡の東半分(西側は不明)を取り囲むという、特異なものである。福市遺跡53号住居跡からは、手づくね土器も出土している。奈喜良遺跡３号住居跡には特別な点はなく、逆にこの遺跡の他のものより小規模である。

溝からは３遺跡で出土しているが、中でも古殿遺跡のＳＤ02溝は、大量の土器とともに多数の木製品が出土し注目された。祭祀的な様相の濃い木製品が多い点は注目される。

注口土器は、墓などの非日常的な場所からだけでなく、狭い意味の集落内(注6)の遺構からも出土している。しかし、以上に説明したようにほとんどの出土遺構が、特殊性・優位性が指摘でき、また、祭祀的性格が濃い遺物を共伴して出土する。こうしたことからも、特別な者が、特別な場(儀式や祭祀の場等)で用いた容器であると考えられる。

注口土器といえば、縄文時代後期などのものがすぐに頭に浮かぶ。形態的にみて、小さな容器に液体を注ぐためのものと想像される。江坂氏は、縄文時代の小型の注口土器はわずかな容量の液体を少しずつ飲用するための容器で、このように少ししか飲用しない貴重な液体は通常の飲料水ではなく、おそらく木ノ実酒であろう、と推測されている(注7)。

弥生時代の注口土器は、縄文時代のものに比べて一回り容量が大きいのだが、先述した点に加えて、出土数が限られる点や古殿遺跡出土のもののように朱が塗られていた点で、日常的に使用された土器とは考えにくい。やはり、縄文時代と同様に、通常の飲料水をいれたものではなく、酒など日常的に飲料しない液体を入れた容器と推測される(注8)。

ただし、祖形としてのつながりが考えられる注口付きの脚台付鉢(壺)形土器のように、

注ぐには不便な高い脚を持ち、丁寧な丹塗りがされるような(第２図のものはすべて丹塗りされている)いわゆる仮器的なものではない。煤が付着したものもあり、脚台もとれて注ぎやすく、実用的になっている。また、注口部も円筒形から先細りになるのは、より小型の容器に注ぎやすくするためで、容器としての機能は時期が進むに従い、より実用的になる。把手が省略されていくのも、実用的になった点である。

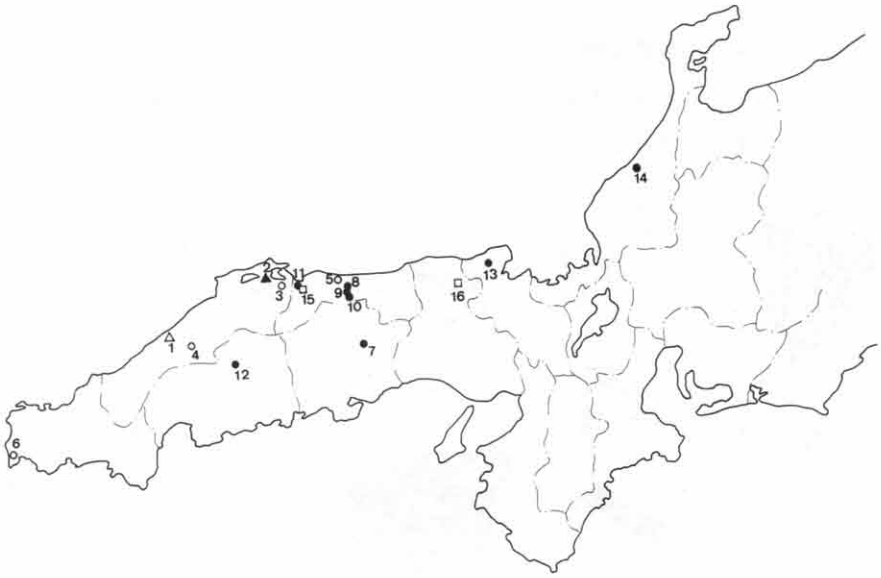
このように、注口土器は仮器的なものではない。祭祀や葬送等の儀礼の場において飲酒などに実際に使用された特別な容器として位置づけられるのではないだろうか。また、実用性の追求は、この容器が一時的に使用されるものではなく、一定期間保持され、儀器として何度か使用されたからだと考えられる。

４．注口土器の分布と出現の背景

①注口土器の分布

注口土器は、管見ではあるが16遺跡から確認される。その出土地を見ると、島根・鳥取の山陰両県を中心に、山陰周辺部の中国山地や日本海側の各地から出土している。今後、その他の地域でも確認されるかもしれないが、分布の中心は変わらないであろう。

Ⅰ期からⅢ期の段階は、江の川下流域や松江市という石見・出雲地域から出土している。弥生時代後期にあたるこの時期は、この範囲を出ず、この地域を中心にこの土器が使用さ



△:Ⅱ期　▲:Ⅲ期　○:Ⅳ期　●:Ⅴ期　□:Ⅵ期

第３図　注口土器出土遺跡分布図

(番号は付表２出土遺跡一覧の番号に相当する)

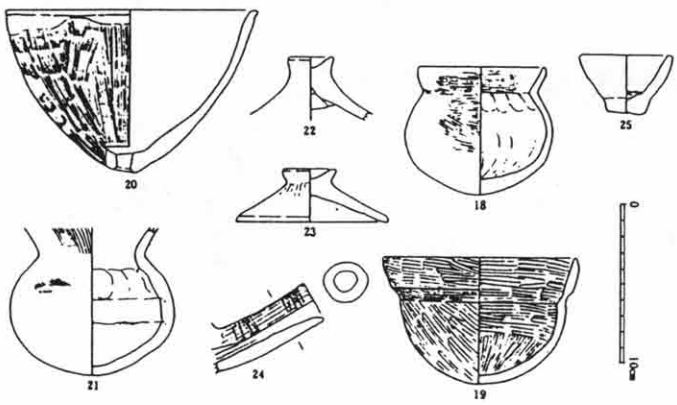
れ発展したと考えられる。次に、Ⅳ期(庄内古段階併行期)の段階で山陰地域に大きく広がる。また、注口土器の中心地であろう石見・出雲地域ではこの時期以後確認されなくなる。このⅣ期は、注口土器の特徴点である注口部が円筒形から先細りへと変化し、把手も消滅していく。おそらく、時間的な変化と同時に中心地から遠隔地に広がる中での変化と考えられ、この土器としては最も大きな画期である。Ⅴ期に入りさらに遠い範囲、すなわち山陰の周辺地域にも広まったようである。そして、Ⅵ期を最後にその姿を消すことになる。

②注口土器出現の背景

注口土器は、これまでに述べたように、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、山陰地域を中心として、その周辺部にも出現する希少な土器である。この土器のルーツは、弥生時代中期に山陽地域北部に出現した、注口付き脚台付鉢(壺)形土器と考えられ、江の川を通してこの土器の影響を受け、石見・出雲地域に出現したものであろう。そして、弥生時代末から古墳時代初頭には、山陰とは少し異なる注口部が北陸地域でも出土する。(注9)

注目されるのは、時期的に併行ではないものの、この流れが四隅突出形墳墓と同じだという点である。四隅突出形墳墓は、弥生時代中期末に山陽地域で、類似する貼石方形墓が出現し、弥生時代後期に出雲地域を中心にした山陰地域で発展したものと考えられる。(注10)そして、古墳時代はじめには北陸地域等、山陰周辺部に広がりを見せる。なお、北陸地域のものは、石を持たないという独自なものである。出雲地域が山陽地域北部と関係を深める中で生まれてきたのであろう。

注口土器が四隅突出形墳墓から出土した例は、矢谷MD１号墓の１例だけであり、時間的なズレもあるので、埴輪と古墳の組み合わせのように注口土器が直接四隅突出形墳墓に関係するものであるとは言えない。しかし、注目される点である。



第４図　漆町遺跡出土注口部
(田嶋明人他『漆町遺跡』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1985による、一部改変)

そこで、今一度注口土器が出土した墓を見る。注口土器が出土した墳丘をもつ墓のうち、鎌田・若宮古墳群の１遺跡を除く、波来浜３号墓、的場遺跡、長曽東側土壙墓群、矢谷MD１号墓は、すべて墳丘裾等に「列石」・「貼石」を持つ。

また、無墳丘墓の中の中山B地区中央丘墳墓・長曽土壙墓群第6号墓では、その墓壙上の注口土器を含む遺物群に混じって、さらに、観音免土壙墓でも注口土器が出土した隣の土壙上面から、「標石」・「置石」と称される礫・石が検出されている。兵庫県豊岡市の鎌田・若宮古墳群を除くすべての墓に、「石」という共通項がある。墓に強い共通性が見て取れるのではないだろうか。

このように、注口土器が出土した墓のほとんどは、「貼石」・「置石」等の共通項を持ち、四隅突出形墳墓同様に山陰地域の地域性を表出している。四隅突出形墳墓がこの地域を代表する者の墓であるとするなら、これらはなんらかの規制を受ける中で墳墓を造った者の墓となろう。山陰地域の部族連合の長が四隅突出形墳墓に埋葬され、その下にいた山陰各地の部族の長の墓ということが考えられないであろうか。[注11] とすれば、こうした墓から出土する注口土器は、四隅突出形墳墓を墓制の頂点とする体制の中で、なんらかの祭祀を行った者[注12]に供献されたもの、保持していたものとなろうか。

いずれにせよ、注口土器はこの地域を代表する土器のひとつである。しかも、鼓形器台のように広い範囲で使用されたものではなく、実用性はあるが希少性や出土場所の状況からみて、極めて限られた祭祀などの儀礼の場で用いられたものであろう。共通の墓制が広がった地域は、当然祭祀などにも共通性が考えられる。こうした祭祀に用いられる土器は、墳墓と同じく政治的にも中心となる儀式の演出者の規制や注文を受けて制作されたものであろう。政祭が一致する場合が多い当時にあって、政治の場でもある儀礼の場所での使用を第一目的とするこの土器の広がりは、政治状況を反映しているとも言えよう。

付表2　出土遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所在地	遺跡の概要・出土地点、遺構	期
1	波来浜遺跡	島根県江津市後地	石見海岸砂丘地域の一角にある弥生時代後期の列石墓群である。その他、中世墓も検出。B調査区で7基検出された列石墓の中の3号墓より出土。この墓は割石を不整形な方形に並べて墓域を形成する。規模2.7m×4.1m。主体部は不明。丹痕が2か所検出されている。注口土器は中央部から一括出土した6個の土器の1つ。	Ⅱ
2	的場遺跡	島根県松江市八幡町的場	松江平野東北部の低位丘陵頂部に位置する土壙墓。墳丘中央部よりもやや北側に墓壙があり、規模2.6m×4.1m。墳丘西側には底幅40～50cmの溝を掘り、その内壁に礫を積み上げた列石がある。列石規模は不明であるが8m前後と推定。注口土器は埋め戻した後に供献用の土器を配置したものの1つと推定される。	Ⅲ
3	長曽土壙墓	島根県安来市黒井田町	飯梨川東側に数多く分布する土壙墓の1つ。低位丘陵頂部平坦面に古墳と併存する。明確な土壙墓は、26基確認されており、台状墓、周溝墓、墓壙のみと3つのまとまりに区分される。注口土器は台状墓の東側土壙墓群の中の第6土壙墓上面	Ⅳ

			から鼓形器台に乗ったものが横転した形で検出。この台状墓は、西側斜面に貼石と考えられる列石が巡る。墓壙は平面方形を呈する２段墓壙。なお、土器群のそばから削痕のある置石と称される石が出土。	
4	中山Ｂ地区墳墓群	島根県邑智郡石見町中野	石見中央山間部の中央、標高210m、比高差30～35mを測る独立山塊の主・支脈上に、古墳・無墳丘墓等が群在する。無墳丘墓は、尾根に直交する溝で区画されただけの墓域に、棺をすえつけるもの。このような主体部が13基(土壙墓９、石蓋土壙墓１、箱形石棺３）検出されている。注口土器は、Ｂ地区中央箱形石棺から出土した。この主体部の両隣には石蓋土壙墓・土壙墓がある。箱形石棺は、２段墓壙で、副葬品はない。土壙上面より、葬送儀礼に伴う飲食行為があったと推測される土器群の一つとして注口土器は出土している。なお、土器群とともに標石と称せられる石が出土した。	Ⅳ
5	上種第５遺跡	鳥取県東伯郡大栄町上種	なだらかな丘陵平坦面に、弥生時代おわりから、７世紀後半にかけて断続的に営まれた集落跡である。検出遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝などである。注口土器は、「竪穴住居跡27号」より出土。同時期のものは４基ある。床面積88.2㎡を測る。最大規模を誇り、平面形は多角形を呈し、柱穴８を有す。中央部には２段土壙をもつ。「竪穴住居跡18号」という同規模のものがあり、これらはほかの住居跡の約４倍の面積を有し、付属する貯蔵穴の位置から、両者を結ぶラインが想定される。27号からは、装飾付き甕、注口土器、土製品、18号からは、勾玉、ベンガラ等祭祀的色彩を有すると考えられる遺物が出土する。以上の点から、特殊性、優位性、共同性、象徴性が指摘される。	Ⅳ
6	秋根遺跡	山口県下関市秋根	弥生時代～中世。住居跡、溝、土壙、柱穴、墳墓等多くの遺構を検出。注口土器は、台地中央部を流れる溝ＬＤ66の第３層(最下層)から出土。この溝は集落を南北に２分する。北側に３基、南側に12基の竪穴住居跡が所在した。	Ⅳ
7	観音免土壙墓	岡山県久米郡久米町神代	前方後円墳の墳形の確認調査で後円部の平坦面を調査したとき確認された３基の土壙墓群。注口土器は土壙２から出土。この規模1.25m×0.7m。土器は注口部のみで、一部丹痕を確認。隣の土壙からは鼓形器台、壺、甕等が出土。また、楕円形の扁平な石が置かれていた。	Ⅴ
8	宮ノ下遺跡	鳥取県倉吉市国府宮ノ下	方形周溝墓１、古墳１、古墳時代･奈良時代の竪穴住居跡11、掘立柱建物跡１、中世の古墓群等を検出。標高約30mの低位丘陵上にあり、伯耆国府が置かれた地でもある。注口土器は６号住居跡の床面から出土。平面形は隅丸方形。一辺約６m規模1.8m×0.7mの張り出しをもつ。周溝が張り出し部以外にめぐり、中央ピットがある。ミニチュア土器や手づくね土器を含む比較的多数の土器が出土。	Ⅴ
9	擲塚遺跡	鳥取県倉吉市国府擲塚、屋	宮ノ下遺跡の北西部に位置し、この遺跡と一体のものと考えられる。両者合わせると約150mにわたる集落跡となる。古墳	Ⅴ

		敷	時代の住居跡７基、袋状貯蔵穴、土壙等検出。注口土器はＡ地区の土壙墓と推測される土壙から出土。	
10	遠藤谷峯遺跡	鳥取県倉吉市大谷遠藤谷峯	弥生時代後半から古墳時代前半の14基の竪穴住居跡を検出。宮ノ下遺跡から1.5kmのところに位置する。注口土器は全部で４個(注口部が２個)出土している。下半部を欠くが、器形のわかるものは５号住居跡からである。規模が5.4m×5.6mの隅丸方形を呈するもので、床面積は23.7㎡を測る。周溝はない。３か所に土壙が掘られていた。住居跡の東半部には７～25cmの直径を持つピット列が取り囲むという特異なものである(西半部は不明)。812片の土器片が出土し、他を圧したかたちである。出土した注口土器はほぼ似た２個体である。この他８号、９号住居跡から注口部のみが出土した。８号住居跡は円形を呈し、床面積29.2㎡を測る。764片の土器片とともに鉄片、砥石１点が出土している。９号住居跡は円形に近い隅丸方形である。床面積50.2㎡。579片の土器片と砥石が１点出土した。この他、同時期のものが５基ある。	V
11	福市遺跡	鳥取県米子市福市	米子市福市の丘陵地帯にあり、集落と墓地の両方が検出された。吉塚地区53号遺構と称される一辺約6.5mの隅丸方形の住居跡より出土。この他、土器片に混じって土製支脚、手づくね土器、鉄鏃、砥石が出土。中央部に２段土壙をもつ。	V
12	矢谷遺跡	広島県三次市東酒屋町松ヶ迫	標高約229mの丘陵上にある弥生時代の土壙墓群と、やや北側に位置する四隅突出形前方後方形墓(ＭＤ1)1基、周溝墓２基である。注口土器はＭＤ１号墓から出土。この墓は、地山整形と盛土により低墳丘を築き、周囲に貼石を施すもの。南辺と北辺のコーナーに、袋状の突出部を削り出す。主体部は11基あり、有段墓壙、組合式木棺、土壙、箱式石棺、石蓋土壙	V
			とバラエテイに富む。中心主体は隔絶した規模の有段墓壙である。ここのみから玉類が出土。注口土器は、注口部が中心主体部の墓壙上面から他の供献土器(山陰の要素が濃い)とともに破砕された形で出土。また、これらの遺物に混じって墓標の石とする角礫が出土。その他、前方部東溝からも注口部が２点出土。なお、これらの供献土器以外に溝の東･北･南辺の土器だまりのものもあるが、中でも、特殊器台・壺が後方部のみに供献されていた点は興味深い。	
13	古殿遺跡	京都府中郡峰山町古殿	舌状に延びる丘陵裾の微高地に位置し、弥生時代後期から古墳時代前期及び平安時代、鎌倉時代にわたる複合遺跡。４次調査の内、２次調査時のSD02溝より注口土器が出土した。多数の土器とともに、古墳時代前期としては極めて珍しい４本脚を有す案を代表とする数多くの木製品の優品が出土した。これらの遺物は祭祀的な特徴を有するものも多い。	V
14	漆町遺跡	石川県小松市漆町	梯川中流左岸の標高約３ｍ前後の自然堤防上に立地する。弥生時代から断続的に継続する遺跡である。円筒形の注口部が７号溝の下層より出土。また、この土器に時期的に併行する遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝がある。	V

15	奈喜良遺跡	鳥取県米子市奈喜良	標高108mの独立山塊「橋本山」北側の緩やかに傾斜する丘陵の裾部に位置する。弥生時代中期後半から古墳時代前半の遺構が中心。竪穴住居跡10基、土壙２基、貯蔵穴５基等が検出された。先細りの注口部が３号住居跡より出土。住居跡の半分は消失していたが、長軸4.4mの楕円形を呈する。中央部に円形の土壙を有する。	Ⅵ
16	鎌田・若宮遺跡	兵庫県豊岡市鎌田若宮	円山川右岸の丘陵上に位置する。この地域一帯は多数の古墳群が分布する。その中央丘陵部の50～60基の小群をいう。注口土器が出土した３号墳は、主体部を２基もつ。尾根先端に位置し、地山を削り出して長方形の墳丘をつくる。長辺17～19mを測る。溝はない。主体部は木棺直葬である。墳丘中央部と第１主体部の２段墓壙の上面より出土。この土器の他、パレススタイルをした東海系の装飾壺など12個の土器が一括出土し、墓上祭祀の可能性が指摘されている。	Ⅵ

５．おわりに

古墳時代になり、大和地域を中心とした「前方後円墳体制[注13]」に各地域の連合体が参加し、政権が確立していった。この前提には、吉備地域に見られるような弥生時代に地域の集団墓から分離し独立していった墳丘墓に埋葬された者を代表とする、地域連合体があった。また、そこで行われる祭祀は、被葬者の霊威を鎮め、後継者が権威を引き継ぐ儀礼が共食儀礼とともに行われていたとみられる。こうした中で、吉備地方では、特殊壺形土器・器台形土器も発達した。

同様に、四隅突出形墳墓の広がる過程は、出雲を中心とした地域が、他地域との関係を深め連合体を発展させていく過程と考えられる。ただ、四隅突出形墳墓から直接出土し、そこで行われた祭祀に用いられたと考えられる特別な土器はない。山陰地域では、四隅突出形墳墓という、この地域を代表する墳丘墓は現れたが、これに直接ともなう土器はもたなかった。しかし、注口土器の分布は、地域的にも、時間的にも四隅突出形墳墓と近似した広がる過程を示す。出雲を中心に発達した注口土器が、四隅突出墓が広がる過程の中でこの地域で特別な祭祀に使用されたことは間違いない。何らかの規制を受けて作られた墓に眠る者は、四隅突出形墳墓に葬られる者と関わる時[注14]に使用された注口土器を大切に持っていたのではないだろうか。そして、古墳時代となり、山陰地域にも前方後円墳体制がしだいに浸透していく。それは、これまで行われた祭祀とは当然形が変わることを意味する。その時使用される土器もこれまでとは違ったものを必要とし、しだいに注口土器も姿を消していったのであろう。

この小文を記述するにあたり京都府埋蔵文化財調査研究センター、鳥取県埋蔵文化財センター、安来市教育委員会、石見町教育委員会、久米町教育委員会、両丹考古学研究会、

京都府立峰山高等学校の諸機関、楠　正勝、瀬戸谷晧、仲　明彦、中原　斉、西浦日出夫、安田　章の各氏には資料の収集やご助言等たいへんお世話になった。また、伊野近富氏、岩松　保の両氏には拙稿のご指導、数多くのご教示をいただいた。末文ではあるが、記して感謝の意を表したい。また、本来なら各報告書名を記して明らかにするべきところであるが、紙面の都合上掲載できなかったことをお詫びする。

（ふじわら・としあき＝京都府立峰山高等学校弥栄分校教諭）

注１　戸原和人・藤原敏晃「古殿遺跡出土の注口土器・案」（『京都府埋蔵文化財情報』第６号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982

注２　第18回埋蔵文化財研究会の当該地域発表論文。

注３　注口付きの脚台付鉢形土器は、弥生時代前葉に鉢の部分が山陰側の壺の影響を受けて、壺の形に大きく変化することが指摘される（妹尾周三「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集　1992）。このとき、逆に山陰側の壺に注口が付く影響が想像される。

注４　注３で触れたように、山陰の壺の影響によって鉢形から壺形に変化したようである。

注５　出土数が少ないのは何よりも非日常容器の証拠である。

注６　居住空間の意味。

注７　江坂輝彌「注口土器」（『古代史発掘２　縄文土器と貝塚』　講談社）　1973

注８　的場遺跡では共伴遺物に酒杯を連想させる小型の「低脚坏形土器」が２点報告されている。

注９　注口部のみの出土で、他のものと異質であり、これまで述べてきた注口土器と同一視できない危険もあるが、他に注口を持つ土器を今は知らないので取り上げた。

注10　山内紀嗣「９．四隅突出墓」（『弥生文化の研究』８　雄山閣）　1987

注11　岩松　保氏は、近畿地方の弥生時代の周溝墓の分析を通じて、変遷、階層差を論究されているが、山陰地域においては墓における石を一つの手がかりとして、こうしたものが分析できるのではないか（同「墓域の中の集団構成（前編・後編）」『京都府埋蔵文化財情報』第44号・第45号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992）。

注12　注口土器が出土した住居跡は、祭祀性の高い遺物が共伴し、何らかの祭祀と係わるものではないかと推測される。

注13　近藤義郎『前方後円墳の時代』　岩波書店　1982

注14　山陰の地域連合体制に加わったものか。

由良川中・下流域の第Ⅲ様式土器について・前編

田代　弘

1．はじめに

由良川流域の弥生土器研究は発掘資料に恵まれなかったこともあって、これまで散発的に出土した個体資料を型式学的に組列する作業が中心となっていた。(注1) 近年、舞鶴市志高遺跡や綾部市青野遺跡、福知山市興遺跡の発掘調査などにより中～後期の一括資料の集積がなされ、器種構成の検討や各様式の組列の変遷等に視点をあてた編年作業がある程度可能になりつつある。しかし、資料の蓄積は凹線文の盛行する第Ⅳ様式以降が中心であり、第Ⅰ～Ⅲ様式については未だ断片的でその様相は判然としないのが実情である。

最近、綾部市教育委員会によって青野遺跡第12次調査が実施され、第Ⅲ様式に関して若干の資料の増加があった。本稿では、この調査で出土した土器資料とこれに関連する2・3の資料を取り上げて提示し、由良川中・下流域の第Ⅲ様式土器の一端について考えてみることにしたい。

2．遺跡と遺物

小稿で取り上げる遺跡は、綾部市青野遺跡・青野南遺跡、福知山市宮遺跡、舞鶴市志高遺跡の4遺跡である。いずれも小地域の中核的位置を占める主要遺跡である。

青野遺跡は、綾部市街地北郊を流れる由良川左岸の自然堤防上に位置する集落遺跡で、継続調査の結果、弥生時代中期から奈良時代にかけて営まれた複合集落遺跡であることが明らかになった。(注2) 青野南遺跡は青野遺跡の南側に位置している。宮遺跡は、由良川支流の土師川と竹田川の合流部を見下ろす丘陵上に立地し、方形周溝墓・竪穴住居跡・溝などが確認されている。(注3) 中期中頃から後期後半にかけて断続的に営まれた広義の高地性集落である。志高遺跡は、由良川下流域を代表する集落遺跡で、第Ⅳ様式の住居跡群と方形周溝墓群が広範囲に確認され、この時期の集落構造を明らかにする資料として注目されている。(注4) 第Ⅳ様式土器の一括資料に恵まれ、タイプサイトとしても重要である。(注5)

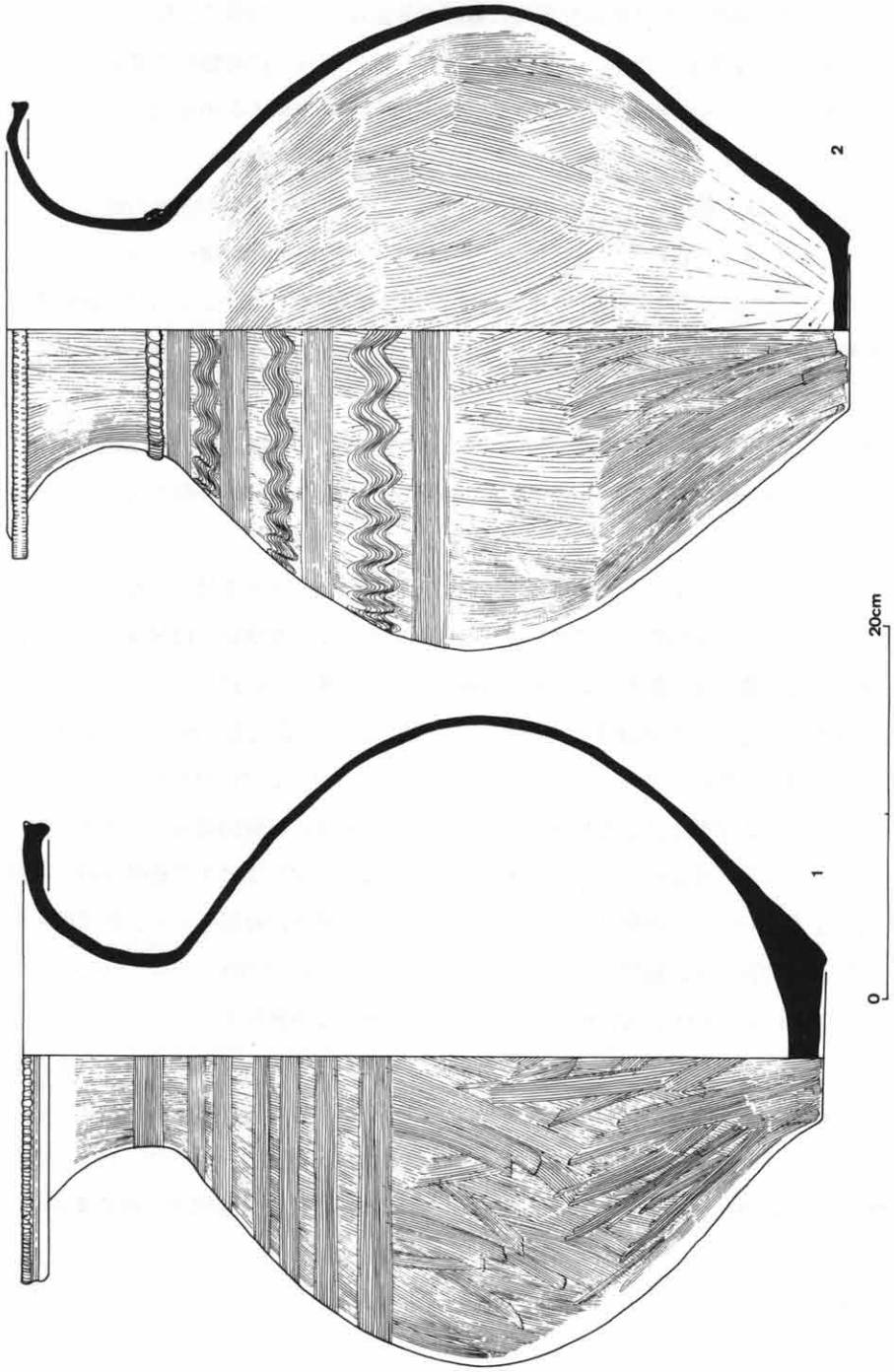
ここでは、これらの遺跡から出土した第Ⅲ様式土器のうち、まとまりをもつ資料群を中心に検討していくことにしたい。

①青野遺跡第12次第２調査区ＳＤ202出土資料（第１図～第３図）

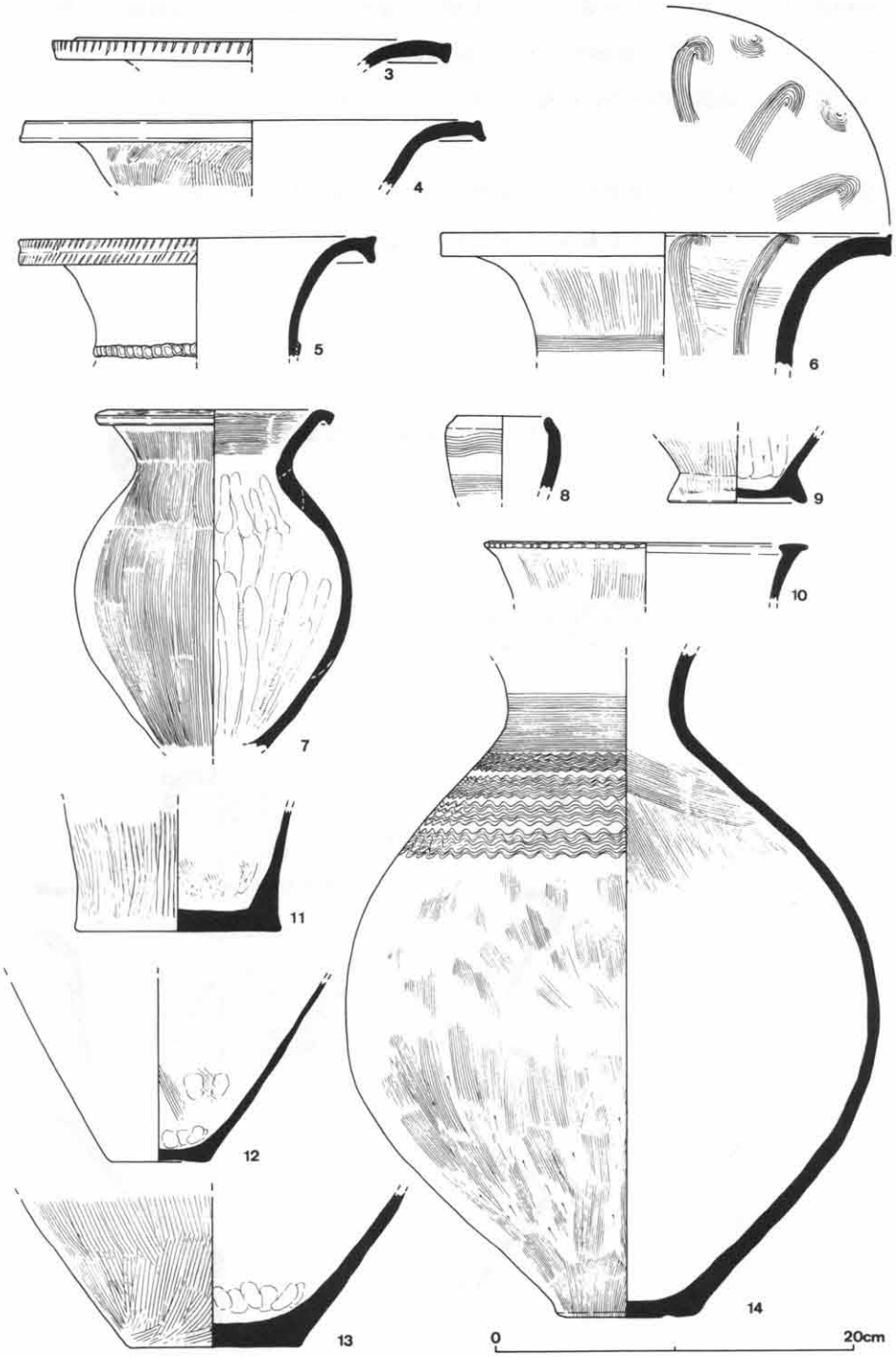
ＳＤ202は、第２調査区の中央部を東西に横断する断面Ｖ字形の溝[注6]で、検出面での幅約２ｍ、深さ約1.4ｍを測る。埋土は「底部と中央に青灰色ないしは黄褐色砂質土が見られ水流のあった」ことがうかがえ、この溝の埋没状況は「主に南側からの数次にわたる小規模な土砂の流入があり、その後北側から一括多量の流入によって溝中位まで埋没した。この時点で青灰色砂層を堆積する時間的経過があり、更に１～２回大量の土砂の流入により埋没」した[注7]。この溝は住居跡との位置関係から環濠の可能性も指摘されている。土器は、調査区東端部付近の溝底部と西端部の青灰色砂層（中～下層）から出土しており、短期間のうちに集積された資料と考えられる。広口壺・直口壺・細頸壺・受口壺・甕・蓋・高杯・鉢などが出土している。

広口壺（１～７・14・16）　広口壺には、円筒状の頸部から口縁部が大きく開くもの（１～６・14）と短く直線的に開くもの（７）、短く外反して外傾する広い端面をもつもの（16）とがある。

１・２は完形である。１は、口縁が水平に開く。端面に強いナデを施し、面の中央が沈線文状に凹む。体部は球形で、体部中央部に最大腹径がある。文様は、口縁端部上端に篦による刻み目文、頸部及び体部上半に櫛描直線文を施す。櫛は一単位13～14本である。調整は体部外面に刷毛目、内面はナデである。口径約25.1cm、器高約43cm、底径約8.6cm、最大腹径約35.4cmを測る。２は、口縁が水平に開いた後にやや下方に折れ曲がり、体部は算盤玉状を呈し、体部中央に最大腹径を有している。文様は、口縁部端面上・下端に篦による刻み目文、頸部に指頭圧痕文凸帯一条、肩部から体部中央にかけては櫛描直線文と櫛描波状文を交互に配する。調整は、体部外面は刷毛目、内面は口縁部をナデ、体部刷毛目、底部付近は、刷毛目の後に篦削り状の調整がみられる。口径約24.5cm、器高約45.3cm、底径約9.3cm、最大腹径約34.5cmを測る。３・６は口縁端部に櫛原板木口による刻み目文を施す。６は、頸部外面に櫛描直線文、口縁内面に扇形文および扇形文と櫛描直線文とを組み合わせた蕨手状文を交互に配している。15は、口縁を欠いているが頸部以下は完存している。肩部にあまり張りをもたず、体部はやや長胴である。頸部に一単位12～14本の櫛描直線文を２条、肩部に櫛描波状文を４条施している。櫛描直線文・波状文が複帯構成をとる点に特徴がある。体部内・外面とも刷毛目後ナデ調整である。外面下半に部分的にヘラ削り状の調整痕がみられる。残存高約37.3cmを測る。７は、口縁端部を折り曲げ外傾する面を作る。体部外面縦方向の刷毛目、口縁内面には横方向の刷毛目を施す。体部内面には強いユビナデの跡が明瞭に残る。胎土は砂粒の混入が多くやや粗い。口径約11.6cm、残存高約18.8cmを測る。16は、肉厚で大形の土器である。口縁部端面に板木口による羽状文を



第１図　青野遺跡第12次調査ＳＤ202出土遺物(1)



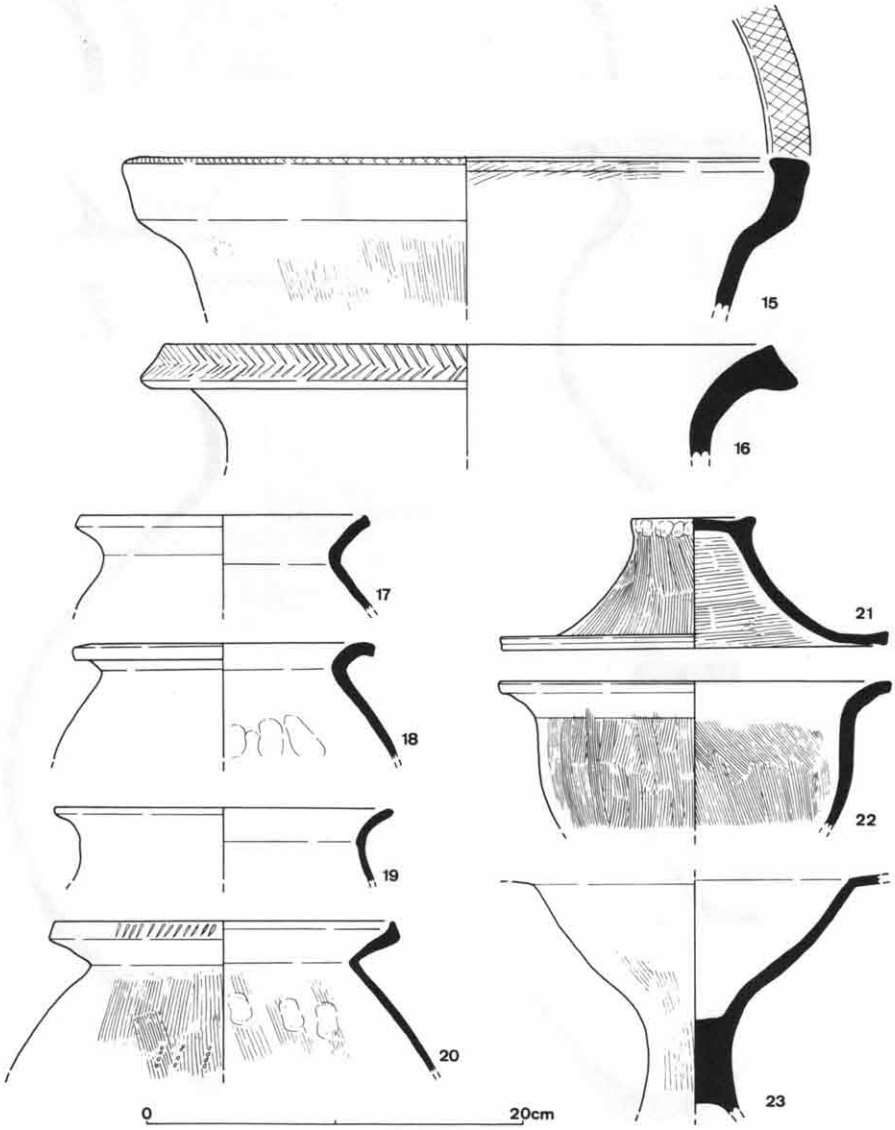
第２図　青野遺跡第12次調査ＳＤ202出土遺物(2)

巡らす。内・外面ナデ、口径は約34.7cmを測る。

細頸壺(8)　口縁がやや内傾して立ち上がり、頸部に2条以上の櫛描直線文を施す。口径約5.4cmを測る。胎土は微細砂を多く含みやや粗い。

直口壺(10)　端部を内・外に拡張して面を作り、口唇部に刻み目文を施す。口径約18cmを測る。

受口壺(15)　大型で肉厚である。口縁部上端に広い面を有し、斜格子文を施す。調整は外面に刷毛目、内面はナデである。口径は約36.4cmを測る。



第3図　青野遺跡第12次調査ＳＤ202出土遺物(3)

甕(17～20)　「く」の字状に外反する口縁部をもつもの(17～19・20)と大きく外反して水平に開くもの(18)とある。19は口縁の外反がゆるやかであり、如意形に近い。20は「はね上げ」口縁をもち、端面と体部に櫛による列点文を施す。調整は体部内・外面とも刷毛目である。

蓋(21)　大きく開く笠形である。器体内・外面を丁寧に刷毛目調整、口径約20.4cm、器高約7cmを測る。

鉢(22)　口縁部は、ゆるやかに外反しながら大きく開く。調整は内・外面とも刷毛目である。口径約20.5cm、残存高約7.7cmを測る。

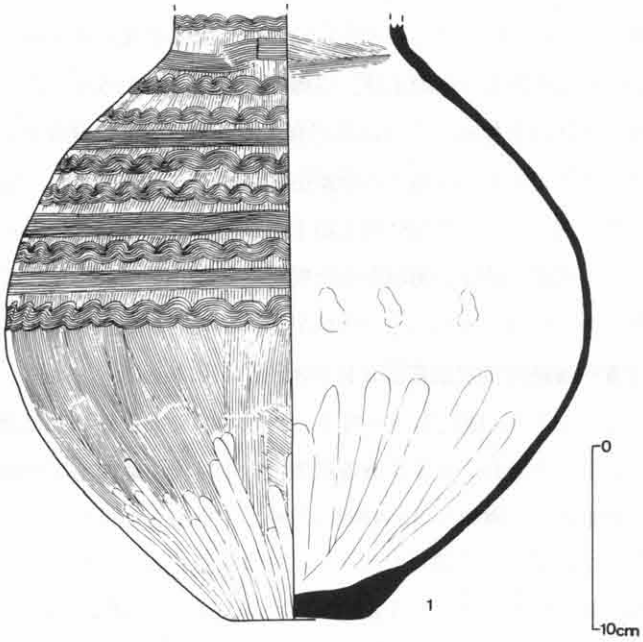
高杯(23)　水平に開く口縁部をもつ。端部の形態は欠損しているため不明である。杯部は深く、脚柱部は中実である。調整は、器体外面を刷毛後ナデ、内面はナデである。口径は19.4cm以上、器高12.8cm以上を測る。

9・11～13は底部である。9は鉢であろうか。内面に篦削りがみられる。

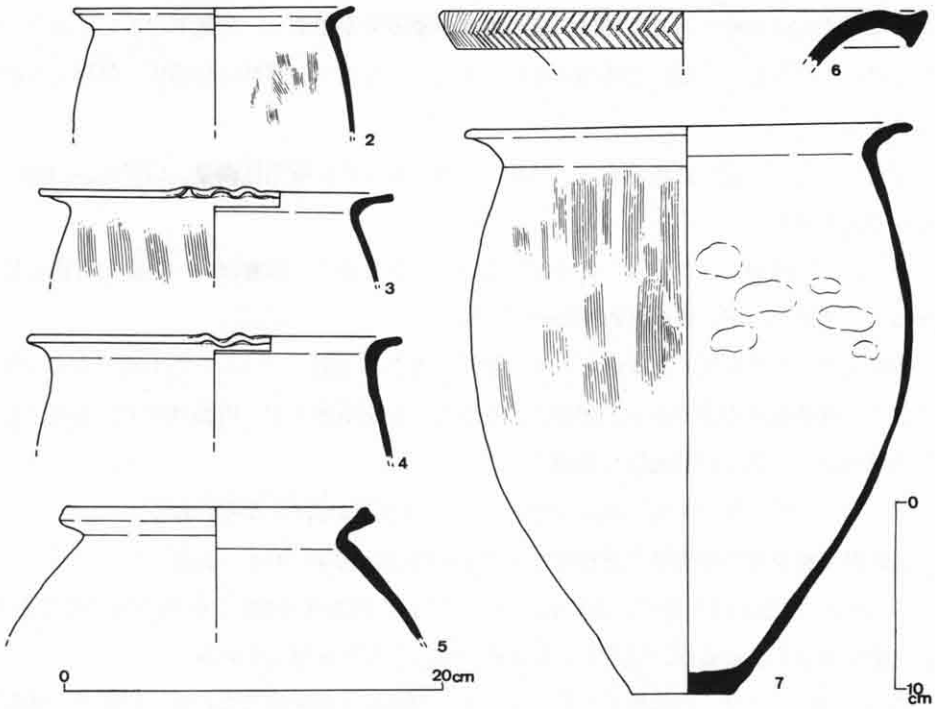
②青野遺跡第12次調査第1調査区ＳＤ102・105出土資料(第4・5図)

ＳＤ102・105は同じ溝で、次に述べるＳＫ103に隣接する幅1.2m程の浅い溝である。壺・甕が出土しているが、図示したもの以外は大半が細片化している。

壺(1・6)　1は、口縁部を欠損しているが頸部以下は完存している。円筒状の頸部と球形の体部を有している。頸部に櫛描波状文一帯以上、肩部から体部中央にかけて櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施している。体部外面は縦方向の刷毛目、下半部は刷毛目の後に篦削り状の調整を施す。内面は、頸部に横刷毛、体部にナデ、体部下半から底部にかけてところどころ篦削り状の調整がみられる。残存高約32.4cm、最大腹径約30.8cmである。6は口縁部が大きく外反する。端部に外傾する面を作り、端面



第4図　青野遺跡第12次調査ＳＤ102・105出土遺物(1)



第５図　青野遺跡第12次調査ＳＤ102・105出土遺物(2)

に櫛木口を用いて羽状文を施している。

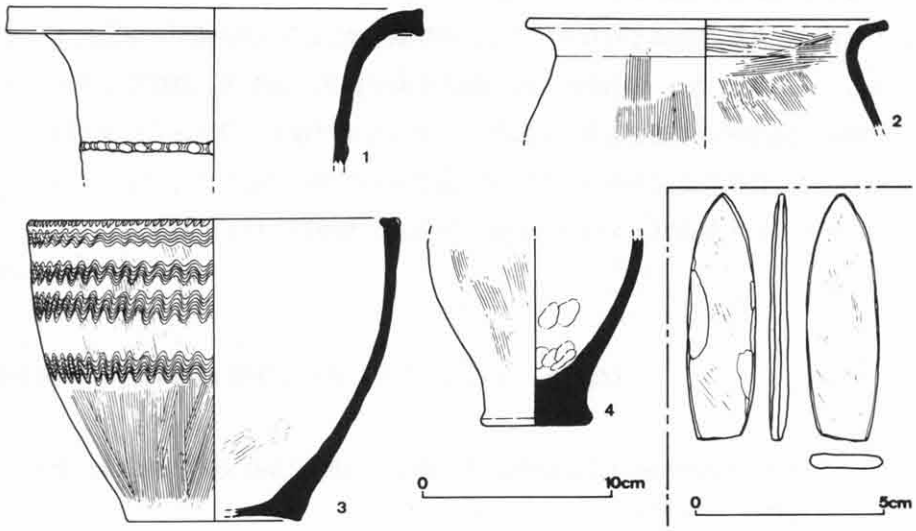
甕(２～５・７)　「く」の字状に外反し端面を丸くおさめるもの(２～４・７)と端部に外傾する面を作る「はね上げ」口縁のもの(５)とがある。３・４は口縁の一部を上下から押圧し波状部を作る。７はほぼ完存する資料である。調整は、体部外面に刷毛目後ナデ、内面はナデである。内面には指頭圧痕が残る。口径約24cm、器高約30cmを測る。

８は底部である。体部外面を刷毛調整後、底部外面を横ナデする。内底面には指頭圧痕がある。底面と断面に明瞭な接合痕がみられ、器壁が作られた後、底面が内側からの粘土充填によって作られた様子をうかがうことができる。

③青野遺跡第12次調査区ＳＫ103出土資料(第６図)

ＳＫ103は、長楕円形の土坑で、断面は中央部が深い船底状を呈する。青野遺跡では、Ａ地点で行なわれた第１次調査以降、弥生時代中期の土坑が数多く検出されている。土坑の平面形態は、溝状(長楕円形)、円形、不定形など様々であるが、いずれも断面が船底形を呈している点で共通しており、完形の土器や武器形磨製石器を含むものがあることから墓壙と考えられている(注8)。ＳＫ103もこれらと同様、墓壙と考えられる。

広口壺・甕・鉢・磨製石製品が出土している。



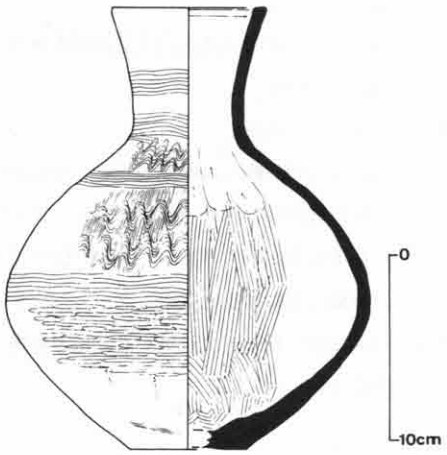
第６図　青野遺跡第12次調査ＳＫ103出土遺物

広口壺（１）　円筒状の頸部から口縁部が大きく開く。頸部に指頭圧痕文凸帯が巡る。器壁が荒れており調整は不明である。口径約21.8cm、残存高約９cmである。

甕（２）　口縁部は、屈曲せずに外反して立ち上がる。体部外面に縦刷毛、口縁部内面に横刷毛、体部内面に縦刷毛を施す。口径約19.2cmを測る。

鉢（３）　直口する口縁部を持つ。口縁部は端部をやや内側につまみ出して面を作り、口唇部に刻み目文を巡らす。体部上半に櫛描波状文を４帯施す。調整は外面縦刷毛、内面は刷毛の後にナデ。口径約19.8cm、器高約15.9cmを測る。ほぼ完存している。４はミニチュアの壺形土器であろう。底部が厚く、作りは粗雑である。体部外面は刷毛後ナデ、内面ナデ、底部内面に指頭圧痕が顕著である底径約5.9cm、残存高約9.8cmを測る。

５は磨製石製品であるが、一括出土したものであるので、参考までに掲げておく。全長約6.5cm、幅約２cm、厚さ約0.5cmを測る。器体を成形した後に、周縁に器体に直交する研磨を施して刃部を削り落としている。石鏃を儀器化したものか、鉄剣形石剣のミニチュアのいずれかであろう。粘板岩製である。



第７図　青野南遺跡ＳＤ16出土遺物

④青野南遺跡第６次調査ＳＤ16出土資料(第７図)

この資料は、方形周溝墓とみられる「く」の字状の溝(ＳＤ16)底部から単独出土したものである[注9]。器高約23.7cm、口径約8.2cm、胴部最大径約19.2cmを測る細頸壺である。直口する口縁部と偏球形の体部をもち、口頸部に２条の櫛描直線文、肩部から体部中位にかけて櫛描波状文と櫛描直線文を交互に配する。調整は口縁部内外面ナデ、体部は外面上半を刷毛目、下半に丁寧な篦磨きを施す。内面は刷毛目、頸胴間に指ナデが残る。

(以下次号)

(たしろ・ひろし＝当センター調査第２課調査第１係調査員)

注１　①石井清司「北丹波地域」(『京都府弥生土器集成』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989　25～28頁。

②石井清司「丹後・丹波地域」(寺沢　薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社)　1989　294～296頁。

注２　綾部市教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターなどによって断続的に調査が実施されている。

注３　辻本和美「宮遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

注４　肥後弘幸ほか「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告』第12冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

注５　住居跡や方形周溝墓出土の一括資料をもとに編年的考察が行なわれている。中でも、凹線文盛行段階から衰退期にかけての組列は豊富な資料を背景としており、当該地域の編年指標となるものである。

注６　中村孝行「青野遺跡第12次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第15集　綾部市教育委員会)　1988

注７　注６文献　16頁

注８　福知山市興遺跡では環濠とみられる弧状の溝の外側に50基近い土坑が配置されていた。これらは青野遺跡例と同様の形態を持つ。このうちの一基について埋土の脂肪酸分析を行なったところ高等動物由来のステロール類が検出され、人体埋葬遺構である可能性が高まった。(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989年調査。

注９　近澤豊明「青野南遺跡第６次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第17集　綾部市教育委員会)　1990

平成５年度発掘調査略報

13. 女 布 北 遺 跡

所 在 地　熊野郡久美浜町女布

調査期間　平成５年８月19日～同12月16日

調査面積　約1,550㎡

はじめに　今回の発掘調査は、丹後国営農地開発事業の女布団地造成工事に先立ち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査の結果、女布北遺跡は、縄文時代から平安時代に至る複合遺跡であることが明らかとなった。また、古墳時代後期の古墳１基についても調査を実施した。以下、主な遺構・遺物について略述する。

調査概要　縄文時代～弥生時代後期の遺構は検出されなかったが、調査地南辺の黒ボク層から縄文時代早期の押型文土器片や弥生時代中・後期の土器片が多数出土した。

弥生時代後期末ないし古墳時代前期の遺構として、竪穴式住居跡３基を検出した。そのうちの２基から、在地系の土器の他に山陰系の甕や鼓形器台などが出土した。

古墳時代後期には、残存長5.6ｍの横穴式石室を内部主体とする鶏塚古墳がある。石室内はすでに盗掘されていたが、須恵器・玉類・耳環などが出土した。出土した須恵器から古墳時代後期末（６世紀末）に位置づけられる。

平安時代の遺構としては、土器溜まりを検出した。ここからは50点を超す土師器椀・杯が出土した。平安時代中頃（９・10世紀代）に位置づけられる。

まとめ　今回出土した弥生時代後期末ないし古墳時代前期の土器群や平安時代の土師器椀などは、丹後地域の各時代の土器編年を考える上で、良好な資料群である。また、山陰系土器群が出土したことにより、山陰地方と丹後地域の交流をうかがうことができる。

（筒井崇史）

調査地位置図（1/50,000）

14. ジンド古墳

所 在 地　綾部市内久井町・金河内町

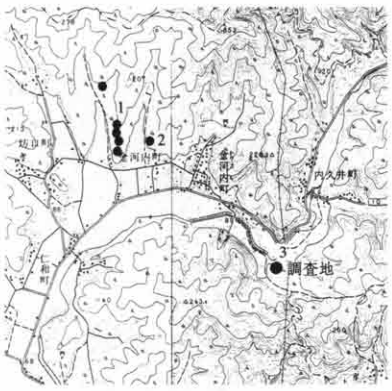
調査期間　平成５年５月12日～同10月14日

調査面積　約720㎡

はじめに　ジンド古墳は、由良川支流の犀川上流にある内久井町と金河内町の町境、わずかに開けた河岸段丘を見下ろす丘陵先端部に位置する。金河内町近辺には、山尾古墳群や八幡古墳など古墳時代後期の横穴式石室を主体部に持つと考えられる群集墳が犀川最上流部右岸に南面して位置する。今回調査したジンド古墳は、細尾根の丘陵先端部に独立して築造される。この地域では比較的大きな石室石材を有し、墳丘規模も直径20m近く、当該地域の世帯共同体的な小地域集団を統括する在地首長墓の可能性が想定された。今回、京都縦貫道建設に先立ち、京都府道路公社の依頼を受けて発掘調査を実施した。

調査概要　玄室は、長さ約3.1m・幅約1.5mを測る。羨道は長さ3.5mで、墓道部にむかって、幅広になる左片袖の横穴式石室である。羨道と墓道の境には閉塞石の下半部が遺存しており、玄室の閉塞と墳丘開口部の閉塞が同時に行われた可能性がある。

出土遺物は、須恵器(杯身・杯蓋・高杯・𤮔・短頸壺・提瓶・平瓶など)90点以上、鉄刀２振り(内鐔１点)、鉄鏃26本、馬具(素環鏡板付轡２点・鐙鎖１対・飾り金具など)、刀子８点、銀張耳環２点など多くの副葬品をみた。床面には棺台と考えられる小児頭大の石がおかれ、３人以上の被葬者が想定された。時期は、副葬遺物から６世紀後葉に位置付けられる。



調査地位置図(1/25,000)
1.山尾古墳群　2.八幡古墳　3.ジンド古墳

墳丘は西側部分で町境の溝が掘削、削平され明確ではないが、丘陵先端部の地形に制約され、直径17mほどの不正円形になると思われる。

また、墳丘の可能性が考えられた周辺丘陵平坦面のB・C・D地点では細長いトレンチを設定し、試掘調査した結果、古墳とほぼ同時期の土坑などを検出したが、周辺に石室墳の痕跡は認められなかった。土壙墓とすれば、１基の石室墳の周辺に須恵器破片を一点副葬するだけの土壙墓が散在して営まれた状況が想定できる。　(野島　永)

15. 山 根 古 墳

所 在 地　舞鶴市地頭

調査期間　平成５年７月８日～同10月22日

調査面積　約500㎡

はじめに　山根古墳は、由良川に臨む小高い丘陵の頂にある。標高は約40mで、平地との標高差は30m程度である。今回の調査は、京都縦貫道の建設に先立って、京都府道路公社の依頼を受けて行った。

調査概要　古墳は、横穴式石室をもつ円墳である。墳丘の下端に列石の一部が残っており、墳丘の規模は直径15m前後・高さ2.5m程度であったものと思われる。

埋葬施設は、右片袖の横穴式石室で、全長約8.5m・幅約1.5mの規模をもつ。玄室の高さは、実際には測定できないが、残存する奥壁の高さから1.8m程度と考えられる。石材は花崗岩である。玄室は長さ４m・幅1.5m、羨道は長さ4.5m・幅1.3mある。

副葬品には須恵器・土師器や鉄製品・装身具などがある。装身具は右側壁の奥壁寄りにあり、棺は頭を奥壁に向けて玄室右側に置かれていた。装身具には、金環が４点、勾玉１点・管玉８点・ガラス玉17点・水晶丸玉２点・水晶切子玉２点がある。また、練玉も400点程度出土した。鉄製品は13点出土した。短刀１点、鉄鏃２点、刀子10点がある。しかし、鉄刀などの大型武器や馬具は出土していない。須恵器は、80点余り出土した。杯身・杯蓋、椀、壺、高杯、甕、提瓶、平瓶、甑などがある。土師器は、高杯が２点あるだけであった。これらの土器の出土位置から少なくとも２回は使用されたことがわかる。

まとめ　山根古墳は、土器の年代から６世紀後半期の古墳である。この地域では横穴式石室をもつ古墳は多くない。山根古墳はこの辺りを支配していた有力者の墓と思われる。当時の大きな集落として桑飼上遺跡が対岸に位置している。山根古墳からは、真下に見下ろす位置に当たり、当時の「ムラ」と「墓」という関係が予想される。　（三好博喜）

調査地位置図(1/50,000　大江山)

16. 八木城跡第３次・堂山２号窯跡

所 在 地　船井郡八木町本郷

調査期間　平成５年４月７日～同９月24日

調査面積　約3,100m²

はじめに　八木城跡の調査は、国道478号バイパス（京都縦貫自動車道）建設に伴うもので、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。八木城跡は、室町時代の丹波守護代内藤氏の居城として、また、戦国期のキリシタン武将内藤ジョアンゆかりの城跡として知られている。これまで２年度にわたってその北東麓部分を調査しており、八木城に関係すると考えられる屋敷地跡や曲輪群などを検出している。

調査概要　今回の調査地は、人工的に造成されたと考えられる段状地形が残る地点である。この調査地からは、八木城関連の遺構のほか、古墳時代の須恵器を焼成した窯跡を検出した。この窯跡は、周知の遺跡である堂山窯跡に関連するものと考えられるので、堂山２号窯跡とする。また、道路建設予定地内にある春日神社本殿移転に伴いその基壇部分も調査し、基壇が17世紀前半頃に造られ、それ以前は湿地状であったことを確認した。

八木城関連の遺構としては、幅の狭い平坦地を段々状に造成した曲輪群を検出した。各曲輪の斜面からは、石垣の一部と考えられる石列や階段の名残りと考えられる石組などを検出した。また、曲輪５では石臼状石製品や井戸と考えられる遺構などを、曲輪８では石組井戸や雨落ちと考えられる「コ」の字状の浅い溝などを検出した。礎石状の石やピットを検出した曲輪もあり、何らかの建物があったことが予想される。出土遺物は、16世紀を中心とする。

第１図　調査地位置図

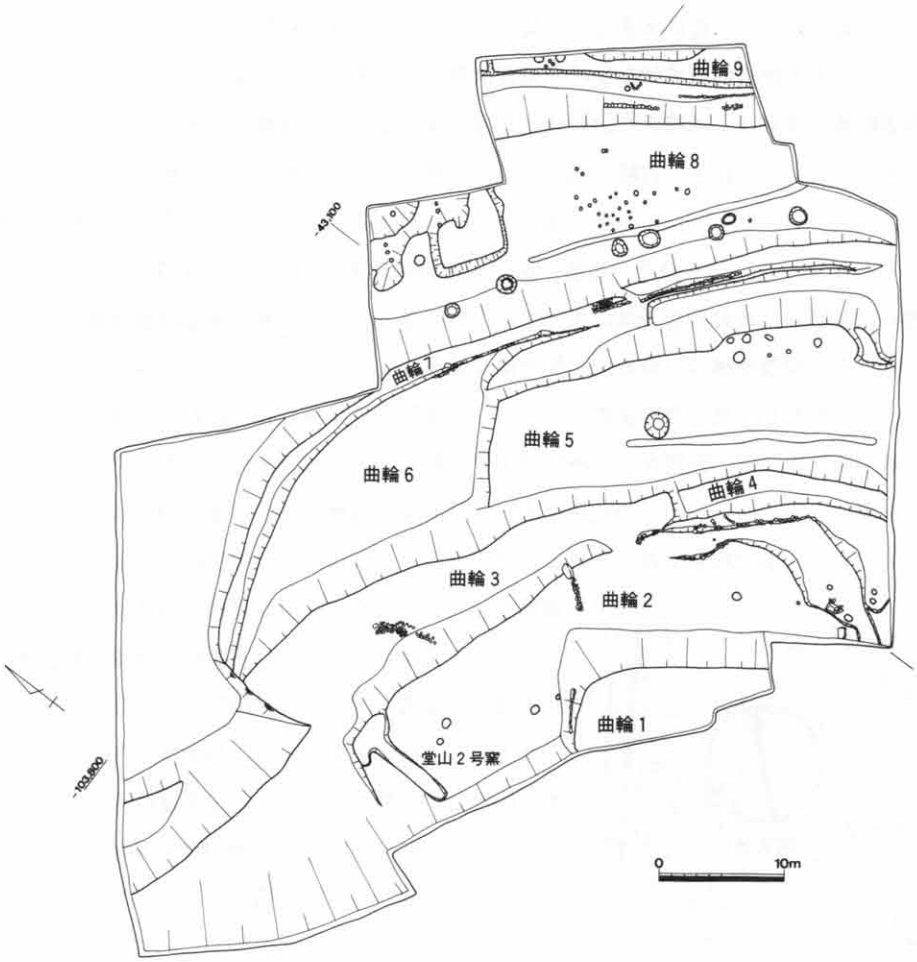
堂山２号窯跡は、調査地西側で八木城盛り土下から検出した。煙道部は、八木城造成時に削平されている。天井部が崩落しているが地下式窖窯と考えられる。地山の岩盤を掘り抜いている。窯体の残存長は約6.9m・最大幅は約1.5mである。窯壁には、

部分的に薄く粘土を貼った痕跡がみられる。なお、灰原は曲輪造成で削平されており、焚き口付近にわずかに残存するのみであり、須恵器の出土数は少ない。須恵器は、ＴＫ209型式期に並行するするものとみられ、６世紀末を前後する頃の窯跡と考えられる。

小結　今回の調査では、八木城に関連して、幅の狭い曲輪を段々状に重ねて地形を複雑にし、防御機能を高めた状況を検出した。また、下部の曲輪では、昨年度に検出した屋敷地跡に比べれば規模や設備内容では劣るものの、生活の痕跡がうかがわれる。これまでの調査を通して、城下との接点である山城裾部にもさまざまな施設があったことが知られる。

堂山２号窯跡は、古墳時代の窯体を検出したという点で、南丹地域では初例である。これまで６世紀前半頃の園部町大向窯跡が調査されているが、灰原のみの調査である。今回は、灰原がほとんど残存せず、製品の組成などの詳細が明確にできない点が惜しまれる。

（引原茂治）



第２図　調査地平面図

17. 北　尻　遺　跡

所 在 地　相楽郡精華町南稲八妻北尻

調査期間　平成５年７月７日～同11月12日

調査面積　約1,200㎡

はじめに　北尻遺跡は、『京都府遺跡地図』所載の周知の遺跡であり、遺跡内には地割や地籍図をもとに全長110m前後の前方後円墳(南稲八妻北尻古墳)の存在が想定されていた。この遺跡の調査は、過去に精華町教育委員会によって実施されていたが、このたび府道山手幹線道路がこの遺跡を南北に縦貫するかたちで計画されたので、その事前調査として、京都府土木建築部の依頼を受けて発掘調査を実施することとなった。

調査概要　調査は、古墳の存否の確認を優先する形で、対象地内に８か所の調査区を設けて実施した。その結果、古墳に関しては、周濠や外部施設などは全く検出されず、その存在はほぼ否定的となった。一方、調査区の広い範囲にわたり古墳～中世の包含層の存在が明らかとなった。とりわけ、遺物の出土が比較的顕著であった調査対象地の南半部で、古墳時代前期の土器資料が多量に出土する自然河道と、帯状に展開する礫敷遺構が接して検出された。礫敷遺構は、ゆるい円弧を描く幅２～４ｍの非常に浅い溝状遺構内に、５～30cm大の自然石を一重に敷き詰めたもので、調査区内では長さ10mにわたり確認した。この礫敷上面や礫と礫の隙間からは布留式土器が散乱した状態で出土し、黒色土がこれらの直上を覆っていた。一方、この北側を流れる同時期の自然河道から多量の土器が出土したが、完形を含む小形精製土器の占める割合が高い。このほか、この地区では奈良～中世の遺物を包含する大小の河道状遺構が数条検出され、これらの出土遺物の中には、奈良時代の重郭文軒平瓦や隆平永宝・墨書土器(須恵器杯Ｂ)なども含まれる。

調査地位置図(1/25,000)

まとめ　今回の調査により、当初推定されていた前方後円墳は、古墳と断定できる成果は得られなかった。代わって古墳時代～中世の遺構･遺物が検出されたが、特に古墳時代前期の礫敷遺構とそれに接する自然河道は、当時の生活の痕跡を直接示すというより、むしろ祭祀的な性格をもつものと理解したい。　(伊賀高弘)

18. 山城国府跡第30次（Ｓ’ＮＴ-4地区）

所 在 地　乙訓郡大山崎町大字山崎小字西谷

調査期間　平成５年10月20日～同12月３日

調査面積　約60㎡

はじめに　この調査は、府道樫原高槻線（通称西国街道）街路改良工事に伴うものである。調査地は、第４次山城国府のほか、山崎駅・河陽離宮・相応寺など、平安時代にこの地に造られた重要施設の推定地にあたる。調査地点は、ＪＲ山崎駅の南側で離宮八幡宮境内の東南隅、府道（西国街道）がクランク状に折れている場所である。

調査概要　境内の現地表から約1.0m下で整地層及び近世～中世遺物包含層に達し、1.6m下で中世遺物包含層が40～50cmの厚さで堆積する。この層を掘り込んだ土坑が数か所あり、土坑内に径30cm以上の石が投棄されているものがあった。包含層を除去すると粘砂土層と砂礫層が表われる。そこで土坑・井戸跡・焼壁が落ち込んだ溝・溝に平行する基壇状の高まりを検出した。井戸跡は２段に掘られ、上段が0.9m×1.1m、下段が一辺65cmの方形、検出面からの深さ約1.25mを測る。井戸枠などは見られなかった。埋土下層から、11世紀末～12世紀の土師器皿、瓦器椀が少量出土した。溝は土坑などで壊され不明瞭な部分もみられるが、石組みであることがわかる。溝は北で西に13°前後振る。溝の西側石敷きは幅40cm前後・溝幅約35cm、東側は１か所に石が残り、深さ９cm前後である。溝の東側の高まりは自然地形を利用し、溝との比高差は約40cmを測る。溝内から焼壁片に混じり「はなれ砂」が付着した平瓦片が少量出土した基壇状高まりで14世紀中葉の遺物が大量に投棄され埋まった土坑を検出した。

まとめ　自然地形を利用した基壇状高まりと石組み溝は、第４次山城国府などの施設に伴う遺構が考えられ、その後も継続して土地利用され大量に投棄された土器類から豪族か、公的機関の所在を推測させることなど新しい知見を得た。　（石尾政信）

調査地位置図（1/25,000）

研修だより

中国研修に参加して

－文化財保護研究者訪中団報告－

安藤信策・辻本和美・増田孝彦・竹原一彦

今回の海外研修は第２回目にあたり、前回に続き「文化財保護研究者訪中団」として中国を訪れ、商代の都城遺跡を中心とした研修を受けた。当センターからは４名が参加したので、以下に分担して報告を行う。

12月12日

訪中団が搭乗した日航便は現地時間の13時40分に、冬枯れた田園地帯の中に浮かぶ北京首都空港に着陸した。空港ロビーには中国社会科学院考古研究所の杜玉生先生と西苑旅行社の張連傑氏が出迎えられ、以後お二人は全行程同行して下さった。空港からはハイウェイを通って北京市街に向かった。市内では高層建物を建設中のクレーンが至る所に見られ、急速に近代都市へと変貌中であった。そして路上には自動車と自転車が溢れ、極めて活気に満ちている。午後から天壇公園の見学。天壇は明・清を通じて歴代皇帝が五穀豊穣を神に祈った所である。その中心の祈年殿は三層の円形大理石基壇上に建てられた三層屋根の円形建物であり、屋根の瑠璃瓦が冷気に包まれた北京の空に映えていた。夕方には1442年建設の世界でも有数の古い天文観測所である古観象台(北京古代天文儀器陳列館)を見学する。北京駅に近い北京国際飯店に泊。

12月13日

午前９時に王府井にある社会科学院考古研究所を表敬訪問する。任式楠所長と中西団長の挨拶が交わされた後、研究所の先生方との懇談を行った。暖かいジャスミン茶を前に和やかな懇談の後、図書室、各実験室、ビデオ映像を見せていただいた。午後は太廟に向かう。太廟は皇帝の祖先を祀る場であり、現在は労働人民文化宮となっている。北から順に後殿、中殿、太廟と見学し、南門を経て長安街に出るとそこは天安門前広場であった。幾度も近代中国の歴史的舞台となった天安門を背景に感慨深く記念写真を撮った。五穀の神を祀った場である社稷壇(中山公園)の見学を終えて、いよいよ故宮(紫禁城)に入った。世界最大の城門である午門をくぐると、我々はただ故宮の規模、華麗さに圧倒されるばかり

であった。太和殿、中和殿、保和殿と歩を進め、東側回廊で各時代の文物展示を見学した。その後、神武門を北に抜けて故宮の北の景山公園の万春亭に登り故宮全体を眺める。夕闇迫る故宮は紅殻色の城壁の中に幾重にも連なる黄色味のある瑠璃瓦屋根が広がり、幻想的な雰囲気を漂わせていた。

（竹原）

12月14日

北京駅を夜中の０時頃出発し、安陽駅には８時前に到着した。寝台車は暖房が良く効いており、旅の疲れもあって安眠する。北京駅の待合室で多数の人々が持参の布団でごろ寝をしていたのが強く印象に残った。朝食後、安陽市郊外にある安陽工作站を訪ねる。各地の工作站は中国社会科学院考古研究所に属する地方ごとの研究機関である。ここで殷墟の調査について説明を受け、展示室で出土遺物を見学する。中でも独立した収蔵室に保存されている車馬坑は２頭の馬、２人の馭者の骨や馬車の形が良く残っていて感銘を受けた。それから小屯村付近の商代晩期の小墓群の発掘現場に案内していただく。小墓は厚い黄土層を５ｍ余も掘り込んで営まれていた。これらの墓の発見には洛陽鏟という長い鉄製の検土杖が威力を発揮している。その実物と使用法を見学する。午後は殷墟博物苑に行く。東流して南下する洹河の西の、宮殿と婦好墓のある地区が遺跡公園として保存されていた。中央には大型建物を復原して陳列室としている。婦好墓は1976年の発掘で、婦好銘の60余点を含む440点余の青銅器、玉器、骨器も各600点近くが出土したことで名高い。報告書には土笛が３点掲載されていて、丹後の土笛の源流となるものと考えられている。次いで安陽市立博物館を訪ねる。ここは袁世凱の墓地であって、博物館の前は石像の並ぶ墓道、背後は約30ｍの円墳となっていた。それから明・清代の安陽城城壁を見学後、列車にて鄭州へ向かう。黄河を渡るらしい鉄橋の音に耳を澄ましたのは夕闇の中であった。鄭州泊。

12月15日

河南省都鄭州での一夜が明ける。朝一番に河南省博物館を訪問。館員の方の案内で見事な出土品のかずかずを見学。漢代の緑釉三層の楼閣や唐代の三彩の俑などが心に残る。次いで河南省文物研究所を訪ねる。収蔵庫の土器、青銅器等の貴重な出土品を見せていただくと共に、所員の方との意見交換の場を持つ。午後には大河村遺跡博物館へ向かう。約５千年前の仰韶文化期の住居跡であって、覆屋の中に遺構がそのまま保存されている。これは約５ｍ×10ｍの規模に３つの部屋をもち、さらに外側にも小部屋が附属した住居である。溝を掘り、柱を建て、横木を通し、葦を挟んで泥で壁を作り、乾燥させ、最後に火を焚いて完成させた家であるという。まさに今も人々が住む伝統的な煉瓦造りの民家の源流といえる。それから市内へ戻り、鄭州商城の城壁を訪ねる。鄭州市街の中に四方を囲む商代の

城壁の一部が残っており、約3300年前の殷墟よりもさらに古い商の都の一つと見られている。城壁を取り込んだ展示館と市内にある城壁を見学。幅20m・高さ５m前後の版築の城壁が現代の都市の中にどっしりと横たわっている景観は中国文明の奥行きを感じさせるに十分であった。

（安藤）

12月16日

朝８時、二日間の宿泊地、河南国際飯店を出発。雑踏の鄭州市街地を抜け、窟洞（やおとん）と呼ばれる穴居住宅を車窓に見ながら、バスは黄土地帯を西へとひた走る。鞏義市から伊洛川に沿ってしばらく進み鞏県石窟に到着。北魏から唐代にかけて開掘された石窟寺院で、磨崖大仏と５つの石窟、それに多数の仏龕が彫り込まれている。規模の点では龍門石窟に比べるべきもないが、彫刻の精密さ華麗さには心惹かれるものがある。鞏義市で昼食後、偃師（えんし）県の二里頭をめざす。二里頭の工作隊は、冬支度の茅の刈り入れに忙しい農村の一角にある。隊長の鄭先生から遺跡の説明を受けた後、建物屋上から宮殿跡区を遠望する。二里頭遺跡は、商(殷)代早期の標準遺跡で、商湯王の都城西亳（はく）(BC1600年頃)に比定され、中国でも最も古い都城跡の一つである。次に、洛河を挟んで近距離にある偃師商城の工作隊に向かう。ここでも展示室の見学後、少し離れた宮殿跡の保存区に行き、施設の屋上から邙（ぼう）山の山並みを眺める。バスが洛陽漢魏故城工作隊に到着したのは、午後４時を回っていた。いわゆる漢魏洛陽城は、現洛陽市街の東15kmの郊外にあり、後漢から北魏までの各王朝の都となった地である。ここの施設も村の中にある。話しによれば、以前は村の住人との間で色々な問題があったとのことである。現場運営の難しさは何処も同じか。洛陽市街への道路では、夕刻の渋滞する車の列に向かって、行商の一団が物売りの声をはりあげていた。車窓の外に、永寧寺の塔跡や漢の城壁、白馬寺が次々に夕闇の中に過ぎていった。夜は、宿泊地の洛陽牡丹大酒店で、工作站の主催になる晩餐が盛大に催された。この後、さらに夜の洛陽にくり出したグループもあったが、今回の旅行中、最もながいバスの旅は終わった。

12月17日

早朝から洛陽工作站を訪問、王所長以下所員総出の出迎えを受ける。工作站は、中庭をもつ静かな佇まいの中に各施設が配置され、外の市場の喧噪とは別世界のようであった。展示室では、一昨年に調査された白居易邸宅跡の出土品が目を引いた。昼前に工作站を辞し、次に、隋唐洛陽城の宮城正門である応天門の整備現場を見学。バスは洛河を渡り、私自身が今回の旅で一番楽しみにしていた龍門石窟に向かう。ただただ写真撮りに追われ、一つ一つ目に焼き付ける間もなく、白居易の墓・洛陽古墓博物館・洛陽博物館と、時間に追われながら全ての予定地を回り終えた。市内で古都洛陽での最後の夕食を摂り、20時12

分洛陽駅発の夜行列車で再び北京へと向かい、歴史の宝庫中原の地を離れた。

(辻本)

12月18日

10時45分北京駅着、昼食後、1985年に開通した道路を通り、万里の長城八達嶺へ。

万里の長城は、月から見える唯一の建造物といわれ、全長約6,000kmに連なった城壁である。紀元前500年頃の春秋・戦国時代の斉、燕、趙、魏、秦の諸国で築造が始まり、秦の始皇帝がこれら諸国の北辺の長城を利用しつつ30万の軍隊と数百万の農民を動員させ完成させたもので、等間隔に望楼・堡・烽燧の施設が作られている。現存の長城の多くは、明代のもので石と磚で作られている。長城付近の山は、本来何もなく岩が露出していたが6年前のアジア大会を契機にヘリコプターで種を播き緑化している。万里の長城を後にして、延慶県にある春秋時代の少数民族展示博物館である、山戎墓葬陳列館を見学する。山戎とは、狩猟・牧畜を中心とした少数部族で、戦国中期に部族消滅(同化)したものである。この遺跡は、1985～89年に約25,000㎡の発掘調査を実施し、500基の埋葬施設を発見し、うち10基を露出展示している。展示されているものは、博物館を建ててから調査を行ったもので、残る埋葬施設は全て埋め戻されて保存されている。埋葬方法は、身分により差が認められ青銅器→土器→無遺物となり、頭位は全て東に向けている。このうち、王墓と思われるものは、頭付近に青銅器、胴部付近に豊富な青銅製品を有し、頭部側の棺外には、馬10頭・羊7頭・牛数頭・犬5匹を埋葬するが、頭と足のみで胴部は埋葬されていない。この山戎墓は、中国の北方青銅器文化を考える上で重要な役割を果たしている。

夕食は、中国社会科学院考古研究所所員の方々と答礼晩餐会を行い、北京国際飯店にて宿泊。

12月19日

北京市内の近代文明および中国の経済流通事情の実践的視察をするため、市内見学。琉璃廠や燕莎友誼商城等で文房四宝(硯・墨・筆・紙)を購入する。昼食後、北京国際空港へ。15時20分発の日航便にて一路日本へ。19時25分大阪国際空港に無事到着し、20時20分解散。全8日間の中国研修を終了した。

(増田)

府内遺跡紹介

62. 宝菩提院廃寺

宝菩提院廃寺は、向日市寺戸町にかつて存在した宝菩提院の地下遺構として見つかった寺院跡である。現在の宝菩提院は、天台宗の寺院で、最終的に1964年に京都市西京区にある勝持寺に移転した。向日市寺戸町の跡地は、現在は完全に住宅地になっており、かつての建物の礎石は、庭石になっている。地名の寺戸の寺は、この宝菩提院のことを指す。

現在の宝菩提院には、貞観仏(８世紀末から９世紀の仏像)として著名な国宝檀像彫刻木造菩薩半跏像だけでなく、鎌倉時代の仏像で重要文化財に指定されている木造薬師如来立像や、その他鎌倉時代に至る多くの文化財を所有している。特に、国宝檀像彫刻木造菩薩半跏像は、宝菩提院跡地で見つかった寺院跡となにか関係があるのではないかという推定がなされており、その意味で、旧乙訓郡に所在する寺院の中でも重要な寺院である。

宝菩提院の草創は、寺院縁起(江戸時代の元禄年間の刊本)によれば、元々の名称を仏華林山願徳寺といい、持統天皇の夢のお告げによって建立されたというから、７世紀後半のいわゆる白鳳時代にまでさかのぼることになる。むろん、これは、寺院縁起であるため、詳しくはわからないが、宝菩提院跡出土瓦の年代から考えて、宝菩提院跡地で見つかった遺構に係わる寺院が７世紀中葉から後半にまでさかのぼることが確実となった。したがって、現時点では、この遺構が願徳寺である可能性がでてきたことはいうまでもない。

この願徳寺に関係する史料はそれほどは多くない。ただ、『広隆寺由来記』によれば、次のような伝承を記載している。すなわち、延暦16(797)年の５月５日に乙訓社の神木で作った薬師仏が突然光明を放ったので、人々が畏れ敬っていた。その後、仁明天皇の時代にこの仏の加護によって後宮に入り、妃にまでなった女性の尊崇を受け、ついに仁明天皇の勅でこの仏像を願徳寺に奉じたというのである。この仏像自体は、清和天皇の貞観年間に広隆寺に移されたとある。

遺跡所在地(1/50,000)

以上の記載は、あくまで伝承であって、必ず

しもすべてが歴史的な事実を述べたものではないが、少なくとも、平安時代の初めに山城国乙訓郡には願徳寺と称する寺院があって、広隆寺と深く係わったことが推定できよう。しかも、この伝承は、『日本紀略』延暦13(794)年12月11日条や『続古事談』にも見える。ただ、『日本紀略』では、仏像の奉じられたのは願徳寺ではなく、大原寺となっており、また『続古事談』では、丹後国の石造寺となっている点が異なる。このことについては、仏像がこれらの寺院をめぐって広隆寺にもたらされたとする説をはじめ、各説が提出されており、現時点では、元来どの寺院を舞台にして展開した伝承かはにわかには決めがたい。

このように、願徳寺は、平安時代の初めには確実に乙訓郡に存在し、延暦9年の「京下の七寺」に比定する説もある。しかし、平安時代以後は、この願徳寺も次第に衰退していったらしく、かなり荒廃していたようである。寺院も鎌倉時代のはじめには、長講堂領となったようで、願徳寺に対して、簾・半帖などが寺役として課せられている(『鎌倉遺文』556号文書)。このように、長講堂領の一寺院として記録にとどめられるにすぎなかった願徳寺であるが、鎌倉時代の末期から南北朝時代になると、ようやく復興されはじめる。願徳寺の中興の祖といわれるのが澄豪である。澄豪は、天台宗の阿闍利で、京都の小川殿(天台密教の穴太流、西山流)にあった地蔵菩薩を願徳寺に移すとともに、小川殿の院号も願徳寺に移した。このように、天台密教の穴太流が願徳寺に移されたことで、次第に寺院が復興されはじめた。この澄豪こそが宝菩提院二世なのである。

このときの復興によって、天台密教の穴太流にとって重要な文献である『阿娑縛抄』が盛んに書写されることになった。特に、澄豪は自らこの『阿娑縛抄』を書写しており、以後、願徳寺、すなわち宝菩提院が天台密教小川流の中心道場となった。そのため、小川流は、西山流とも呼ばれるようになった。

その後、願徳寺は、第三世豪鎮が院号を宝菩提院と称したことで、いつしか願徳寺が宝菩提院と称せられるようになった。この中世に隆盛をきわめた宝菩提院も、文明元(1469)年のいわゆる文明の兵乱によって、堂塔・僧坊などの諸堂を一宇も残さずに焼失してしまった。このときの復興に努力したのが第八世豪憲である。豪憲は、梵鐘の鋳造などの勧進を盛んに行っている。しかし、このときの復興も織田信長の元亀2(1571)年の兵火によって完全に焼失してしまった。

近世になると、慶長6(1601)年から再び復興に着手され、二年後には、堂塔が竣工されるところまでこぎつけ、寺地として4町、寺領として17石が安堵されるまでに至った。ところが、徳川家光の時代になって、西山流の統括寺院が山門の正覚院に移り、宝菩提院は輪番供僧という地位に甘んじたため、次第に寺院としての勢力が衰えるようになった。

このような歴史を持つ寺院であるが、宝菩提院下層で見つかった白鳳期の寺院の寺地は

かなり広かったらしく、古瓦が相当な範囲から出土していた。ただ、長らく本格的な発掘調査が実施されるまでにはいたらず、宝菩提院廃寺の現況や古瓦の紹介といった先駆的な研究が行われたにすぎなかった。しかし、1978年になって、旧宝菩提院本堂の南側で、立会調査が実施され、9世紀前半頃の井戸をはじめ、大量の土器類が出土した。この中には、かなりの数にのぼる墨書土器もあり、その記述から、「大衆院」という施設の一画であることが推定されるようになった。

このように、宝菩提院をめぐる研究は、まだ緒についたばかりであり、今後の研究を待たなければならない。特に、寺域の確定をはじめとして、考古学、歴史学、歴史地理学といった総合的な見地から究明していく必要があろう。

（土橋　誠）

<参考文献>

柏倉亮吉「宝菩提院及び一二の仏像」（『考古学』6-3　東京考古学会）　1935

植田小太郎「長岡京址近傍の古瓦について」（『史想』5　紫郊史学会）　1956

田中重久「広隆寺弥勒像弘仁九年以後輸入説」（『史迹と美術』310　史迹美術同攷会）　1960

大原治三「宝菩提院廃寺の研究（上・中・下）」（『乙訓文化』5・6・8　乙訓文化遺産を守る会）1966～1967

薗田香融「乙訓の古社寺（10）　願徳寺と霊験薬師仏」（『乙訓文化』14　乙訓文化遺産を守る会）1968

高橋美久二「寺院の建立」（『向日市史』上巻　向日市）　1983

山中　章・丸　嘉樹・藤田さかえ「長岡宮（京）跡立合調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第5集　向日市教育委員会）　1979

松崎俊郎「長岡宮跡第151次（7AN16E地区）～北辺官衙（北部）・宝菩提院跡～発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集　向日市教育委員会）　1986

高橋美久二「第2章　宝菩提院廃寺」（『長岡京古瓦聚成』　向日市教育委員会）　1987

渡辺　博「長岡京跡右京第145次（7ANBNO-2地区）～右京一条二坊一町、宝菩提院廃寺～発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第22集　向日市教育委員会）　1988

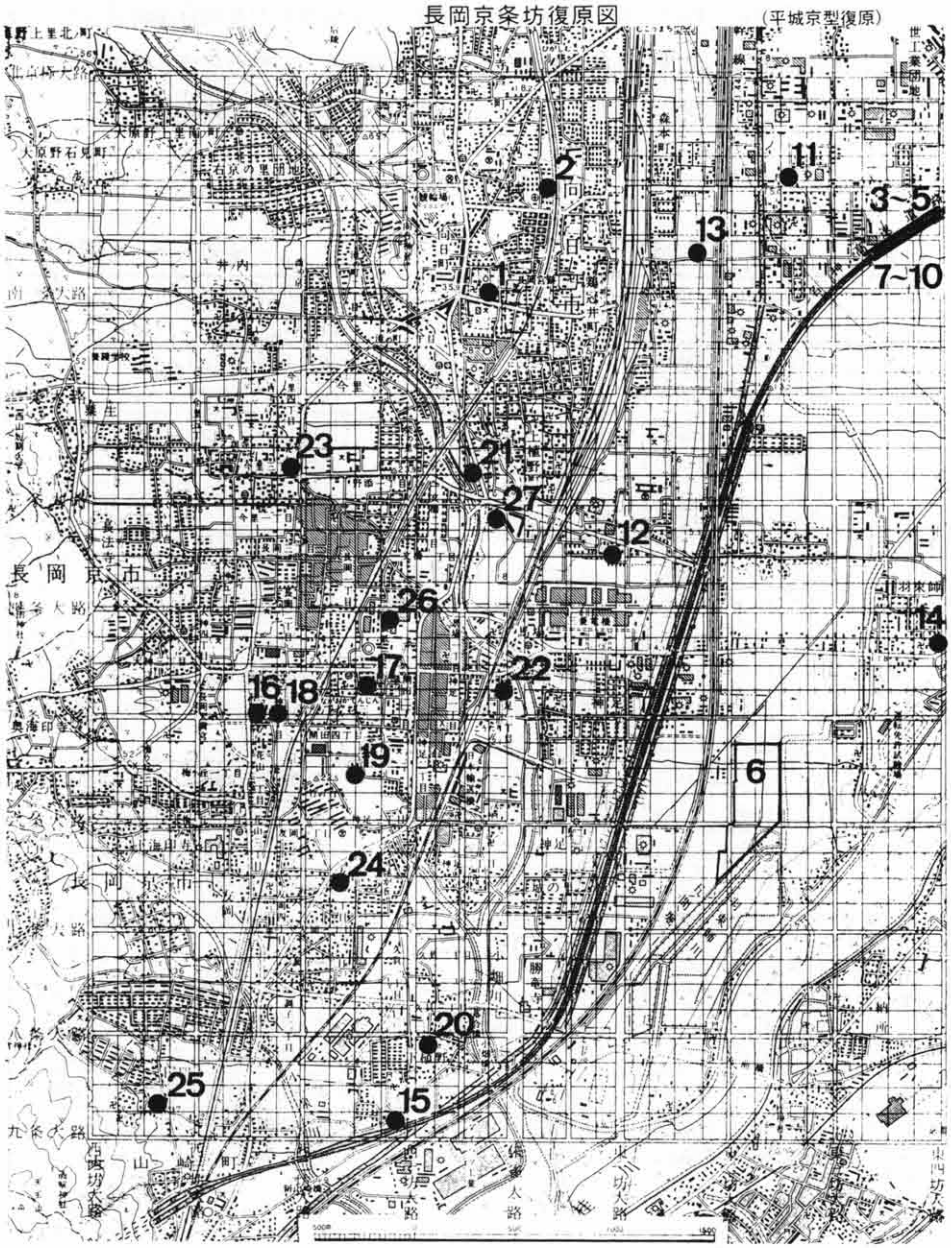
長岡京跡調査だより・48

平成５年11月24日・12月22日・平成６年１月26日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮内２件・左京域12件・右京域13件・京外その他５件の計32件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主要な調査の成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1994年１月末現在)

番号	次　数	地区名	調　査　地	調査機関	調査期間
1	宮内282次	7ANEDN-1	向日市鶏冠井町大極殿	(財)向日市埋文	10/4～11/19
2	宮内283次	7ANBHG	向日市寺戸町東野辺	(財)向日市埋文	12/6～1/21
3	左京286次	7ANWSA-2	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	4/7～12/22
4	左京303次	7ANVKN	京都市南区久世東土川	(財)京都府埋文	5/6～
5	左京304次	7ANVNR	京都市南区久世東土川	(財)京都府埋文	11/4～
6	左京306次	7ANYOB-1	京都市伏見区淀橋爪町	(財)京都市埋文	4/1～
7	左京313次	7ANWSA-3	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	7/26～12/22
8	左京314次	7ANWSS-4	京都市伏見区久我西出	(財)京都府埋文	8/2～10/28
9	左京315次	7ANWST	京都市伏見区久我西出	(財)京都府埋文	9/6～
10	左京317次	7ANWSG	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	10/25～
11	左京318次	7ANVHR-2	京都市南区東土川町	(財)京都市埋文	10/21～12/10
12	左京319次	7ANFOR-4	向日市上植野町落堀	(財)向日市埋文	11/15～12/27
13	左京320次	7ANEJS-11	向日市鶏冠井町十相	(財)向日市埋文	12/10～12/16
14	左京321次	7ANXKI	京都市伏見区羽束師	(財)京都市埋文	1/18～
15	右京428次	7ANTTD-4	大山崎町下植野寺門	(財)京都府埋文	10/18～1/19
16	右京440次	7ANKNZ-4	長岡京市天神一丁目	(財)京都府埋文	7/26～2/1
17	右京442次	7ANKTR-5	長岡京市開田三丁目	(財)長岡京市埋文	8/16～11/2
18	右京447次	7ANKNZ-6	長岡京市天神一丁目	長岡京市教委	10/1～10/31
19	右京448次	7ANMSI-13	長岡京市開田四丁目	長岡京市教委	10/14～11/15
20	右京449次	7ANTDK-2	大山崎町下植野代理分	大山崎町教委	10/13～11/20
21	右京450次	7ANFSR-2	向日市上植野町下川原	(財)向日市埋文	10/19～11/22
22	右京451次	7ANNSL-5	長岡京市東神足一丁目	(財)長岡京市埋文	11/4～1/6
23	右京452次	7ANIST-9	長岡京市今里三丁目	(財)長岡京市埋文	11/8～12/5
24	右京453次	7ANNND-2	長岡京市友岡二丁目	(財)長岡京市埋文	1/10～5/20
25	右京454次	7ANSBN	大山崎町円明寺仏生田	大山崎町教委	12/20～2/10
26	右京455次	7ANKYD	長岡京市長岡一丁目	(財)長岡京市埋文	1/20～3/10
27	右京456次	7ANFKR-4	向日市上植野町吉備寺	(財)向日市埋文	1/13～
28	山城国府跡第30次		大山崎町山崎西谷21-1	(財)京都府埋文	10/20～12/3
29	山城国府跡第31次		大山崎町大山崎藤井畑	大山崎町教委	11/20～11/26
30	中海道遺跡第24次		向日市物集女町クズ子	(財)向日市埋文	12/8～1/13
31	中海道遺跡第25次		向日市物集女町御所海道	(財)向日市埋文	1/6～2/7
32	向日市立会93119次		向日市寺戸町北前田	(財)向日市埋文	1/20.



▽番号は一覧表・本文（）内と対応

調査地位置図

宮内第282次（1）

（財）向日市埋蔵文化財センター

朝堂院西方官衙域で、推定豊楽院に相当する。5世紀後半の山畑古墳群に伴う方墳2基と、乙訓郡衙跡及び近世の興隆寺跡に係わる資料を確認。周溝の2/3を検出した5号墳は、一辺8mを測り、周溝の東コーナーの外縁に甕棺を付設する。同じく6号墳の周溝内からは、完形の須恵器高杯5点が出土した。

左京第303・315次（4・9）

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

名神高速道路拡幅に伴う調査。左京三条四坊二・三・七町域を占め、宮域の東方にあたる。弥生時代から中世に至る遺構を確認。長岡京関係の主な検出遺構としては、掘立柱建物跡4棟のほか、二条条間大路南北両側溝・東三坊大路東側溝がある。ただし、予定した東四坊西小路については、未検出である。建物跡には大型のものがあり、周辺から瓦や凝灰岩片が出土することから高級官人の宅地跡の可能性がある。なお、東土川遺跡に関するものとして、銅剣形石剣の破片が1点出土した。

左京第319次（12）

（財）向日市埋蔵文化財センター

東一坊大路と四条大路（旧四条条間小路）の交差点にあたり、弥生時代前期から中世・現代に至る各時代の遺構・遺物を検出した。四条大路に関しては、南側溝と路面を検出。幅約24m（約8丈）の規模を有することが改めて確認された。なお、東一坊大路の東側溝が検出されなかったことから、道路の交差については、四条大路を優先的に通していたことが判明した。このほか、鴨田遺跡に係わる古墳時代前期の河川跡から多量の布留式土器と炭化米が出土したことが特筆される。

右京第452次（23）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、右京四条三坊一町（旧三条三坊三町）及び今里遺跡にあたる。長岡京期については明確でないが、平安時代と思われる掘立柱建物跡3棟を検出した。いずれも南北棟で、うち1棟は身舎7間で、調査地外で不明な西側を除き三方に廂を持つ。

（辻本和美）

センターの動向（5．11～6．1）

1．できごと

11．2　荒坂横穴（八幡市）発掘調査終了（7.19～）

4　長岡京跡（京都市・名神京都工区－A-2地区）発掘調査開始

9　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（於：埼玉県）出席（城戸局長、佐伯次長、藤原主事）

黒部製鉄遺跡（弥栄町）発掘調査開始

10　堤　圭三郎理事、上野古墳（丹後町）ほか現地視察

北尻遺跡（精華町）関係者説明会、発掘調査終了（7.7～）

市坂瓦窯跡（木津町）発掘調査開始

11　両丹文化財保護連絡協議会（於：加悦町）平良課長補佐出席

15～20　全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修「韓国・歴史と文化を訪ねて」城戸局長、小山係長参加

16　職員健康診断

21～23　シルクロード奈良国際シンポジウム'93－文化遺産の保存と救済－（於：奈良市）出席（中谷次長）

22　長岡京跡（京都市・名神ＰＡ工区－B-1ｂ地区）発掘調査開始

24　池尻遺跡関係者説明会

長岡京連絡協議会

26　平安京跡（西別館北部）関係者説明会

長岡京跡（京都市・名神京都工区－C-2地区）発掘調査終了（4.7～）

29　山城国府跡（大山崎町）関係者説明会

12．1　奈具岡遺跡（弥栄町）発掘調査開始

2　第38回役員会・理事会（於：ルビノ京都堀川）、福山敏男理事長、城戸秀夫常務理事、中澤圭二、川上　貢、上田正昭、藤井　学、足利健亮、藤田价浩、武田　暹、堤圭三郎の各理事、加藤裕之監事出席

燈籠寺遺跡（木津町・井関川）発掘調査開始

3　山城国府跡発掘調査終了（10.20～）

梅谷瓦窯跡（木津町）発掘調査終了（4.12～）

6　長岡京跡（大山崎町・名神下植野工区－C-5ｂ地区）発掘調査開始

7　京都府法人運営協議会（於：るり渓少年自然の家）出席（城戸局長、佐伯次長）

足利健亮理事、伏見城跡（京都市）現地視察

9　女布北遺跡(久美浜町)現地説明会
穴川遺跡(亀岡市)発掘調査開始
10　上田正昭理事、池尻遺跡(亀岡市)現地視察
長岡京跡左京第303・315次調査(京都市・名神ＰＡ工区)現地説明会
遠所古墳群(網野町)発掘調査終了(8.20～)
長岡京跡(京都市・名神京都工区－Ｅ-2地区)発掘調査開始
教育法人協議会(於:京都府立盲学校)出席(城戸局長、佐伯次長、中谷次長、安藤課長、安田課長補佐、村田調査員)
12～19　文化財保護研究者訪中団(全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修)北京及び河南省各地の遺跡・博物館訪問、(参加)安藤課長、辻本係長、増田主任調査員、竹原調査員)
15　足利健亮理事、池尻遺跡現地視察
都出比呂志理事、梅谷瓦窯跡現地視察
21　池ノ谷遺跡(綾部市)発掘調査開始
22　女布北遺跡発掘調査終了(8.19～)
長岡京跡(京都市・名神京都工区-Ｃ-1地区)発掘調査終了(7.26～)
長岡京跡(大山崎町・名神下植野工区－Ｃ-4ｃ地区)発掘調査終了(10.18～)
1．5　韓国・中国海外研修報告会(於：当センター)
13　文化庁記念物課、井上和人調査官、市坂瓦窯跡現地指導
18　木坂古墓(綾部市)発掘調査開始
21　左坂古墳群(大宮町)現地説明会
木坂古墓発掘調査終了(1.18～)
池ノ谷遺跡発掘調査終了(12.21～)
穴川遺跡発掘調査終了(12.9～)
25　城戸局長、名神ＰＡ工区・京都工区(京都市)現地視察
26　長岡京連絡協議会
27～28　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック役員会(於:吹田市)城戸局長、杉江主事出席
28　伏見城跡関係者説明会
内里八丁遺跡(八幡市)関係者説明会
池尻遺跡発掘調査終了(10.7～)

(安藤信策)

受贈図書一覧（5.11～6.1）

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第165集　石曽根遺跡発掘調査報告書　東北横断自動車道関連遺跡発掘調査、同第183集　八幡野Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第186集　湾台Ⅱ遺跡・湾台Ⅲ遺跡発掘調査報告書　三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査、同第187集　館Ⅳ遺跡発掘調査報告書　国道107号新珊瑚橋整備関連遺跡発掘調査、同第189集　丸木橋遺跡発掘調査報告書　国道340号改良工事関連遺跡発掘調査、同第192集　下川原Ⅱ遺跡発掘調査報告書　滝名川河川改修関連遺跡発掘調査、紀要　ⅩⅢ(平成４年度)
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第122集　四本竹遺跡　芝川見沼第１調節池関係埋蔵文化財発掘調査報告、同第123集　埼玉県鴻巣保健所関係埋蔵文化財発掘調査報告　新屋敷遺跡－Ｂ区－、同第124集　狐塚遺跡　県営桶川川田谷団地関係埋蔵文化財発掘調査報告、同第125集　中耕遺跡　住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅵ－、同第126集　ウツギ内・砂田・柳町　一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅰ－、同第127集　原ヶ谷戸・滝下　一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅳ－、同第128集　上敷免遺跡　一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅴ－、同第129集　白草遺跡Ⅰ・北條場遺跡　川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ、同第130集　四反歩遺跡　川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ、同第131集　谷津・二反田・下向山　首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅰ－、埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報12　平成３年度、同年報13　平成４年度、研究紀要　第９号　1992、縄文の祈りと造形
(財)千葉県文化財センター	研究連絡誌　第37・38号、千葉県文化財センター年報　No.18、千葉県文化財センター調査報告第222集　千葉東南部ニュータウン18　－鎌取遺跡－、同第223集　千原台ニュータウンⅤ　－押沼第１遺跡Ｋ地点－、同第224集　千葉市地蔵山遺跡(２)、同第225集　佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書２、同第226集　八千代市坊山遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－、同第227集　新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅶ、同第228集　芝山町菱田梅ノ木遺跡、同第229集　主要地方道成田安食線地方道道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ、同第230集　下総町不光寺遺跡　－一般国道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－、同第231集　袖ケ浦市上泉遺跡　－一般国道横田停車場上泉線県単道路改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－、同第232集　滝ノ口向台遺跡・大作古墳群－一般県道君津平川

	線県単道路改良(幹線道路網整備)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－、同第233集　中台Ａ遺跡　－一般国道409号道路改良工事に伴う埋蔵文化財報告書－、同第234集　手古宮塚・上原遺跡　－(二)養老川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財報告書－、同第235集　千葉県北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－印旛郡本埜村五斗蒔遺跡・印西町宗甫遺跡－、同第236集　佐倉市南広遺跡　－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－、同第237集　千葉県中近世城跡研究調査報告書第13集　－鶴ヶ城跡・亀ヶ城跡測量調査報告－、同第238集　市原市永田窯跡群発掘調査報告書、同第239集　袖ケ浦市山野貝塚発掘調査報告書、同第240集　沼南町北ノ作１・２号墳発掘調査報告書、房総考古学ライブラリー７　歴史時代(１)
(財)君津郡市文化財センター	君津郡袖ヶ浦町　笊田遺跡・三ッ田台遺跡・大竹古墳群(１)　－大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－、－千葉県袖ヶ浦市－　中六遺跡Ⅱ、－千葉県木更津市－　小浜遺跡群Ⅴ　俵ヶ谷古墳群・マミヤク遺跡、－千葉県木更津市－　藪台遺跡群－藪台Ⅰ遺跡・藪台Ⅱ遺跡・藪台Ⅲ遺跡・六医王寺遺跡・上馬船遺跡－、－千葉県富津市－　前三舟台遺跡、千葉県木更津市　田蔵中塚発掘調査報告書、－千葉県袖ヶ浦市－　清水井遺跡、君津郡市文化財センター　年報No.10
(財)長生郡市文化財センター	(財)長生郡市文化財センター調査報告第16集　千葉県茂原市　野際遺跡、同第17集　千葉県茂原市　山崎横穴墓、同第18集　千葉県茂原市神田山第Ⅰ遺跡・菜摘台遺跡、同第19集　千葉県長生郡長柄町　下久保遺跡、同第20集　千葉県茂原市　猿袋横穴墓群、千葉県長生郡長南町　長南城跡確認調査報告書、長生郡市文化財センター年報No.７－平成３年度－
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団	新潟県埋蔵文化財調査事業団　年報
富山県埋蔵文化財センター	平成５年度　特別企画展図録　縄文土器の世界、富山県埋蔵文化財センター年報　平成４年度、富山県小杉町・大門町　小杉流通業務団地内遺跡群　第10・11次発掘調査概要、富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(３)　任海遺跡・吉倉Ａ遺跡・吉倉Ｂ遺跡、北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編７－境Ａ遺跡総括編
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県遺跡地図
多治見市文化財保護センター	多治見の古窯第３号　「美濃窯の焼き物」特集　写真で見る美濃焼の歴史、明和36号窯発掘調査報告書、明和32・33・38号窯発掘調査報告書、明和古窯跡群発掘調査報告書
磐田市埋蔵文化財センター	一の谷中世墳墓群遺跡　磐田市水堀地区画整理事業に伴う埋蔵文化

	財発掘調査報告書
(財)愛知県埋蔵文化財センター	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第42集 東光寺遺跡、同第44集 名古屋城三の丸遺跡
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	東海の中世窯 －生産技術の交流と展開－、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第６集 白坂雲興寺遺跡、同第７集 東山路遺跡
三重県埋蔵文化財センター	第13回三重県埋蔵文化財展 伊勢志摩をめぐる考古学、三重県一志郡嬉野町大字釜生田 天白遺跡、三重県埋蔵文化財調査報告99－２ ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか
(財)滋賀県文化財保護協会	県道高野・守山線特殊改良工事に伴う 高野・辻遺跡発掘調査報告書Ⅱ、一般国道161号(湖北バイパス)建設に伴う今津町内遺跡発掘調査報告書 高田館遺跡、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＩＸ－９ 南桜北遺跡 上代遺跡・北代遺跡、瀬田川浚渫工事他関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 蛍谷遺跡・石山遺跡、県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ－１ 法勝寺遺跡、同Ⅷ－３ 大手前・御所内遺跡、同ＩＸ－２ 樋之口遺跡・野田代遺跡・古堂遺跡、同ＩＸ－３ 常衛遺跡・観音寺城下町遺跡、南滋賀遺跡、錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅶ －付．近江国庁周辺調査概要－
(財)栗東町文化体育振興事業団	栗東町埋蔵文化財調査 1991年度 年報Ⅱ－下鈎・狐塚・上鈎遺跡－、栗東町埋蔵文化財発掘調査 1992年度 年報
(財)大阪文化財センター	第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料
(財)大阪府埋蔵文化財協会	(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第75輯 陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ 近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書
(財)大阪市文化財協会	大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅴ
奈良国立文化財研究所	能登縄文資料 山内清男考古資料６ 奈良国立文化財研究所史料 第39冊
(財)鳥取市教育福祉振興会埋蔵文化財調査センター	西大路土居遺跡 国道29号線津ノ井バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査、桂見墳墓群Ⅱ 桂見ニュータウン造成事業に伴う発掘調査報告書、古海古墳群 菖蒲遺跡 中小河川改修事業大井手川改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査
(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	喜多原第２遺跡発掘調査報告書、鳥取県米子市上福万妻神遺跡 －県道金屋谷米子線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－、大袋丸山遺跡 －市道上安曇大袋１号線桜木橋架換事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－、吉谷上ノ原遺跡 －土地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－、奥谷掘越谷遺跡、陰田 夜坂谷遺跡 隠れが谷遺跡 －調査概報－、米子市教育文化事業団文化財調査報告書１ 岡成第９遺跡、同２ 目久美遺跡 －下水道目久美町地内枝線その４工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－、同３ 米子城跡Ⅰ －米子市西町36－１地点－、同４ 新山遺跡群 奥陰田遺跡群 －調査概報－

島根県埋蔵文化財調査センター	一般国道９号安来道路建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅰ、一般県道市木井原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　父ヶ平遺跡・中ノ原遺跡　タタラ山第１・第２遺跡・製鉄遺跡の調査と記録、一般県道市木井原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　父ヶ平遺跡・中ノ原遺跡　タタラ山第１・第２遺跡・製鉄遺跡の調査と記録
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86　窪木薬師遺跡、同87　みそのお遺跡
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	年報　Ⅷ　平成３年度、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第108集　郡山城下町遺跡、同第110集　塚足遺跡、同第111集　三日市遺跡、同第112集　上滝川１号遺跡、同第113集　大原１・２号遺跡発掘調査報告書、同第116集　中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	空港跡地遺跡発掘調査概報　平成４年度
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ、松山市文化財調査報告書第34集　来住廃寺遺跡　－第15次調査－、同第36集　和気・堀江の遺跡、
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第152集　富沢・泉崎浦・山口遺跡(３)、同第159集　神柵遺跡発掘調査報告書、同第163集　富沢・泉崎浦・山口遺跡(４)　下ノ内遺跡、同第174集　安久東遺跡－第３次発掘調査報告書－、同第176集　平成４年度　年報14、同第177集　平成５年度郡山遺跡－第94次発掘調査報告書－
前橋市教育委員会	横俵遺跡群Ⅱ、荒砥工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書横俵遺跡群Ⅳ、横俵遺跡群Ⅵ、沼西遺跡　沼西Ⅱ遺跡、引切塚Ⅱ遺跡、谷端遺跡、平成４年度　市内遺跡発掘調査報告書、元総社明神遺跡ＸⅠ、内堀遺跡群Ⅴ、前二子古墳、宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　西久保遺跡、大屋敷遺跡Ⅰ、中原遺跡群Ⅰ、群馬県指定史跡　上泉郷蔵保存整備報告書
志木市教育委員会	志木市の文化財第20集　志木市遺跡群Ⅴ
東京都教育委員会	学芸研究紀要　第10集
鎌倉市教育委員会	今小路西遺跡(御成小学校内)第５次発掘調査概報、神奈川県鎌倉市今小路西遺跡発掘調査報告書、神奈川県鎌倉市　若宮大路周辺遺跡群(御成町868番地点)発掘調査報告書
小矢部市教育委員会	小矢部市埋蔵文化財調査報告書第37冊　平成４年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報、同第38冊　富山県小矢部市　小白山山麓遺跡・臼谷岡ノ城北遺跡
加賀市教育委員会	加賀市埋蔵文化財報告書第23集 猫橋遺跡、同第24集 熊坂庄司谷窯跡

大野市教育委員会	大野市文化財調査報告書　第５冊　山ヶ鼻古墳群　福井県大野市牛ヶ原・矢
勝山市教育委員会	勝山市埋蔵文化財調査報告 第10集 白山平泉寺 南谷坊院跡発掘調査概報Ⅲ
一志町教育委員会	一志町埋蔵文化財調査報告12　嬉野町埋蔵文化財調査報告７　天花寺山
嬉野町教育委員会	三重県一志郡嬉野町　中尾垣内遺跡発掘調査報告、三重県一志郡嬉野町　埋蔵文化財調査概要　平成２年度
安濃町教育委員会	安濃町埋蔵文化財発掘調査報告書８　岡副遺跡発掘調査報告書
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告21　草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書Ⅷ
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書第28集　長福寺遺跡、同第31集　斗西遺跡(第３次調査)
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書第36集　平成３年度　中主町内遺跡発掘調査年報、同第37集　県道野洲中主線関連遺跡発掘調査報告書－比留田法田遺跡・木部遺跡・虫生遺跡－、同第38集　平成４年度　中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ
山東町教育委員会	山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅸ　町内遺跡　－大原氏館跡・すも塚古墳－(第２次)、巡回展 掘り起こされた坂田の歴史
大阪市教育委員会	平成４年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
柏原市教育委員会	史跡高井田横穴公園整備事業報告、安福寺横穴群整備事業報告
泉佐野市教育委員会	平成４年度　泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要、泉佐野市埋蔵文化財調査報告26　若宮遺跡Ⅱ　－89-１区の調査－、同31　湊遺跡　－92-１区の調査－、同32　羽倉崎東遺跡　－92-1区の調査－、同33　檀波羅遺跡　－92-1区の調査－、同34　三軒屋遺跡　－92-9区の調査－、同35　三軒屋・ダイジョウ寺遺跡　－92-1区の調査－、同36　三軒屋遺跡　－92-14・92-15区の調査－、同38　三軒屋遺跡　市道沢池・机場線拡幅改良工事に伴う発掘調査報告書
阪南市教育委員会	阪南市埋蔵文化財報告ＸⅥ　阪南市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅷ、同ＸⅦ　飯ノ峯畑遺跡　－阪南都市計画道路事業箱作駅前線建設に伴う埋蔵文化財調査概要－
貝塚市教育委員会	貝塚市埋蔵文化財調査報告第23集　沢西遺跡発掘調査概要、同第25集　新井･鳥羽遺跡発掘調査概要、同第26集　加治神前畠中遺跡発掘調査概報　－仮称市民文化会館の調査－、同第27集　加治神前畠中遺跡発掘調査概要　－市庁舎第２別館建設に伴う発掘調査－、同第28集　三ヶ山オニ谷遺跡発掘調査概要、同第29集　貝塚市遺跡群発掘調査概要15
川西市教育委員会	川西市文化財資料館展示図録　遺跡から見た川西の古代・中世
龍野市教育委員会	龍野の文化財３　小神芦原の古代ムラ、龍野市文化財調査報告10　小神芦原遺跡　－龍野芦原団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財報告12 殿原廃寺(第４次) －市立泉小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－、同15 玉丘遺跡群Ⅱ マンジュウ古墳・小山古墳・黒福古墳群発掘調査概要報告書、同16 西在田地区遺跡群 －県営ほ場整備事業西在田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第24集
加東郡教育委員会	埋蔵文化財年報(1990年度)
西紀・丹南町教育委員会	大師山６号墳・宮田１号墳発掘調査概要報告書
篠山町教育委員会	篠山町文化財資料集第14集 篠山城旧三の丸跡 －たんば田園交響ホール建設に伴う調査概要報告書－、同第20集 篠山城旧三の丸跡発掘調査の概要－第１次調査～第15次調査－、同第21集 篠山城旧三の丸跡－11次・13次・14次調査－、同第23集 史跡篠山城跡第17次調査－下水管埋設に伴う発掘調査報告－、同第24集 黒田坪墳墓群、同第25集 篠山城旧三の丸跡 第21次調査
大和郡山市教育委員会	大和郡山市文化財調査概要25 郡山城33次 郡山城外濠(南田中地区)発掘調査報告、同26 高月遺跡第４次発掘調査報告、同28 平城京右京８条３坊３坪発掘調査概報、大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第３集 稗田環濠 発掘調査報告書、同第４集 奈良県大和郡山市城内町 郡山城跡第７次 追手東隅櫓・多聞櫓跡発掘調査報告書
山口市教育委員会	山口市埋蔵文化財調査報告第44集 桐ヶ浴・尾口山遺跡－鋳銭司団地造成に伴う発掘調査報告－、同第45集 寺内遺跡、同第46集 下長野遺跡
今治市教育委員会	今治市埋蔵文化財調査報告書第17集 今治市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ
行橋市教育委員会	史跡 御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定報告書 －行橋市文化財調査報告書 第21集－
唐津市教育委員会	唐津市文化財調査報告書第52集 唐津市内遺跡確認調査(８)、同第53集 久里双水古墳確認調査概要報告(２)、同第54集 十蓮Ⅱ遺跡、同第55集 日ノ出松遺跡
大分県教育庁文化課	遺跡が語る大分の歴史 －大分県の埋蔵文化財－、大分県遺跡地図
指宿市教育委員会	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 橋牟礼川遺跡Ⅲ、橋牟礼川遺跡Ⅲ 正誤冊子、同(11) 橋牟礼川遺跡Ⅳ、同(12) 橋牟礼川遺跡Ⅴ、同(13) 南摺ヶ浜遺跡、同(14) 南摺ヶ浜遺跡Ⅱ
岩手県立博物館	第８回国民文化祭記念 第37回企画展図録 じょうもん発信
陸前高田市立博物館	陸前高田市文化財調査報告第16集 門前貝塚 －県道広田半島線の改修に伴う緊急発掘－
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館 紀要第20号 1993－Ⅱ

栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第10号
群馬県立歴史博物館	第46回企画展 はにわ－秘められた古代の祭祀－
埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第15号、資料館ガイドブック No. 9 埼玉の窯業、歴史資料館と菅谷館跡
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第51～54集
流山市立博物館	流山市立博物館 年報No. 15 '93
金鈴塚遺物保存館	甦る金鈴塚 －金鈴塚古墳出土品図録－、企画展「甦る金鈴塚」記念講演会記録 金鈴塚が語るもの
東京国立博物館	保存修理報告書 江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌 銘大刀
大田区立郷土博物館	大田区立郷土博物館 友の会10周年記念号
足立区立郷土博物館	東京都足立区 伊興遺跡、発掘された古代の足立－伊興・舎人遺跡発掘調査概報－
調布市郷土博物館	民具に見る町人のくらし －佐俣好雄氏寄贈コレクションから－
出光美術館	出光美術館 館報第84号
塩尻市立平出遺跡考古博物館	小段遺跡発掘調査概報、塩尻の土偶
松本市立考古博物館	松本市文化財調査報告No. 104 松本市里山辺丸山古墳、同No. 105 松本市塩幸遺跡Ⅱ・Ⅲ 矢作遺跡 松蔭寺遺跡、同No. 106 松本市下原遺跡Ⅱ、同No. 107 松本市小原遺跡Ⅱ－緊急発掘調査報告書－、同No. 108 松本市百瀬遺跡Ⅱ、同No. 109 松本市北栗遺跡
長岡市立科学博物館	長岡市立科学博物館研究報告 第28号
氷見市立博物館	特別展 氷見を描くⅠ
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	一乗谷朝倉氏遺跡 一乗谷川水辺空間整備事業に伴う事前調査報告、特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 平成４年度発掘調査環境整備事業概要(24)、一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要 1992、一乗谷朝倉氏遺跡 県道篠尾・勝山線改良工事に伴う事前調査報告、特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ 第15・25次 第24次調査
静岡市立登呂博物館	<登呂遺跡基礎資料１>登呂遺跡第1次調査の記録、登呂むらのくらし
伊場遺跡資料館内埋文整理事務所	城山遺跡Ⅴ
愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	青銅鏡 －鏡にうつる愛知のクニ－
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館研究紀要 12
常滑市民俗資料館	特別展 猿投と知多の中世古窯展
半田市立博物館	研究紀要 No. 15
斎宮歴史博物館	企画展 熊野信仰の世界 －古代の祈り－
滋賀県立安土城考古博物館	秋季特別展 天下布武へ－信長の近江支配－
大津市歴史博物館	大津市制95周年記念特別展 古代の宮都 よみがえる大津京－飛鳥から大津へ、天智は、近江に何を求めたか－
大阪府立弥生文化博物館	弥生文化博物館研究報告 第２集

八尾市立歴史民俗資料館	動乱の河内、八尾市立歴史民俗資料館 研究紀要第４号、八尾市立歴史民俗資料館館報(平成３・４年度)
兵庫県立歴史博物館	総合調査報告書Ⅳ 出石郡
明石市立文化博物館	発掘された明石の歴史展－最近の発掘調査の成果から－
香芝市二上山博物館	第４回特別展 大津皇子の仏たち－古代寺院とせん仏たち－
橿原市千塚博物館	秋季特別展 古代のかお
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第20号
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館	平成５年度特別展 古代の島根と四国地方
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館研究紀要 創刊号、遊・戯・宴 －中世生活文化のひとこま－、サルからヒトへ －最古の文化と瀬戸内－
広島県立歴史民俗資料館	特別企画展 川に生きる－江の川の漁撈文化－、年報 平成４(1992)年度
新市町立歴史民俗資料館	相方発むかし行き 第２号 相方地区埋蔵文化財発掘調査の速報
伊都歴史資料館	高上石町遺跡 前原市文化財調査報告書第44集、前原地区遺跡群Ⅲ 同第45集、蔵持古屋敷遺跡 高祖遺跡群Ⅱ 同第46集、今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 同第48集、本田孝田遺跡・東スス町遺跡 同第49集、平原周辺遺跡(4) 同第50集、荻浦の文化財 前原市荻浦地区土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の速報２
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集 六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ
沖縄県立博物館	沖縄県立博物館年報 No.26、沖縄県立博物館紀要 第19号、企画展 刻まれた歴史－沖縄の石碑と拓本
茨城大学人文学部	博古研究 第６号
早稲田大学図書館	古代 第96号
早稲田大学本庄校地文化財調査室 本庄考古資料館	大久保山Ⅱ 早稲田大学本庄校地文化財調査報告２
大谷女子大学資料館	土井ノ内遺跡 －大谷女子大学資料館報告書第29冊－、牛頸 －同第30冊－
大手前女子大学図書館	大手前女子大学論集 第１～15号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度
黒川地区遺跡調査団	黒川地区遺跡群報告書Ⅴ
文化庁文化財保護部美術工芸課	重要考古資料選定会議 選定資料

八丈島八重根遺跡調査会	八重根 八丈島八重根漁港整備拡充工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
板橋市場内遺跡調査会	東京都板橋区 徳丸原大橋遺跡 東京都板橋区高島平６丁目１番地５号(東京都板橋市場花き部建設地)遺跡調査報告書
向原遺跡調査会	東京都板橋区 成増百向遺跡発掘調査報告書
都立学校遺跡調査会	菅谷遺跡 都立荒川工業高校内遺跡調査概報、田園調布南１ 都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書、同２
大島泉津道路遺跡調査団	大島泉津 波牛登り口遺跡
(株)名著出版	歴史手帖 第21巻12号、第22巻１・２号
鎌倉考古学研究所	神奈川県鎌倉市 佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書、神奈川県鎌倉市 今小路西遺跡－由比が浜一丁目213番３地点－
玉川文化財研究所	神奈川県相模原市 下森鹿島遺跡発掘調査報告書(先土器時代編)
全国天領ゼミナール事務局	第８回全国天領ゼミナール記録集、第９回全国天領ゼミナール資料集
(財)古代學協會	古代文化 第45巻第11・12号、第46巻第１号
河内長野市遺跡調査会	河内長野市遺跡調査会報Ⅴ 向野遺跡、同Ⅵ 金剛寺遺跡
六甲山麓遺跡調査会	芦屋市 月若遺跡－第10地点・第13地点－
加西市史編集室	加西市埋蔵文化財報告21 福居狭間・坂元狭間・三反田・石堂遺跡－発掘調査報告書－
木簡学会	木簡研究 第15号
朝鮮学会	朝鮮学報 第149輯
奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所論集 第十一・十二
島根県古代文化センター	中国自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
慶州文化財研究所	月城垓字 発掘調査報告書Ⅰ、文化遺跡発掘調査報告(緊急発掘調査報告書Ⅰ)
嶺南大學校博物館	嶺南大學校博物館學術調査報告第17冊 慶山林堂遺蹟試掘調査報告書
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター設立10周年記念誌 10年のあゆみ
八幡市教育委員会	発掘調査成果展 －内里八丁遺跡を中心として－
網野町教育委員会	京都府網野町文化財調査報告 第８集 浜詰遺跡発掘調査概要
峰山町教育委員会	下山横穴墓発掘調査報告書(Ⅱ)(京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第16集)
加悦町教育委員会	加悦町のはにわ－丹後地域におけるはにわの成立と展開－ 加悦町古墳公園はにわ資料館研究報告第１集
京都市歴史資料館	平成４年度 京都市歴史資料館年報
亀岡市文化資料館	第９回特別展図録 南北朝時代の丹波・亀岡
三和町郷土資料館	平成５年度企画展 ほそみだに－古文書にみる江戸時代の細見谷－
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度

京都橘女子大学	京都橘女子大学研究紀要 第20号
京都府立ゼミナールハウス	第4回京都国際セミナー 生態学からみた安定社会 多様性の維持と促進－タンガニイカ湖の魚類群集から－
京都市文化観光局	京都市の文化財 第11集
(財)京都府文化財保護基金	京都の文化財地図帳(平成5年改訂増補版)
口丹波史談会	口丹波史料九 形原記 巻一
福知山市役所	丹波の藍染 －丹波生活衣コレクション－
木津町役場	木津町の歴史
(株)京都書院本社	古代史探検 －京・山城－
安藤信策	龍門石窟
木下密運	図録『いまきのてひと－東大阪の文化交流－』、津観音大宝院の名宝展、津観音の歴史と名宝
小山雅人	ハングルの世界
土橋 誠	月刊文化財 11月号
樋口隆康	広瀬地蔵山墓地跡 奈良県文化財調査報告書(第51集)、平城京左京三条四坊十二坪 同(第52集)
深澤芳樹	飛鳥・藤原宮発掘調査概報 21・22
森島康雄	中近世土器の基礎研究Ⅸ

編集後記

年度末が近づき、ようやく春らしくなってきましたが、情報51号が完成しましたので、お届けします。

本号では、投稿論文が２本と、今年度の調査の中で、成果の上がった瓦谷遺跡の調査で出土した埴輪棺についての抄報を掲載することができました。いずれも力作で、今年度のフィナーレを飾るのにふさわしい号になりました。よろしくご味読下さい。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第51号

平成6年3月25日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷　中西印刷株式会社
〒602　京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)